

---

# 少女合体サヤナミカ

黒木猫人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女合体サヤナミカ

### 【Nコード】

N8705J

### 【作者名】

黒木猫人

### 【あらすじ】

宇宙から飛来する巨大生命体・宇宙怪獣の脅威に晒されている現代。人類は対宇宙怪獣用巨大人型兵器・スーパーロボットを用いることで、これに対処していた。スーパーロボットのトップパイロットを目指す、高校生の少年・白坂北斗は、姉であるスーパーロボット開発の世界的権威・白坂南に騙され、合体出来ない合体ロボット・サヤナミカを押し付けられてしまう。しかもこのサヤナミカ、あるうことか女のAIを持つ三体のスーパーロボットで構成される代物であり、圧縮ナノマシンという技術で、沙耶、奈美、未佳という人

間サイズの美少女に変身することが可能だった！ その性格は三者三様。当然、一筋縄で行くはずがない！ 北斗は果たして、落ちこぼれ三人娘を無事にサヤナミカへと合体させることが出来るのか！  
？ 目指せ合体！ 美少女スーパーロボットアクション！ 20  
11年11月28日に、大幅な改稿を行いました。

## プロローグ スーパーロボットな少女達

プロローグ スーパーロボットな少女達

俺は天才のはずだ。

天才の、スーパーロボットパイロットのはずだ。

というか、天才でなくてはならない。誰が何と言おうと天才なのだ、俺は。

だから当然、搭乗するスーパーロボットもそれに相応しい機体の必要がある。

だというのに。

「ねえ、北斗くん北斗くん！ 今日日は曜日だよ。ボクとどこかにデートしに出掛けようよ！ いいでしょ？」

日曜の朝っぱらから、我が家の食卓にて、元氣一杯にぴよぴよこと上下に揺れるピンクの尻尾が二つ。人は、それをツインテールと呼ぶ。

「ボクは遊園地がいいな。まずはジェットコースターでしょ？ コーヒーカップは必須だね！ バンジーがあるとこがいいな。お化け屋敷は欠かせないよね。最後は観覧車で、夜景を眺めて、いいムードになった二人は……えへへ」

「おいコラ、そのツインテール娘。何を勝手に妄想してる」

俺のツツコミなど聞いている様子もなく、向かいの席に腰掛けているピンク髪ツインテールの少女は、テーブルに身を乗り出して、大きく丸い瞳を閉じ、柔らかかそうな唇を尖らせて、

「ちゅー」

「誰がするか！」

空風沙耶にチヨップを喰らわすと、彼女は唇を尖らせたまま、おでこを擦った。

「ぶー、別に減るもんじゃないんだからしてくれたっていいじゃん

「！」

「うるさいぞ、沙耶」

言ったのは俺ではなく、沙耶の隣の席に腰掛けたライトブルーの髪色をした少女。俺から見て、向かい左斜めの席だ。

「黙って朝食の一つの食べられないのか、貴様は。そんなだから、いつまで経ってもスーパードロツトと言われるのだ」

腰辺りまで垂らしたポニーテールを揺らし、切れ長の瞳は朝食の焼き鮭に向けられている。白く細い指が規則的に箸やお椀を動かし、食事を口に運ぶ。

切れ長の瞳が不意に俺を睨み、

「第一、この男のどこがいいと言うのだ。口だけの自惚れ屋ではないか。我には全く理解が出来ん」

「おい」

誰が口だけの自惚れ屋か。聞き捨てならんぞ。

ライトブルーポニーテールの少女、海川奈美は「ふん」とそっぽを向く。

「自身のことを天才などと言う輩を信用出来るものか。貴様が博士の弟とはいえ、我らが今までフツて来たどんなパイロットよりも性格が悪い。過去最悪だ」

「それはこっちの台詞だっつーの！」

テーブルを叩く。何が悲しくて、天才パイロットたる俺がお前らみたいな小娘共の面倒を見ねばならんのか。

「そつだよ、言い過ぎだよ奈美ちゃん！」

と俺に続けたのは沙耶。

「北斗くんは確かに自惚れ屋で、性格も悪いけど、見た目だけは格好良いんだから！」

「何のフォローにもなつてねえよ！」

またも俺のツッコミを無視し、沙耶は奈美に人差し指を向ける。

「というか、奈美ちゃんは誰がパイロットでも同じことばっかり言ってるじゃないか。ワガママだよ！」

「慎重にパイロットを選んでるだけだ。我らは宇宙怪獣と戦う時、パイロットに命を預けるのだぞ？ 今までのパイロットは命を預けるに値しなかった。だからフツた。それだけだ！」

「フラれたの間違いでしょ！ そんな風に可愛げもなくツンツンしてるから、パイロットが寄り付かなくなるんだよ。一人クールぶっちゃってさ！」

「何だと貴様……我を侮辱する気か！」

席から立ち上がった奈美と沙耶の視線が衝突し、「うっ」と唸りながら火花を散らす。

先月までの日曜の朝は、もっと、雀のさえずりが聞こえて来るくらい静かで、優雅だったはずなのに、どうしてこんなことになっているのか。

ため息が出る。

「頭が重い……」

というか、物理的に頭が重い。

「おい、未佳」

「にゃあ？」

「そろそろ頭の上から退け。重い」

「え〜」

先程から俺の頭上にずっと顎を乗せていた三人目 金髪の少女が、不満の声を洩らす。

「ほーやんの頭の上はウチの特等席やのに」

「勝手に決めるな。いいから退け」

「にゃ〜ん、あと五分〜」

金髪猫っ毛の陸花未佳は、そのまま猫のような声を出して、ぐくりと頭頂部に顎を押し付けてくる。

「あー！」

それに気付いたらしく、ピンク髪ツインテールの少女がこちらを見て、声を上げた。

「未佳ちゃんずるい！ ボクが目を離してる隙に北斗くんとスキン

シップなんて！」

「だって、さーやんは今、なーやんと話し合つとるんやろ？ そしたらウチは暇やし、せっかくやから、ほーやんと遊んでようかなあって。ウチらことは気にせんでええから、さーやんとなーやんは二人で思う存分話し合つてや？」

「うつ……そ、そういう問題じゃなくて！ ほ、ほら、北斗くんだつて未佳ちゃんが頭の上に乗つてて重そうじゃないか！」

「そんなことあらへんよ。なあ、ほーやん？」

ここぞとばかりに必殺兵器を使用する金髪癖っ毛の少女。それは女性ならば誰しも持っているものだが、彼女は中でも人一倍重武装。

彼女は俺の背中に体重を掛け、その豊かな胸を押し付けてきた。

しかし、他の男はいざ知らず、色気仕掛けて俺を落とそうなど、

笑止千万。

「いや、重い」

「にやー!？」

裏切られた、という顔をして、未佳はやっと俺から離れる。ようやく肩の荷が下りた。色んな意味で。

沙耶は「北斗くん！」と瞳を輝かせると、ぱあつと表情を明るくして、

「やっぱり北斗くんはボクのこと……後でチューしてあげるね！」

ちゅー」

「断固拒否する！」

両腕を組んだ奈美がライトブルー色のポニーテールを揺らしつつ、未佳に不敵な笑みを浮かべた。

「フツ……胸など所詮は脂肪の塊ということだ。それを使って交渉など、愚かにも程がある」

ぴくりと眉を動かす未佳。

「なんやと？ 自分が貧乳やからって、ひがみかそれは」

「勘違いしないで貰おう。我は貧乳などではない、スレンダーなのだ。一切の無駄を省いた、実用的に優れた体型なのだ」

「……なーやん。それだとまるで、ウチが実用的じゃない、無駄だらけの体型みたいに聞こえるんやけど?」

「そう言ったつもりだが?」

こちらの二人も睨み合い、火花を散らし始める。我が家の食卓を中心に、リビングに漂い始める険悪なムード。

すると、沙耶が「まあまあ」と間に割って入った。どうやら仲裁するつもりらしい。

「胸の話はいいじゃない。未佳ちゃんみたいに大きな胸は確かに魅力的だけど、奈美ちゃんのようにすらっとしたスタイルも魅力的だよ。それにさ、胸があってもなくても」

沙耶はピンク色のツインテールを揺らしながら、満開のスマイルで言った。

「結局、一番可愛いのはボクなんだから、関係ないよ」

「ふざけんなっ!」

火に油を注いだけだった。

未佳の金髪癖っ毛がパチパチと電気を帯びて、浮き上がり始める。

「もう我慢の限界や……ウチのこと馬鹿にしおってからに……!」

「同感だな」

そう言う奈美のポニーテールを揺らしたのは、思わず身震いするような冷気。彼女を包むように渦巻き始める。

……って、おい。ちよつと待て。

「未佳、奈美、喧嘩するなら外でやれ! お前らが暴れると」

「にやあ ツ!」

「おわっ!?!」

未佳が掌から電撃を放ったのはその直後だった。ターゲットは沙耶ではなく、その隣にいた奈美。

途端、ライトブルーのポニーテールが横一線の軌跡を描く。奈美が飛んで回避したのだ。

電撃は空を切って、リビングの壁に当たり爆発、ぽっかりと風穴を開けてくれた。ちよつ……どうしてくれんだコレ!?



食卓から離れたところに両足を着いた奈美が、切れ長の瞳を金髪癖っ毛の少女に向ける。

「未佳、貴様……どういっつもりだ」

「なーやんは何か勘違いしとるようやけど、ウチが怒ってるんは、なーやんに対しても一緒ってことや」

「ふん、よかるう……ならば貴様ら二人、まとめて相手をしてくれる！」

奈美は左手を未佳、右手を沙耶の方に構える。

「えっ、ボクも!?!」

「当たり前だ！」

奈美の両腕の横に冷気が集まり、宙に浮く、二つの巨大な氷塊を創り出す。それは水晶の形状に似て、長さは七十センチ程。

「くらえ、アイスミサイル！」

その言葉を合図にし、二つの氷塊がベクトルを得て、それぞれ沙耶と未佳に放たれる。

猫のような身のこなしでかわす未佳に対し、「うわわっ！」と頭を下げ避ける沙耶。流れ弾となった氷塊がキッチンに突っ込み、今度は冷蔵庫と電子レンジを貫き破壊する。

その光景を見つつ、沙耶は額の汗を拭う。

「ふい〜、危なかったあ〜」

と、その時だった。

「サンダークロウ！」

「ほえ？」

振り返る沙耶の視線の先には、雷撃を纏った爪を振り下ろす未佳の姿。

驚いて目を丸くするピンク髪少女のツインテールの右片方が、ぼろりと床に落ちた。

「ぎゃー！ ボクの大事なチャームポイントがあ　ッ!?!」

未佳が「にゃんと」と唸って、

「さーやん、まさか、咄嗟に身を横に逸らして難を逃れるとは」

「逃れてないよ、大ダメージだよ！ ツインテールがサイドテールになっちゃったよ！？ なんてことしてくれるんだよ未佳ちゃん！」  
「知らんわ！ 髪の毛の尻尾の一つや二つ、人間じゃないんやから、それくらい博士に頼めばすぐに直るやる！」

「未佳ちゃんは全然分かってない！ まだ物語の冒頭、いわゆるプロローグってやつだよ！？ そこでメインヒロインの一人の髪型が変わっちゃうってマズいでしょ！ 今後ボクは特に描写がない限り、サイドテール娘として勝手にイメージされるようになってっちゃんかもしれないんだよ！？ そしたら未佳ちゃん、どう責任取ってくれるのさ！」

「何の話やねん！」

ゆらりと立ち上がった沙耶は胸の前で両手を重ねる。

「もう怒ったぞ……許さないんだから……！」

沙耶の腕回りを螺旋状に炎が走り、重ねた掌を徐々に離してゆく。やがて螺旋の炎は掌の間に収束、大きさバレーボール程の火球を造り出す。

「ファイアーボール」

沙耶はそれを天井近くまで投げ、ジャンプし、

「スパアアイクツ！」

未佳に向かって思いっきり強打した。

「にゃう！」

襲い来る火球をサンダークローで横に弾く未佳。行き場を失った火球はテレビに直撃し爆発、テレビ自体はもちろん、爆風でリビングの窓ガラスを全て、粉々に吹き飛ばす。

そんな中、奈美が自らの右腕を凍らせて、沙耶に突撃する。凍らせた右腕の先端は氷柱のように細く尖っており、さながら氷の槍のよう。

「我のことを忘れてるぞ！」

「そんな攻撃、当たるもんか！」

素早い連続突きをかわして、沙耶はバックステップ、同じく右手

の握り拳に炎を集め、剣を出現させる。

「ふん！」

「てえええい！」

氷の槍と炎の剣が交差し、水蒸気が噴出する。

一方の未佳は、二人が激しい剣戟を繰り広げる横で、両手に雷撃を溜めている。雷撃は沙耶の造ったファイアーボールのように球形に変化。未佳は両手をキャノンの砲身のごとく突き出し、狙いを定める。

「余所見は……あかんで！」

雷球が発射され、それぞれ沙耶と奈美に迫る。

いち早く反応したのは奈美。舞を踊るように回避する。

「ぶっ、どうした。攻撃が止まって見える」

奈美が再び沙耶に視線を戻すと、沙耶は野球のバッターのように、炎の剣を構えていた。飛んで来た雷球をかつ飛ばし、軌道を奈美の方に曲げる。

「ぶっ！？」

加速のついた雷球に反応出来ず、奈美は顔面に直撃を喰らった。

沙耶は「わーっはっはっは！」と高笑いをして、

「ボクのことを忘れていたようだね。油断しちゃいけないよ？ 奈美ちゃん」

「けほっ、けほっ！ ……おのれ、貴様ら！」

咽せる奈美は、顔を真っ赤にして、怒鳴った。

「どこまでも我をコケにしおつてからに……絶対に許さん……！」

表に出る！ 貴様ら二人、本気で叩き潰してくれろ！」

「別に構わないよボクは？ 未佳ちゃんにもツインテールをサイドテールにされた借りを返さなくちゃならないしね！」

「上等や！ 受けて立つで！ ウチかて胸のこと馬鹿にされて腹が立つとるんや！ 貧乳の腹いせに騒ぐ、誰かさんのせいだな！」

「貧乳ではなくスレンダーだと言っている！」

「奈美ちゃんってさ、いっつもそうやって現実逃避するよね！ ク

「ルじゃなくてむしろ格好悪いと思うよ、そういうの！」

「何だと！？ 沙耶、貴様、自分のことを棚に上げて、よくもぬけぬけと……！！ 貴様が何かしら問題を起こす度に苦労させられているのは誰だと思っている！？」

「それは同感やな！ ウチらが喧嘩するのって、結局いつもさーやんに原因があると思うで！ それをまるでウチらが悪いみたいに言っつて！」

「それは未佳ちゃんでしょ！ 他人事のフリばかりかして、自分は傍から見てるだけ！」

「もういつペン言つてみいや！」

言い争いながら、三人の少女の体がそれぞれ光に包まれる。その直後。

ドッコオオオンッ！

我が家が木端微塵に吹き飛んだ。

屋根がなくなり、あらかた壊れてしまった家財道具の中、奇跡的に残ったテーブルに朝日が降り注ぐ。近くの電線に留まっていた雀が驚いて飛んで行く。

しかし、快晴のはずの青空は大きな影に遮られ、あまりよく見えない。

そこに、天を覆うように三体の巨大ロボットがそびえ立っていたからだ。

それぞれ全長二十五メートル程。何故こんな所に突然、三体もの巨大ロボットが現れたのかと言えば、答えは簡単である。

「大体さ、奈美ちゃんと未佳ちゃんは文句ばかり言っつて、自分からは全然行動しないじゃないか！ だからボクが代わりに行動してるんだよ！ 二人にいちいち文句言われる筋合いはないね！」

三体の内の一体、ピンク色を基調とした機体と言う。黄色いアイカメラが輝く頭部には、ツインテールを思わせる飛翔用のウイング

バインダーが二基付いており、名をスーパーロボット・サヤという。そう、このスーパーロボットこそ、空風沙耶が巨大化した、彼女の真の姿なのだ。

「我が行動する前に貴様が考えなしに行動するから、いつも失敗するのだから！　少しは学習したらどうなのだ！」

ライトブルーの機体、スーパーロボット・ナミが腕を組みながら怒鳴る。言うまでもなく海川奈美が巨大化した姿で、頭部にはポーターテールを彷彿とさせる巨大なブースターが装備されている。

「にゃー！　どうでもええわそんなこと！　巨大化した以上、力と力で勝負しようやないか！」

陸花未佳が巨大化したレモンイエローのスーパーロボット・ミカが、両手を地面に着けて、四足歩行の猫のような構えをとる。リアアーマーに生えた尻尾と、頭部の猫の耳を模った排熱口が特徴的な機体だ。

「言われなくたって！」

「貴様らごときに負けるこのスーパーロボット・ナミではない！」

「フシャー！」

朝の住宅街のど真ん中で取っ組み合いを始めるスーパーロボット三人娘。

更に言っておくと、あるうことかこの三人娘、巨大化でさえまだ序の口に過ぎず、三体で合体して『サヤナミカ』という超巨大ロボになるというのだから、もはや驚きを通り越して、呆れのため息しか出て来ない。

「というか――」

ちなみに俺は先刻からずっと、現リビングの跡地、奇跡的に残ったテーブルの席で、奇跡的に椅子に座ったままでいるのだが、もうそろそろ言わせて欲しい。

「お前ら、いい加減にしるおお　ッ！」

## 第一章 自称天才パイロットの憂鬱

### 第一章 自称天才パイロットの憂鬱

そもそも、『宇宙怪獣』という存在が現れたのは、今から二十七年前のこと。

突如太陽系の外に現れた一匹の宇宙怪獣は、一直線に地球へと進攻して来た。

もちろん当時はまだ対宇宙怪獣組織である『地球防衛局』は存在していなくて、国連軍が迎撃にあたったが、戦車やら戦闘機やら、従来の兵器はその宇宙怪獣に対し、全くと言っていい程に無力だった。

飛行能力を持ち、マッハを超えるスピードで大空を飛び回る事が可能だった宇宙怪獣は、世界各地の主要都市に上陸しては暴れ回り、人類は一度、滅亡の危機に瀕した。

しかし、これまたとある科学者が一つの兵器を作り上げることに成功する。

それが、対宇宙怪獣用人型機動兵器『スーパーロボット』である。やがて一匹の宇宙怪獣と、一機のスーパーロボットは、激突することとなる。ここ、東京で。

後に『第一次東京決戦』と呼ばれる、中学、高校共に歴史の教科書には当然のごとく載っている有名な戦い。……結果は、俺がこうしてスーパーロボット三人娘を押し付けられ、しょうもない日常を送っていることから分かる通り、人類が勝利して、今に至る。

とはいえ、決して宇宙怪獣が全滅したわけではなく。

「今日から合体練習を始めます」

雲一つない晴天の青空の下、地球防衛局東京第一支部敷地内の演習場にて、体育座りをしているジャージ姿の沙耶、奈美、未佳を見下ろしながら、俺は棒読みで宣言する。

「えー、日曜日なのにー」

「面倒やわー」

「何故我がこんなことを……」

不満を漏らす三人を「黙らっしやい！」と一喝する。

「お前ら、天才高校生パイロットたる俺が、自宅を破壊されてまで、どうしてわざわざお前達の世話役なんかやってると思ってるやがる！」

未だピンク髪がサイドテールのままの沙耶が「はいはい！」と元気よく手を挙げて、

「運命の赤い糸がボクと北斗くんを引き合わせたからだと思います！」

「うん、それは良かったな。家に帰ったらハサミで切っついてやるから安心しろ、そのツインテールみたいにぶつつりと」

「満面の笑顔で酷いこと言われた!？」

続いて、金髪癖っ毛の未佳が手を挙げる。

「はい」

「よし、未佳。言ってみる」

「ほーやん、どうしてウチらの服装、上下ジャージなん？ このシチュエーションなら普通、半袖とブルマにするもんやないの？」

「しねえよ！ 今時ブルマを採用してる学校がどこにあるんだよ！？ まるで俺がそういう趣味を持つてみたいに言うんじゃねえ！

つーか、今してる話と全く関係ないし！」

未佳とのやりとりを見ていたライトブルーポニーテールの奈美が「ふん」と冷たい目で俺を睨む。

「ただでさえ酷いと思っていたが、本当にどこまでも見下げた男だな。まさかうら若き乙女に上下ジャージを着せて愛でる趣味の持ち主だとは」

「言ってねえよ！ 勝手に人の趣味をマニアックにすんな！ いいからお前らは人の質問に答えろっつーの！」

「貴様……！ つまりあれか、上下ジャージが好きなのではなく、上がジャージで、下はブルマという、いわゆるジャージブルマー派

……！」

沙耶が、ぼつと紅くした頬を両手で押さえつつ、

「北斗くんが望むなら、ボクは別にそれでも……」

「違えええ　　ッ！」

俺は、びしつと三人にそれぞれ人差し指を向ける。

「俺がつ、お前らのつ、面倒なんか見てんのはっ！」

遙か彼方までコンクリートの平面が続く演習場で、俺は声を大にして言う。大きくせずにはいられなかった。

「お前らが合体ロボの癖に、これまで一度も合体に成功していないからだろうがッ！」

どうしてこうなった。誰か教えて欲しい。

「まあまあ、北斗くん」

沙耶が偉そうに胸を張りつつ、親指で自分のことを指差し、ウインクをして、

「合体なんて出来なくても、ボク達サヤナミカの結束力さえあれば、どんな宇宙怪獣がやって来ても問題ないよ！」

「格好良さげに言ってるけど、今朝家を破壊するくらい大喧嘩してたのは君達だからね!？」

全くもって説得力ゼロである。

と、そこで我に返る。……いかん、つい熱くなってしまった。いつの間にか、またこいつらのペースに乗せられている。俺は天才のはずだ。もっと冷静になるんだ。落ち着け、白坂北斗。

咳払いをして、俺は三人に向き直る。

「とにかく、今日は合体の練習をする。ほら、三人ともさっさとロボットの姿に変身しろ」

未だに「本当なら今日は、ボクと北斗くんの二人きりでデートのはずだったのに」「やら」「にゃー、今更合体練習したところで、ウチはどうなるもんでもないと思うんやけどなあ」「やら」「そもそも我は合体など性に合わん。各々に自主練した方がまだ効率が」「やら、ぶつぶつと不満を口にする三人。



「いいから合体練習するの！」

「ぶー、分かったよう」

沙耶は口先を尖らせながらも、観念したのか、身体を薄いピンク色の光で包み込み、片足を軸にして、くるりと一回転する。

「チェンジ、サヤ！ ロボットモード！」

片手を上げると同時にピンク色の光は濃さを増し、巨大化して、力強い直線と、女性的な曲線の入り混じった輪郭を描き出す。

やがて、光が弾け飛び、中からツインテールのスーパーロボットが姿を現した。

「変身完了！」

すると、サヤは膝を曲げて腰を屈ませ、俺を見下ろしてくる。

「ねえねえ、北斗くん」

「何だ？」

「前から一度聞いてみたかったんだけど、ボクのスーパーロボットの姿は……その………どうかな？ 思うことがあったら、言って欲しいなー、なんて………えへへ」

デートの際、彼女が彼氏に対して「今日はちょっとオシャレしてみただけど」と自分の服を見せるように、ゆっくりと一回転する巨大ロボ。

とりあえず意見を求められたので、俺は率直に述べることにした。

「サヤ」

「う、うん！」

「お前のツインテール、スーパーロボットになると再生するんだな」

「そこ！？」

やりとりを見ていた奈美が「やれやれ」と首を横に振り、身体をライトブルーの光で包む。

「チェンジ、ナミ！ ロボットモード！」

「しゃーないにゃあ、ウチもやったるわ。チェンジ、ミカ！ ロボットモード！」

続いて、美佳もレモンイエローの光を帯びて、スーパーロボット

に変身する。

サヤ達が、スーパーロボットから小さな人間の姿　人型インターフェースへ、または人型インターフェースから巨大なスーパーロボットへと自在に変身出来るのは、彼女達の身体を構成する『圧縮ナノマシン』によるものである。それが大きさを変え、パズルのように組み変わることにより、サイズを超越した姿を可能にしているのだ。

演習場に三色のスーパーロボットが並んだのを確かめて、俺は地球防衛局の備品である拡声器を手に取り、電源を入れる。

『三体揃ったな。それじゃあ、これから合体の練習に入る。俺がこの』

腕を捲り、掲げて、手首に付けている機器を見せる。

『SRコマンドーから合体許可を出したら、三体共、少女合体スタンバイ。以降はメモリー内マニュアルの手順に従って、各々に合体パーツへ変形、合体を開始。タイミングはこちらで指示を出す。いいな?』

『了解!』

『いつでもええでー』

『いちいち説明しなくても分かっている。来い!』

ストレッチをして間接部の調子確かめる三体。一応合体ロボとしての自覚はあるらしく、気合は十分なようだ。これなら、今日はひよっとすると……。

『よし……行くぞー!』

SRコマンドーを構え、音声入力。

『合体許可!』

三体のアイカメラが発光し、それぞれ合体パーツへの変形を開始する。

『少女合体ッ!』

果たして、三人娘は合体した。

ただし、その結果が成功かどうかは別として。

「きゃー！ 見ないでー！ 北斗くん、ボク達を見ないでー！」  
サヤが喚いている。

「なーやん、出だしが早過ぎや！ ほーやんがタイミングをちゃんと指示してたやる!?」

「違う、貴様の出だしが遅いのだ！ 第一、あいつの指示など信用出来ん！ ええい、おかげで上半身に、変な風にくっ付いてしまっただではないか！」

ミカとナミはジョイントのタイミングについて揉めている。

演習場には、足が短く、上半身に合体パーツが偏り、胴体の膨れ上がったスーパーロボットが立っていた。

一応、合体失敗ながらも、サヤナミカと呼称すべきロボットなのだろうが……これは酷い。

世の中には、重装甲・重火力タイプのスーパーロボットももちろん存在するが、それはあくまで宇宙怪獣の苛烈な攻撃に耐える為の分厚い装甲と、一撃必殺で敵を粉砕する威力を持つ代わりに巨大な武装を付け加えた結果、必然的にボディが肥大化するのであって、このような贅肉の塊のごときメタポリック・フォルムと一緒にしてしまつては申し訳ない。

だから、目の前のメタボロボにあえて呼び名を付けるならば

『デブナミカだな』

『誰がデブだ貴様ッ！』

『せめてぼつちやり系って言うて！』

『ボクの名前が入ってない！』

当然のことながら、もう一度最初から合体のやり直しとなった。

『合体許可！』

『少女合体ッ！』

『……………』

俺は頭を抱える。

目の前にはもはや人型とも言い難い、六本の腕と六本の足が生えたムカデのような鉄の塊が、わさわさと蠢いていた。

「北斗くん見ちゃ駄目えええ！ お願いだから見ないでえええ！」  
またしても沙耶が喚いている。

「一体何をどう間違ったらこんな風に合体するというのだ！ なんて無様な……ちよっ、こら、ミカ！ 私の足を勝手に動かすんじゃない！」

「どれが誰の腕で、どれが誰の足か分からないんやから、仕方ないやろ！ というか、それはウチの腕！」

ミカとナミは、どの腕と足が誰のもので揉めている。

俺は愚痴を零すように、眼前の合体ロボの名前を口にしていった。

『 ダメナミカだな 』

「駄目って言うな！」

「せめてキモ可愛いって言うて！」

「そしてボクの名前が入ってない！」

ダメナミカが何やらもがき出し、「早く合体解除してよ！ こんな姿、ボク恥ずかしいよ！」「うるさい、先程から何度もやってる！ 正規のジョイントじゃないから、パーツが引っ掛かって……！」  
「な、なーん、一人で勝手に動かんといて！ 足が絡まって……にゃあぁっ!？」と滑って転ける。

情けなくて、俺は涙が出そうになった。

少しでも期待したのが間違いだっただのだから。そもそも簡単に合体出来るなら、一か月もの間、苦労していない。

今更ながら、どうして天才たる俺がこんな三人娘の面倒を看なくてはならないのかと、腹立たしさを覚える。

それもこれも全部

「おー、やってるやってる。どうかね、自称天才高校生パイロットの弟君。サヤナミカの調子は」

噂をすれば何とやらというか、現在の状況を招いた元凶の声らし

て振り返ると、よれよれの白衣のポケットに両手を突っ込み、美容院に行かずに伸び放題の黒髪ストレートロングの女性が、こちらに歩いて来るところだった。

「調子？ 最悪に決まってるだろ、そんなもん。それと、自称じゃない」

拡声器を手にぶら下げ、皮肉を込めて答える。

彼女は「やれやれ」と首を横に振り、

「仮にも自分の姉に対して、ずいぶんと冷たいじゃないか。愛しの弟君がここで合体系練習をしていると聞いたから、研究の疲れも溜まっている中、わざわざ足を運んだというのに。少しは労わってくれてもいいと思うのだがね」

「頼んでない。さっさと研究室に帰れ」

しっしつと手の平で払う。

彼女の名前は、白坂南。不本意ながら、俺の姉である。歳は二十四で、俺より七つ上。スーパーロボットの研究と開発に携わっており、未だに疑いたくなる時があるが、そっち方面では世界的権威ということになっている。

「まあ、そう言うな。一応、サヤナミカの生みの親としては、途中経過がどうなっているのか気になるのだよ。君にあの子達を任せた責任もあるしね」

そう、それもこれも全部、姉さんのせいだ。

騙されたのだ、俺は。スーパーロボット開発の世界的権威などという肩書きを安易に信用すべきじゃなかった。

「任せた、じゃなく、押し付けた、だろ？」

「おや、人聞きの悪いことを言う。弟君も同意の上で、あの子達を引き取ったんだろう？ たまたま前に乗ってたスーパーロボットがうんともすんとも言わなくなって、私がちょうど自身の開発したスーパーロボットのパイロットを探しているところだと声を掛けたら、あっさりと引き受けてくれたじゃないか。こうして丁寧な誓約書にサインまでして」

白衣の内側のポケットから、四つ折りにした誓約書を取り出して、ひらひらとさせる姉さん。

俺がそれを奪い取るうとすると、「おっと」と素早く避けられてしまった。

「これは一応、大事な書類なのでね。いくら愛しの弟君であっても、そう簡単に手渡したり、見せたりは出来ないのだよ。内容が気になるなら、この場で改めて読み上げようか？」

姉さんは横目で誓約書を見つつ、

「えーと、どこから読もうか……ふむ、ここが重要だな。万が一、スーパーロボットに不備があったとしても、パイロットは開発者の許可なく契約を破棄することは出来ない。もしもこれを破った場合

妖しい光を湛えた瞳がこちらを向き、ニヤリと口元が歪む。

「パイロットは、今後永久にパイロット資格を失うものとする」  
それこそが俺の、三人娘を手放せない理由となっていた。

例えば、前に乗っていたスーパーロボットも姉さんが開発したものであり、それが原因不明の故障で動かなくなった時点で、気付かなければならなかったのだ。最初から全部、この腹黒い姉によって仕組まれていたのである。

「……俺は今後、一切合切姉さんを信用しないからな」  
睨み返してやると、姉さんは泣き崩れるように、その場に座り込む。

「ああ、何てこと！ 天国のお父さん、あなたの息子はついにグレてしまわれました！」

「誰のせいでグレたと思ってんだ！」  
「昔はもつと可愛かったというのに。お姉ちゃん、お姉ちゃん、つて甘えに来てくれた記憶も、今となっては遙か昔」

「記憶を勝手に改変するんじゃない。逃げる俺をとっ捕まえて、無理矢理撫で回してたんだろが。呼び方も最初から、姉さんだったぞ俺は」

「ああ、お父さん……お姉ちゃんはこの間にも弟君を愛しているというのに、どうして彼にはそれが伝わらないのでしょうか」

「その姉が弟を畏に嵌めやがったからです！」

姉さんは、キリッとした顔で立ち上がって、

「というわけで、今後は私をお姉ちゃんと呼んでくれたまえ」

「姉さん、人の話聞いてた!？」

「姉さんじゃない、お姉ちゃんだ。……今更思ったのだが、いつでも私の一存で、弟君から一方的に契約を破棄されたということにも出来るんだよなあ、これ」

「なっ……!」

再び取り出した誓約書をチラつかせる、髪伸び放題の悪魔。

「ひ、卑怯だぞ、姉さん！」

「駄目だ、全然駄目だ、弟君。姉さんという呼び方ではこれっぽっちも萌えないぞ」

「ぐ……!」

パイロット資格とプライドとが、俺の脳内で天秤に掛けられる。天秤はしばしの間、均衡を保っていたが……やがて、一方に傾く。

「お……」

「お？」

ニヤニヤとほくそ笑みながら先を促す姉さん。顔が熱くなる。

「お姉……ちゃん」

「萌ええええ！」

死にたくなつた。気持ちはブルーを遥かに通り越して、完全にブラックである。

「く、屈辱だ……」

「ふー、良いものを見た。まあ、サヤナミカを合体させることが出来たら、色々と考えてあげなくもないので、頑張ってくれたまえよ、弟君。さて……おい、サヤ！例のモノを持って来たぞー！」

姉さんは、ようやく合体解除に成功したサヤ達へ向けて手を振る。

「あっ、博士！はい！」

人型インターフェースの姿に戻った沙耶が、こちらに駆けてくる。俺は姉さんに視線を向けた。

「例のモノ？」

「ん？ ああ、これだ」

そう言つて、姉さんは懐からマヨネーズ容器らしき物を取り出す。しかし、中に詰まっているのはピンク色。容器に『イチゴ風味』と書かれたシールが貼つてある。

「何だそれ……ホイップクリーム？」

「残念だが、不正解だ。沙耶ー、こつち来ーい」

ちよいちよい、と手招きをする。

姉さんの前に立った沙耶は、首を左に傾げるようにして、右頭を上方に向ける。

「ふんふんふんふん」

すると、あるうことが姉さんは、鼻歌を奏でながらピンクのホイップクリームを絞り、沙耶の右頭にトッピングを始めた。

「ちよつ、何やってんの！？」

「見て分らんかね」

「分からねえよ！ 沙耶の頭でケーキでも作る気か！？」

やがて、「ふむ、これ位でいいかな？」と姉さんはホイップクリームを盛るのを止める。

「うん、ありがとう博士！」

礼を言つてから、沙耶は傾げていた頭を戻して、ふるふると首を横に振る。

ホイップクリームが形を変え、ふわつとしたピンク色の長い髪の毛になる。気付けば、沙耶の髪型は元のツインテールに戻っていた。

「圧縮ナノマシン……？」

姉さんは頷き、

「その通りだ、弟君。損失分のナノマシンを新たに補充して修復したのさ」

「ほ・く・と・く・ん」



こちらに近付いて来た沙耶が、むふふと笑う。

「ケーキじゃないけど、ボクのこと、食べる？」

「誰が食うか！ つーかお前、イチゴ臭っ！」

沙耶に補充された圧縮ナノマシンは、本当にイチゴ風味であるらしかった。

まあ、要するにだ。スーパーロボット・サヤナミカは、上手く合体することが出来ない（及び人型インターフェースの性格にいささか問題がある）為に、誰もパイロットになりたがらず、結果、困った姉さんは身内の俺に連中を押し付けたというわけである。

俺としては今すぐにでもサヤナミカのパイロットを辞退したいところだが、姉さんにパイロット資格の剥奪を盾に取られている以上、それは出来ない。

つまり、俺がスーパーロボットパイロットとして生き残る為には、サヤナミカの合体を成功させるしか道はないのである。

「……………」

我に返ると、そこは地球防衛局の早手回しによつてすっかり元通りになつた白坂家の、二階ベランダ。

月曜日の朝、清々しい空気の中で、俺は洗濯物を干している途中だったのを思い出す。

そして、手に持っているのは、女物のぱんつ。

思わず、叫ぶ。

「何を平然と女物の下着なんか洗って干してるんだ俺はあああ

ッ!？」

しかも、割と無意識に。一ヶ月間続けている内に習慣化してしまっていた。

ベランダを一瞥する。およそ五分の三が女物の服で占められ、向こうから、ぱんつ、ぶらじゃー、ぱんつ、ぱんつ、ぶらじゃー……

ぬおおおッ！

「駄目だ、早く何とかしないと、パイロットじゃなくて、ただの主夫になってしまおう！」

「ほーやん、おはよー」

振り向くと、パジャマ姿の未佳が「ふしゃああああ」と猫みたいなあくびをしながら、ベランダに出て来る。

「おはよー、じゃない！ さっさと制服に着替えて学校に行く準備しろ。遅刻するぞ。下に朝食を用意してあるから、沙耶を叩き起こして、先に食べてる。そろそろ奈美も自主トレから帰って来る頃のはずだ。あつ、それから味噌汁は温めてから食べるよ」

「にゃー、分かった。ところでほーやん、これなんやけど……」

未佳は後ろ手に隠していたものを取り出す。それは、猫のイラストが描かれたぱんつとぶらじゃー！。未佳は「にゃはは」と苦笑いをして、

「昨日、出すのを忘れてしもうて。ほーやん、悪いんやけど、ついでに洗つといてくれへん？」

「お前な……洗濯しなきゃいけない物は前日の内に出しとけて、いつも言ってるだろ！？ その内、着る物が無くなっても知らないからな！」

「まあまあ、そう怒らず」

いつの間にか俺の背後に回った未佳は、俺の頭に顎を寄せ、胸を押し付けて来る。

「熱い、重い、うつとおしい。……つたく、どうでもいいけど未佳、寝癖で頭、ライオンみたいになってるぞ」

ただでさえ癖っ毛の金髪は、爆発したみたいにボツサボツサになっている。まるでライオンのたてがみのようだ、と思った。

「あれ、ほーやん知らへんの？ ライオンはネコ科なんやで？」

「だから何だ。いいから直して来い」

「ほーい」

未佳はベランダを後にして、ぱたぱたの廊下の方へ駆けて行く。

やれやれである。さて、俺もさっさと洗濯物を干し終えて、下に行くとしてよう。そうだ、奈美は帰って来たらまず、制服に着替えるはずだから、その間に白米やら味噌汁を持ってテーブルの上に用意しておいてやるう

「……って、だから俺は主夫かつーの！」

と、そこで家の門前までランニングをして来た、奈美の青いジャージ姿が視界に入る。ポニーテールをゆっくりと上下させ、息を整えているところで、目が合った。

「……貴様」

まるで人類共通の敵でも見るかのような鋭い眼光に「何だよ？」と返すと、

「まさかジャージブルマー派の上に、巨乳フェチであったとは」

「は？」

俺は自分の手元を見た。猫柄のぱんつとぶらじゃー。……そういえば、未佳の胸のサイズって何カップぐらいあるんだろうか？

奈美の眉間に皺が寄った。

「最低だな」

それだけ言って、奈美は門を開け、玄関の方へ歩いて行く。

「だ……誰が……」

ベランダの手摺りに身を乗り出して、叫ぶ。

「誰がお前のぱんつを毎日洗ってると思うってるんじゃあああ！」

よりにもよって、何で女性タイプの人型インターフェイスが三人ものだろうか。

本来、そこまで高度なAI技術を持っていなかった人類が、スーパーロボットにいわゆる心というものを持たせることに成功したのは、内部に搭載されている動力源に深く関わりがある。

圧縮ナノマシン複合エネルギー発生機関、通称『ハートドライブ』

。十年前に起きた『第二次東京決戦』で、敵の宇宙怪獣『ディザスター』のコアとして使われていたオリジナルを元にして、俺の姉、白坂南が完成させた技術である。

ハートドライブは、感情というものに反応して無尽蔵のエネルギーを生み出す半永久機関で、メモリとAIも兼任し、直結している。人間で言うところの脳と心臓が一緒になっているのである。

圧縮ナノマシンの技術は、ハートドライブの開発による副産物であったが、姉さんはこれを利用し、スーパーロボットの人型インターフェース形態を作ることをついに思いついた。

人型インターフェースの必要性は、ハートドライブの出力が、感情領域と呼ばれる部分の揺らぎによって変化することにある。人間と同じ生活をして、人間と同じ心を持つことが出来るようになれば、ハートドライブはより強い力を発揮することが出来るのではないかと姉さんは考えたのだ。

実際に、人型インターフェースへの形態変化を持ったスーパーロボットは、出力が大幅に上昇したというデータが幾つも出されており、現在では、スーパーロボットのほとんどが人型インターフェースになることが出来る。

なるべく人間に近く、ということ、当然、人型インターフェースにも性別が存在する。男性タイプと女性タイプの割合は大体半々くらい。

外見年齢というものもスーパーロボットごとに設定されており、二十代半ばという設定が多い。

だが、それにしただって、このサヤナミカはどうだ。

三人が三人とも女性タイプ、その上、外見年齢設定は全員十七歳ときた。

サヤナミカは、ハートドライブを積んだ機体同士で合体し、出力の増大を図るといって新たな試みらしいが、何故に少女合体なのか。余りに疑問なので、ある時姉さんに尋ねてみたところ、

「え？　だってその方が萌えるじゃん」

という答えが返ってきた。これがスーパーロボット開発の世界的権威の言葉なのだから、世の中色々と間違っていると思う。

そして、その割と適当な世界的権威のせいで、俺はここ一ヶ月、セーラー服の少女三人との登校を余儀なくされている。

姉さん曰く、ハードドライブはスーパーロボットの心であり、心を鍛えるには学校という場での勉強が打って付けとのことなのだが……。

「北斗くん、早く早く！ 学校に遅刻しちゃうよ！」

自宅の玄関で、スクールバッグを片手に、ぴよんぴよんと飛び跳ねて急かすセーラー服姿の沙耶。

「うっさい！ 誰のせいで遅刻しそうになってると思ってるんだ！」

えーと、窓のカギは全部確認したし、ガス栓は閉じたし、テレビの電源も切ったし、炊飯器の予約も大丈夫と……」

指を折って数えながら確認する。よし、問題ない。

早足で玄関に向かい、スニーカーを履く。

「全く……沙耶、お前って奴は、せつかく俺が早く起きて、朝食作ってるのに、毎朝毎朝時間ギリギリまでベッドにへばり付きやがって」

いくら揺すつても「あー」とか「うー」とか「眠いー」とか言って起きないので、今朝も頭にチョコップを喰らわして、目覚めさせてやったのだ。

沙耶は恥ずかしそうに「えへへ」と後頭を搔いて、

「いやー、ボクってほら、低血圧だから」

「スーパーロボットに血圧の低いも高いも関係あるか！」

「えっ、じゃあボクが朝に弱いのは一体……！？」

「弛んでるだけだ、ただ単純に！」

月曜日の朝からこれでは、今週も先が思いやられる。

一ヶ月前の生活が、遙か昔のことのように思える。ちなみにその時の俺は、『セミハードドライブ』という、パイロットの感情と直接リンクしてエネルギーを生み出す新型エンジンを使用した試作機、

AI非搭載型のスーパーロボットに乗っており、基本的に一人の生活を送っていた。

いずれにしても、洗濯物を干している時にも思ったが、そろそろいい加減、今の状況を何とかしなくてはならないと思う。

家の外に出ると、沙耶と同じくセーラー服に身を包んだ、奈美と未佳が待っていた。玄關の鍵を閉めて、四人で高校へと歩き出す。

今朝の天気予報では、今日も一日晴れが続くようだった。空を見れば、雲は小さいのが疎らで、今が梅雨の時期であることを忘れさせるような、爽やかに澄んだ青が広がっている。五月晴れってやつだ。

「ここ一週間くらい、雨降らないね」

横を歩く沙耶が言う。

「ウチ的には、晴れが続いてくれるのは大助かりやわー」

後ろの未佳が口を開く。

「どうしてだ？」

俺が聞くと、未佳は自分の金髪を指に巻き付けながら、

「ウチは癖っ毛やから、湿気があると、髪がうねりまくって整えるのに苦労するんや。全然直らなくて、これが大変で大変で」

「……お前ら、本当にスーパーロボットか？」

沙耶の低血圧も含めて。

一番先頭を歩いている奈美が、ちよつとだけ横目でこちらを見る。

「ふん、我は別に、梅雨は嫌いではないがな」

「それはまた何故に？」

と尋ねる俺に対し、奈美は前を向いたまま、

「何故って、風情があるではないか」

ずっこけそうになった。

「日本にしかない、四季折々の美しさの一つだろう。貴様にはそんなことも分らないのか？」

「お前ら、本当にスーパーロボットかッ!？」

「度々失礼な奴だな。我はスーパーロボット開発の世界的権威、白

坂博士によって作られた、一級品のスーパーロボット・ナミだぞ」  
嫌々ながらも、一ヶ月共に生活していれば気付くのだが、沙耶と  
奈美と未佳は時折、人間よりも人間臭い言動をする。いや、時折で  
はなく、割と頻繁に。

この変な人間らしさを良い方向に持って行ければ、ハードドライ  
ブ出力は良い数字を叩き出し、合体も成功に近付くのではないかと  
思うのだが…… 上手く行かず、というか現状を呪いながら行動せず、  
情性で過ごし、一ヶ月が経過してしまった。

しかし、俺としては、これ以上立ち止まっているわけにはいかな  
い。

意を決して、切り出す。

「三人共、歩きながらでいいから、聞いてくれるか」

「どうしたの、北斗くん？」

「にゃ？」

「何だ」

三人の視線がこちらに集まったのを確認してから、俺は告げる。

「昨日も言ったが、今後は本格的に合体練習に取り組んで行こうと  
思う。お前達も合体ロボットなら、ちゃんと合体出来るようになり  
たいはずだ。違うか？」

朝の通学路を沈黙が覆う。たとえ雰囲気が悪くなるうとも、決め  
た以上は、早い内に言っておこうと思った。

最初に口を開いたのは、奈美だった。

「……まるで、貴様なら我々を合体させられるかのような物言いだ  
が、本当に出来るかとも思っているのか？」

「そのつもりだ」

目を見て答えると、奈美は「馬鹿馬鹿しい」と再び前に向き直る。  
「ほーやん」

未佳がいつの間にか横に並んで、俺の制服の袖を掴んでいた。  
顔を見ると、それは何かを期待しているような表情で。

「ほーやんは、もしもウチらが合体に成功したら」

「別に……さ」

沙耶が、未佳の言葉を遮った。

「そんなに急ぐ必要はないんじゃないかなって、ボクは思うんだけど……」

そこには、いつも通りの沙耶の表情があつた。

「ボクは北斗くんと一緒にいられば、それだけで幸せだよ。確かに合体ロボとして作られたからには、合体するのはボク達の夢だけど、北斗くんっていう素敵なパイロットと出会えて、一緒にいられるだけでも、今は十分に幸せなんだ」

屈託のない、太陽のような笑顔を浮かべる。

「ボク達はさ、これまでも他のパイロットに乗って貰ったことがあつたけど、ボク達が合体出来ないとなると、あつという間に離れていっちゃった。不良品だとか、出来損ないだとか、散々に言われてきた。だけど、北斗くんだけは、呆れた顔をしながら一ヶ月も側に居てくれた。ボク達を馬鹿にしないで、ちゃんと面倒を看てくれた」

「沙耶、お前……」

まさか沙耶がそんなことを考えていたなんて、思いもしなかった。隙あらばスキンシップを迫って来るし、マイペースで、自由で、いつもふざけてばかりいて、悩みとか、辛いこととか、全く無縁なんじゃないかと思っていた。

考えれば、沙耶と奈美と未佳は、俺のもとに来るまでに、多くのパイロットに捨てられて来たのだ。

「未佳ちゃんも奈美ちゃんも決して口には出さないけど、少なからず、北斗くんには感謝してるはずだよ。ね、未佳ちゃん、奈美ちゃん？」

沙耶が話を振ると、未佳は煮え切らない様子で、

「ウチは……確かに、感謝はしとるけど……」

一方の奈美は憤慨する。

「感謝だと!? ふざけるな! そいつは表面だけで、結局中身は他の奴らと同じに決まってる!」



奈美の言う通りだった。俺は他のパイロットと変わらない。さっさと最低限のことだけをして、お前達から離れて行くつもりだ。

沙耶は悪戯をした後の子供のように、小さく舌を出す。

「うん、でもまあ、全部ボクの願望なんだけどね。ボクはただ、今が幸せだよってことを言いたかっただけ。北斗くんがボク達の合体練習をみてくれるっていうんだから、拒む理由はないよ」

「沙耶、俺は……」

何か言おうと思って、口を嚙む。多分、沙耶はいずれ俺が離れて行くことを分かっているのではなからうか。

だとしても、俺にはやらなければならないことがある。たとえば彼女達を見捨てることになるうとも、絶対に為さねばならないこと。とりあえず、今日の放課後から練習を始めることを伝えようと思っただ。

ふと、後ろから車のクラクションがした。

「はーっはっはっはー！」

空気を読まない、聞き覚えのある笑い声が出て、黒く長い車が横を通過し、十メートルくらい前で停車する。これまた見覚えのあるリムジンだった。

後部座席のドアが開いて、まず現れたのは、紫の髪をした無表情なメイドさん。中世的な整った顔立ちをしており、肌は色白、背は俺と同じくらいある長身の少女で、外見年齢設定は十七歳。

そう、俺は知っている。彼女もまたサヤナミカと同じように、スーパーロボットが変身した人型インターフェースであることを。

彼女は俺達の方を向いて、無表情のまま、ゆっくりと一瞥する。やがて、頭を下げた。

「……どうも」

「あつ、どうも」

思わず、こちらも頭を下げる。

メイドさんはそうして挨拶を終えると、リムジンの後部座席の反

対側へと歩いて行き、ドアを開ける。

「はーっはっはっはー！」

再び耳障りな笑い声がして、車内から、オールバックの男が革靴を鳴らしながら外に出てきた。何故かその口にはバラの造花が啜えられている。

近隣にある有名な私立高校の制服を着た彼は、メイドさんを連れてこちらに近付いて来た。

「いやはや、一ヶ月ぶりくらいかな、白坂？ どうにも元気がないようじゃないか」

「そっちは相変わらずみたいだな、京極」

こいつの名前は、京極霧夜という。同期のスーパーロボットパイロットで、家はスーパーロボット開発も含め、様々な産業に携わっている京極コンツェルン。彼はその御曹司なのだ。同期のせいからライバル視されていて、何かにつけて絡んで来る。

「まあ、僕は秀才だからね。君のような自称天才とは違って、一般庶民の悩みとは無縁の、優雅な暮らしをしているよ。おっと、自称じゃなかったっけ」

相変わらず、物言いもムカつく奴である。

「北斗くん。誰、この人？」

沙耶が小声で聞いてくるので、俺は「一応スーパーロボットパイロットだ」と教えてやった。

「おや？ ひよっとして、そこのお嬢さん達が、噂に聞いた君の新しいスーパーロボットかな？ これは驚きだな……確か、名前はサヤナミカだったか……そうだ、こちらも紹介しておこう、僕のスーパーロボット『ミストリア』だ。普段はミストと呼んでいる」

「……ミストと申します」

京極に紹介されたミストは、無表情のまま、もう一度頭を下げる。「ミストは三年前に我が京極コンツェルンの京極工業が開発したスーパーロボットで、現在までに三度のグレードアップを重ね、正式名称はミストリア四式。エンジンは、従来のハートドライブに改良

を加えた出力強化型を使用している」

ミストは、じーつとこちらを眺めている。

「ロボット時の全長は四十メートル級の大型、重装甲だが、全身にバーニアを備え、出力強化型ハートドライブにより、機動力も優秀だ」

じーつ。

「もちろんパワーと火力も他の機体の比ではない。先日現れた宇宙怪獣は、巨体ながら、ミストが終始圧倒していた」

じーつ。

「とはいえ、機動力ではやはり他の高機動型のスーパーロボットに劣る。そこで重要なのが、ミストに搭載されているハートドライブの属性で……って、おい、ミスト！」

「……はい、何でしょう、マスター？」

「お前、また瞬きするのを忘れているぞ！ 最低でも十秒に一回は瞬きしろと、あれほど注意しておいたじゃないか！」

「……あ、申し訳ありません。すっかり忘れていました。何しろ私、スーパーロボットなもので」

ぱちぱちと二度、瞬きをするミスト。

京極はそれを見届けてから、咳払いをする。

「とまあ、人型インターフェース時に若干のシステムバグがあるものの、それ以外は優秀なスーパーロボットなんだよ」

何となく、京極も京極で苦労しているんだなあ、と思った。

そんな俺の心を読んだのか、京極は不快そうな顔をして、啜っていたバラの造花をこちらに向ける。

「おい、白坂！ 何だ、その人を馬鹿にした目は!？」

「は？ いや、別に、馬鹿になんて……」

「大体、君は人のことを馬鹿にしている暇があるのかい!? 聞いたよ、そのサヤナミカのパイロットになってからというもの、宇宙怪獣を一度も倒していないらしいじゃないか！」

「っ……!」

否定したいところだが、紛れもない事実であった。何度かサヤナミカと共に出撃しているものの、合体することが出来ず、力を出し切れずに敗退を繰り返していた。

京極は、ふつと鼻で笑う。

「仮にも僕と同じく、弱冠十四歳の最年少パイロットとなった男がそんな様では、二度に渡って地球を救った英雄である君の父上も、さぞ悲しんでいることだろうね！ それともあれかな、君の父上は、実はそこまで大したことない、スーパーロボットパイロットだったってことかな？」

「なっ……親父とは関係ないだろう！」

「さて、どうだか！ 蛙の子は蛙とも言うからね。結局、第一次、第二次東京決戦の英雄は死んでしまった。たまたまスーパーロボットに乗って、たまたま敵の宇宙怪獣と相打ちになったパイロットが英雄と呼ばれてるだけじゃないか。違うかい？ というか今現在、君は一体何をしてるんだ。そんな」

京極は沙耶、奈美、未佳を指差し、

「ろくに合体も出来やしない出来損ないの不良品共と、何を悠長に遊んでいるんだ？」

自分でも一瞬、何をしているのか良く分からなかった。

気付いた時には、京極の制服のネクタイを引っ掴み、思いつきり引き寄せていた。

至近距離で睨み付けると、京極も引かずに睨み返して来る。

「っ……何を怒っているんだ、君は。親のことを馬鹿にされて腹が立ったのかい？ それとも……」

自分でもらしくないと思ったし、何でこんなに腹が立つのか、自分でもよく分からない。

不意に、ガツと手首を掴まれて、捻り上げられる。横に視線をやると、ミストが瞬きをせず、無感情な瞳に俺を映していた。

「……どんな理由があるうと、マスターへの暴力は許容出来ません」  
「離せ」

「出来ません。何しろ私、スーパーロボットなもので」

無理矢理それを引き剥がそうすると、「北斗くん!」「ほーやん!」「落ち着け、馬鹿者!」と、沙耶、未佳、奈美の声が後ろからして、羽交い締めにされる。

俺は三人を睨んだ。

「お前らは悔しくないのかよ……!」

「え……?」

未佳が戸惑いを浮かべる。

「出来損ないの不良品って言われて、悔しくはないのかって訊いてんだよ!」

沙耶が首を横に振る。

「別に……悔しくなんか無い! ボク達には今、北斗くんっていうパイロットがいてくれるから!」

奈美は何も言わない。ただ、顔を背ける。

俺の拳に何故だか力が入る。拳だけじゃない。全身が震えていた。悔しくない……だと? 存在を否定されたんだぞ。スーパーロボットとして生まれて来たのに、出来損ない、不良品って言われたんだぞ。ロボットにとって、これ以上の屈辱のはずだ。悔しくないはずがない。

何より

「ふざけんなツ! 俺が悔しいわ馬鹿たれツ!」

頭の中で何か切れる感覚と共に、羽交い締めを振り解き、気付けば思いっきり怒鳴っていた。

「ここまで馬鹿にされて何黙ってたんだ、アホか! ああ、別にいいさ! 自分達だけが傷付いても我慢するってんなら俺は一向に構わん! 好きにすればいい! けどな! お前らは大きな勘違いをしている! さて問題ですチャラツチャラツ! お前らが何を勘違いしてんだか言ってみろ、まずは未佳!」

金髪癖っ毛の少女を指差す。

「えっ……あっ……えっと……!」

「はい、タイムアップ！ 次は奈美！」

指を向けられて、驚いたように瞳を見開くライトブルーのポニール少女。

「タイムアップ！ はい、次！ 答える沙耶！」

最後に指名されたピンクツインテールの少女は、声を震わせながら言う。

「ほ、北斗くんがボク達のことを思って……！」

「違ああうツ！」

俺は指差していた手を、勢いよく横に振った。

「お前らの勘違いはな！ お前らは自分達のことばかりで、俺のことを何一つ考えちゃいないってことだ！ お前らは一体何だ！？ スーパーロボットだろ！ スーパーロボットは一人で戦うのか！？ 違うだろ、パイロットも一緒だろうが！ 俺が何の為に今までお前らと一ヶ月も生活して来たと思ってるんだ！ それは俺が、お前らのパイロットだからだろうがッ！ お前らが馬鹿にされるってことはすなわち、俺が馬鹿にされてるのと同じことなんだよ！ 分かっただかッ！」

あー、喉が痛い。

でも、自分の口から言葉にしたことで、俺は理解する。

少なくとも俺は、一ヶ月の間、サヤナミカのパイロットを続けてきた。一応、俺のスーパーロボットだ。

それが他人に馬鹿にされるのは、俺には決して許すことが出来ない。

だから。

「さて再び問題ですチャラツチャラッ！ 京極霧夜ッ！」

俺は、オールバックの男と無表情のメイドの方へ向き直る。

人差し指を向けて、言った。

「俺はこれからお前に、一体何を申し込むつもりでしょうか？」

問題その二、解答。

スーパーロボット同士での決闘。

## 第二章 そのピンクツインテールを忘れない

### 第二章 そのピンクツインテールを忘れない

おそらく本人は覚えていないだろうけど、ボクは一年前、彼に出会っている。

あの日のことは、今でもよく覚えている。というか、これからずっと、絶対に忘れない。ボクにとってはキラキラ輝く、宝物のよきな記憶。

場所は何でもない、地球防衛局の廊下だった。それは、一番最初のパイロットに契約解消を切り出された日で、ボクのハートドライブの中は、色んな気持ちでぐちゃぐちゃになっていた。

初めて涙というものを流したのも、その時が初めてだったと思う。感情が制御出来なくて、今までの自分というものがどこかに行ってしまったかのようにだった。

未佳ちゃんも奈美ちゃんは、パイロットの言葉を聞くなり、何処かへ行ってしまった。だけど多分、ボクと同じ、どうしようもなく暗い気持ちになっていたんじゃないかなと思う。

それまでは、世界はいつだって楽しいものだと思って来た。自分達は立派なスーパーロボットになって、有名になって、名機として後世に語り継がれて行くんだという夢を抱いていた。

しかし、現実は厳しくて、どう頑張ってもサヤナミカへの合体は出来ないし、単機のハートドライブ出力も並以下。おかげでパイロットには、不良品とすら言われてしまった。

ああ、絶望ってこういうことなんだなあ、と膝を抱えて廊下の隅にうずくまり、絶え間なく込み上げてくる涙に、唇を噛み締めていた。

そんな時だ、彼が声を掛けて来たのは。

「どうした、何泣いてるんだ？」

顔を上げると、一人の少年が立っていた。パイロットスーツを着た、やたら大人びた印象を受ける少年。

ボクは慌てて目を拭う。

「別に、何も」

「泣いてるのに、何もないってことはないだろ。それともあれか、泣いてる理由を知られるのが恥ずかしいってやつか」

「恥ずかしくない人がいるわけないじゃん！」

何を当然のことを言っているのか、彼は。そんなのスーパーロボットのボクでも分かる。

彼は手の平で払う仕草をして、

「だったら、廊下なんかで泣いてないで、家に帰ってから泣け。こんな所で泣いてるのは誰かに構って下さいつて言ってるようなもんだ。で、お前はどっちだ。構って欲しいのか、そうじゃないのか」  
ぼん、と頭の上に手を置かれる。

それが無性に暖かくて、優しくて、我慢しているのに勝手に目から涙がぼろぼろと溢れてきて、気付くと嗚咽混じりに口が動いていた。

「ぶえええええ、がまつでございっつ！！！」

「あー、分かった。分かったから、とりあえず涙と鼻水を拭け」

その後、夜の闇に包まれた屋外に出て、地球防衛局の敷地内にある公園に場所を移し、ボク達はそこにあるベンチに腰掛けた。

「ほれ」

公園内の自動販売機で買ってきたらしい『ミルクたっぷりカフェオーレ』と書かれた缶ジュースを手渡される。とつても温かった。

「あ、ありがとう」

ボクはそこで彼に色々なことを話した。

自分がスーパーロボットであること（何故か凄く驚かれた）、自分が合体ロボで、なかなか合体出来ないこと（これまた凄く驚かれた）、それが原因で、パイロットに契約解消を言い渡されてしまったこと。



「それで、これからボク、どうしたらいいのかわからなくて」

彼は特に悩む様子もなく、

「合体出来るまで、ひたすら練習したらいいじゃないか」

「なっ……練習しても出来ないから困ってるんじゃないか！」

「それでも出来ないってことは、まだ練習が足りないってことだろ。そんなもん、出来ない奴の言い訳だ。世の中には必死に努力して出来るようになった奴が一杯いる。出来ないから努力したくないと思っような目標なら、そんなの叶える価値なんてない。さっさと諦めちまえ」

ボクは彼を見上げる。決して、冗談を言っている顔ではなかった。彼は本心からそう思っているのだ。

「君は……目標とかあるの？」

「ああ、あるぞ。俺はその目標を叶える為なら、他人に才能がないと言われても、不可能だと言われても、絶対に諦めない。努力を続けて、いつか必ず叶えてみせる。それが俺の、心に決めた生き方だ」

本当に真っ直ぐな瞳をした少年だった。ボクは、こんな人が自分のパイロットになったら、どんなにいいだろうと思った。

「ボクにも……出来るかなあ？」

「そんな目で見られても、無責任なことは俺には言えないぞ。それに俺は別に、お前のパイロットってわけでもないしな」

「うん……」

さつき会ったばかりだけど、そう言われると、何だか凄く寂しい気持ちになった。

「でもまあ、パイロットじゃなくても言えることはあるか」

しかし、不思議なのは、次の彼の言葉でそんな気持ちも一気に吹き飛んでしまったこと。

「絶対に、諦めるなよ」

「……うん！」

これが『恋』なんだってことを知るの、それから少し後になる。

俺は今、地球防衛局東京第一支部の司令執務室にいる。

普段はほとんど、というか、全くと言っていい程来ない。三年前、初めてスーパーロボットパイロットになった時とかに来たぐらいである。

たとえ目の前にいるのが、昔から付き合いのある姉の親友であつたとしても、場所が場所だけにやはり緊張する。

「つまり、サヤナミカとミストリアによる、一対一の模擬戦を行いたいわけね」

司令・羽柱鈴音さんは最初俺に、次に横にいる京極へと視線を移す。

二十四歳という年齢以上に落ち着きのある女性で、栗色の髪を三つ編みにして、肩に流している。ほわんとした雰囲気を漂わせている美人だが、決してその外見に騙されてはいけない。若くして司令をやっているだけあつて、宇宙怪獣襲来などの非常時は、別人のように怖い人になるのだ。

いや、嘘を言った。普段も割と怖い。個人的なランキングで、怒らせたくない人物ナンバーワンである。俺は普段からだらしない姉さんに怒られたことはないが、この人には散々怒られた覚えがある。

今の緊張は、そうやって脳内に刷り込まれた恐怖も関係していた。

「はい……」

あれから冷静になって頭を冷やした俺は、勢いのまま京極に掴み掛かったことを後悔し始めていたので、控え目に返事をする。

もしも駄目だと言われたら、別にそのまま無しになってしまつても構わなかつた。というか、むしろ無しの方向で。

「霧夜くんは、模擬戦に異論はないかしら？」

「ありません。むしろ歓迎してるくらいです。同期のパイロット同

士とはいえ、こういう機会はあまりありませんから」

横目で俺を見て、ニヤリと口の端を吊り上げる京極。

鈴音さんは「そう」と目を瞑り、左手の親指で、自らの下唇をなぞる。いつもの考え込む時のポーズである。

やがて、微笑んで、

「分かったわ。サヤナミカとミストリア、二体のスーパーロボット同士による模擬戦を認めます」

最悪だった。いや、今朝の通学路で京極と出くわした時点で、運命は決まっていたのかもしれない。

鈴音さんは机の中から『演習許可証』と印刷された書類を二枚取り出し、胸ポケットから万年筆を抜いて、さらさらと文字を書き連ねて行く。

「それで、模擬戦の期日はどうする？ もう決めてあるのかしら？」

「えーと……」

オールバック男の様子を窺うと、奴は白い歯を覗かせる。

「僕は今すぐにも構いませんけどね。ただ、白坂にも色々と事情があるでしょうし」

今すぐだとマズい。凄くマズい。

せめてサヤナミカと作戦を練ってからでないと、まず勝ち目がない。

鈴音さんは、くすくすと笑う。

ああ、笑顔が怖い。

「幾らなんでも、今すぐは無理よ。演習場の準備があるもの。それに二人も知つての通り、今月は、火星の近くで発見された大型宇宙怪獣を倒す為に、ベテランパイロット達が皆出掛けているから、スーパーロボットを迂闊に損傷させるわけにも行かないし。そうね……二人は学生だから平日も避けた方がいいんじゃない？ 北斗くん、サヤナミカの皆も学校に通っているんでしょう？」

「え、ええ、そうですね。出来たら日曜日とかの方が……」

嫌な汗がこめかみを伝って、顎から零れ落ちる。

「だったら、来月の第二日曜日とかどうかしら。それくらいあれば、十分に準備も出来るでしょう?」

「じ、じゃあ、それでお願いします」

「霧夜くんもそれでいいかしら?」

「ふっ……大分間が開いてしまうのは残念ですが、致し方ないですね。僕もそれで構いませんよ」

「分かりました。じゃあ、期日は六月九日、来月の第二日曜日っとはい、二人とも」

鈴音さんから演習許可証を渡される。

手を振り、「頑張っつね」と言う彼女を背にして（俺は身震いをして）、京極と共に司令執務室を後にした。

「それじゃ、無駄だと思うが一ヶ月間、足掻くだけ足掻いてみるんだな、白坂」

「く……!」

京極が革靴を鳴らして、一足先に廊下を歩き、去って行く。

こうして正式に、俺と京極、サヤナミカとミストリアの決闘が決まったのだった。

「だからあの時、落ち着けと言ったのだ。この馬鹿者が」

午後六時。白坂家の二階、自分の部屋で胡座をかく俺の心に、奈美の鋭い視線と言葉がグサリと突き刺さる。

「うぐ……!」

「何が天才だ、すぐ頭に血を上らせおつて。カルシウムが足りてないんじゃないのか? しかも、自分のことならまだしも、我々のことでわざわざ掴み掛かりおつてからに。誰も貴様に助けを頼んでないわ。勘違いも甚だしい」

グサツ、グサグサツ。

「加えて、あのキザなオールバックに決闘なんぞを申し込みおつて。」

なんで我々が決闘などをせねばならんのだ。全く、面倒なことをしてくれる。どちらかと言えば、我が貴様に決闘を申し込みたいところだ」

部屋の壁に寄り掛かりながら、肩に掛かったライトブルーのポニーテールを、背中の方に退ける奈美。

駄目だ、言い返せない。自分が彼女の立場なら、おそらく同じことを口にはしているだろう。

「すまん、確かに今回の決闘は、俺の勝手が招いた事態だ……」

「そんなことぬわああーいッ！」

「うおっ!？」

驚いて後退さる。大声を上げたのは沙耶であった。俺のベッドの上で、ぎゅううつと枕を抱き締めながら力説する。

ちよっ、綿が出る綿が出る！

「ボクはむしろ感動したよ！ 北斗くんがボクらを守るためにキザなオールバックの前に立ちはだかって」

俺の真似のつもりなのか、悩ましげに髪を掻き上げるポーズを取る沙耶。声に変な溜めまで付けて、

「ここまで馬鹿にされて何黙ってんだあ、沙耶！ ああ、別にいいさあ！ 君だけが傷付いても堪えるというなら俺は一向に構わぬあい！ 好きにすればうい！ だけどぬあ！ 君は大きな勘違いをしているううう！」

ばつと自身の体を両手で抱き締める。

「君の勘違いはあ！ 君は自分のことばかりでえ、俺のことを何一つ考えちゃいないってことどうあ！ 君は一体何だあ!? 俺の愛するたった一人の女だろあ！ 君は一人で戦うのくわあ!? 違うだろあ、俺も一緒だろうがあ！ 俺が何の為に今まで君と一ヶ月も生活して来たと思っただうあ！ それは俺があ、君と結婚する為じゃないくわああッ！ 君が俺を愛してくれているようにいいい、俺も君を愛しているよおおお！ 沙耶あッ！」

「いや、言っただけえし！ つーか、何か色々と改変されてるんだけ

ど!？」

「うん、ボクも愛してるよ、北斗くん」

「俺は愛してないっ!」

沙耶は両手で自分の頬を押さえて、ぶんぶんと身体を左右に振る。

「もぉー! 北斗くんたら、照れ屋さんなんだからぁ!」

「……沙耶は今夜の晩御飯抜き」

「ええええっ!? 何で!?!」

「人をおちよくるからだ!」

ベッドの上を転がり、「しまったぁー!」と喚く沙耶を無視して、俺は視線を下にやる。

「で、未佳。お前はさっきからずっと、何をやってるんだ?」

そこには、ベッドの下の空間に上半身をまるごと突っ込んでいる金髪少女が一人。遠目に見ると、まるでベッドに食われているかのような図である。

「にゃー? そりゃあ、ほーやん、男子高校生の部屋に入ってまざるやると言ったら」

右手が外に出て来て、グツと親指を立てる。

「えっちな本の搜索に決まっとるやないかつ」

すぐさま足首を掴んで、彼女を引っこ抜いた。

「んなもんあるか! 百歩譲ってもベッドの下なんていうベタなところに隠したりしない!」

床にうつ伏せの未佳は、顎を擦りながら、首を捻る。

「だとすると、押入れの奥のダンボールか、辞書の外箱の中、いや、机の引き出しが二重底になっているという可能性も……」

「だから、ねえっつーの!」

聞いていた奈美が、下らないと言わんばかりに首を横に振り、ため息を吐いた。

基本的に俺は、彼女に嫌われているが、こういう所では結構意見が合うと思っている。

本当、全くもって下らないよな。エロ本探しなんて。それなのに、

未佳と来たら。

ふと、奈美はおもむろに壁から背を離す。俺の前を横切って、本棚の前に向かった……って、あれ？

そこから英和・和英辞書を抜き取る奈美。中身を確認してから、切れ長の瞳を細めた。

「……よく探すのだ未佳。健全な男子高校生の部屋にそういう類の本が無いなどということは、まずあり得ない。どこかに必ず、ジャージブルマーの少女が表紙の、十八という数字が書かれた本があるはず！」

「奈美まで！？ つーか、そのネタまだ引つ張るの！？ ねえよ、ジャージブルマーなんてマニアックな本は！俺が持つてるのはもっと普通の」

はっとなって口を押さえる。だが、時既に遅し。

三人娘が、じーつとこちらを見ていた。

奈美は持っていた辞書を閉じ、外箱に入れて、元の本棚に戻す。

「沙耶……。未佳……」

切れ長の瞳を、かっと見開いた。

「探せッ！ あるぞ！ この部屋にはそういう類の本がッ！」

「了解だよ、奈美ちゃん！」

「今こそ、ほーやんの性癖を明かす時！」

我先にと飛び出し、一斉に俺の部屋を荒らし始める三人娘。

「ちよっ、止めるおおお！ ないっ！ そんな本はどこにもないいいッ！」

合体は出来ないのに、何故こんな時だけチームワークがいいのか。俺は床に数冊の本を叩き付けるように置いて、音を立てる。

「ええい！ お前ら、注目！」

奈美が眉間に皺を寄せる。

「何だそれは。そういう類の本か？」

「違う！ これはお前らのマニュアルだ！ 取説！ 取扱説明書！俺はそもそも京極と決闘するに当たって、どうするか作戦を練る

為に、お前らを部屋に呼んだの！ 断じてそういう類の本を搜索させる為じゃない！ 三人共、こつちに集まって座れ！」

沙耶が不満そうに口先を尖らせる。

「えー」

「えー、じゃない！ ほれ、未佳も！」

「もう少し……もう少しなんや……！ あとちょっと手を伸ばせば、男のロマンに……！」

「届かんでいい！」  
「にゃー!?」

押入れを漁っている未佳の首根っこを掴んで、マニュアルの所へ連れて行く。

三人が座つたのを見届けてから、俺は一度深呼吸をし、話を始めた。

「気を取り直して、決闘の件だが、行われる日は六月九日で、来月の第二日曜日。場所は地球防衛局第一支部敷地内の演習場。俺のせいでこうなつたとはいえ、決まつた以上は逃げずに戦おうと考えてる。えつと……その……三人共、協力してくれるか？」

さつさと離れて行こうとしている癖に、こういう時だけ協力を頼むのは、虫がいいと分かつてる。何とも情けない図であると思う。

こいつらが来てからというものの、俺の中にある、一定のリズムで回り続けていた歯車みたいなものが、どんどんズレていつている気がする。俺はどうしても、天才であり続けなければならないというのに。

沙耶はいつもの笑顔で頷く。

「ボクは、北斗くんが、馬鹿にされたボクらの為に怒ってくれて、とっても嬉しかったんだ。だから、北斗くんがボクらの為に申し込んだ決闘なら、もちろん協力するよ！」

どうして彼女がここまで俺に信頼を寄せられるのかが分からない。分からないが、今はそれでもありがたい。

未佳は悩んでいるようだったが、横目で沙耶を眺めつつ、頷く。



「まあ、ウチは、さーやんが協力するって言うんなら……」

そして奈美は、やはりというか、まともな俺と目を合わせようともしない。

「ふん、冗談じゃない。貴様の失態なのだから、貴様自身で何とかしたらどうなのだ」

「でも、奈美ちゃんだって、北斗くんが怒ってくれたことは別に嫌じゃなかったよね？」

そう言ったのは、沙耶だった。

「ボクは、色んなパイロットに馬鹿にされ続けて、悔しいって感情を押し込めることに慣れちゃったと思う。だけど、北斗くんが代わりに怒ってくれた時、ボクもやっぱり悔しいって思えたよ。奈美ちゃんもそういう風を感じなかった？」

眉間に皺を寄せ、奈美は不快そうな表情を浮かべる。

「我を貴様らと一緒にするな！ 我は一度だって、馬鹿にされて悔しくなかったことなどない！ ただ、馬鹿にされたからといって、見苦しくその場で言い返すのではなく、実際に成果を上げて見返してやろうと思ったただけだ！ 我は、白坂博士に生み出されたスーパーロボットとしての誇りを、決して失ったりはしない……！」

強く拳を握り締める奈美。ハードドライブで氷を操る彼女だが、その瞳には静かに燃える、蒼い炎が宿っている気がした。

それを見て、俺は思わず口を開いていた。

「奈美。京極との決闘で勝つことは、成果を上げることにはならないのか？」

「何だと？」

「京極はムカつく奴だが、パイロットとしての腕は本物だ。ミストリアも強い。宇宙怪獣に後れをとったなんて話は、今まで聞いたことがない。模擬戦とはいえ、ミストリアに戦って勝てば、皆に実力を示すことが出来る」

「だが、所詮は模擬戦だ。スーパーロボットの本分は、宇宙怪獣と戦うこと。実践で勝てなければ何の意味も成さん！」

「ミストリアは、常に最新の技術を取り入れてグレードアップを重ねているとはいえ、三年前から数多の宇宙怪獣を倒してきた猛者だ。そのミストリアに勝てて、実戦で宇宙怪獣を倒せないはずがない」  
「っ……！」

奈美は押し黙る。

自分勝手だと分かっている。今回のことは俺が引き起こしたのであって、奈美が協力を拒否するのは予想が出来ていた。もしも奈美が決闘をしないというのなら、別にそれでもよかった。彼女を引き留める権利は、俺にはない。

けれど今、何故だか分からないが、俺は奈美に協力して欲しいと思っている。京極に掴み掛かった時のような熱い何か、胸に込み上げて来ている。

奈美の眉間には、未だ皺が寄ったまま。しかし、不快そうな表情が消え、真意を見極めんとする顔になる。

「……勝算は、あるのか？」

「俺は、奈美が俺を認めないのと同じように、お前らを自分のスーパーロボットとして認めたくはない」

奈美の眉がぴくりと動く。

俺は続ける。

「だけど俺は、お前らが本気を出せば、合体しなくても、それぞれミストリアなんて匹敵するくらいのハートドライブ出力を發揮出来ると思っっている。いや、信じている。一人のスーパーロボットパイロットとして、誓って、真剣に」

ハートドライブの技術が出来てから、ロボットのAIは人間に限りなく近いものへと進化したが、その中でもサヤナミカは異常だと個人的には感じている。

俺はサヤナミカを押し付けられるまでは、姉さんの開発したAI非搭載型のスーパーロボットに乗っていた。けれど、三年もパイロットを続けていれば、他のパイロットや、パートナーの人型インターフェースに接する機会も多い。

彼等は全員、サヤナミカとはどこか違う。何が違うのかは、具体的に言い表せない。ただ、会話を交わしていると、やはりロボットなのだと肌を感じる。

しかし、サヤナミカはそうじゃなかった。一ヶ月も一緒に生活した今だからこそ普通に思えるが、初めてサヤナミカに出会った時は驚いたものである。言われるまで、完全に人間だと信じ切っていた。それほどに、変な所で人間染みている。

奈美はしばし、俺を睨み付ける。

「……よかろう」

やがて、鼻先に人差し指を突き付けて来た。

「ただし！ もしも途中で貴様に従う価値がないと判断したならば、我は即刻で協力を取り止める！ そのことを決して忘れるな！」

「分かった。それで構わない」

「ふん、口では何とでも言える。分かったならば、言葉ではなく、さっさと行動で示せ」

床に置かれたマニュアルの前で正座をし、両膝に手を置くポニテールの少女。

ここまで来たら、俺も退けない。

俺は頷いてから、マニュアルのページを開く。

「京極との決闘に当たって、作戦は二段構えで行こうと思っている。まずは」

避けられない決闘なら、真正面から戦って勝ってやろうと思った。俺は天才なのだ。逃げも隠れもしない。

心の内の冷静な自分に、そう言い聞かせた。

練習は翌日の放課後から開始した。

学校帰りに直接、地球防衛局東京第一支部に向かって、演習場で拡声器を片手に指示を飛ばす。

『ナミ、出だしが早い！ サヤとミカにタイミングを合わせる！  
合体は単機で行うものじゃない！ ミカは空中で素早く変形を行っ  
てから、サヤが胴体パーツに変形するまで高度を維持！ サヤはも  
っと素早く正確に変形しろ！ お前が上手く出来ない、後続の二  
機もジョイントのタイミングを見誤るんだぞ！ 頭で理解するんじ  
やなく、身体で覚える！ 駄目だ、駄目！ もう一回最初から行く  
ぞ ツ！』

この日の三人娘は、文句も言わず、俺の指示に合わせて真面目に  
練習を続けていた。

三色の機影が、空中でシルエットを変化させては、重なり合い、  
離れるのを繰り返している。

俺は拡声器から一時的に口を遠ざけると、横で栄養ドリンクを飲  
みながらノートパソコンのモニターを眺めている、黒髪伸び放題の  
白衣の女性を呼ぶ。

「姉さん！ 三機のハートドライブ出力は？」

「んー、以前のデータより上がってるのは驚きだが、まだ一般スー  
パーロボットの平均以下だね」

「上がってはいるんだな？」

「ああ、成長してる成長してる。さすがは愛しの弟君だよ。自称天  
才と名乗るだけはある」

再び拡声器を使って叫ぶ。

『自称じゃなあーいッ！ ……よし、サヤ、ナミ、ミカ！ ひと  
まず十分休憩ー！』

「えー、十分だけー!?」「めっちゃ疲れたあー!」「おのれ、人  
が黙って言うことを聞いていれば、調子に乗りおつて……!」

緊張が弛むと、途端に不満を洩らし始める三機に、喝を入れる。

『うっさい！ 今日を入れて決闘まで後五日しかないんだから文句  
を言うな！ とにかく十分！ 異議は認めん!』

俺が声を上げている場所から距離を開けた演習場の中央、コンク  
リートの上で、ブーイングをしながら仰向けに寝転んだり、しゃが

み込んだりするスーパーロボット達。

それを見ながら俺は、顎を擦る。

「おかしい……」

何だろつか。悪くはないが、出力の伸びの短さが引っ掛かる。何か心に迷いでもあるというのか。

姉さんが楽しそうに口元を歪めた。

「それにしても、弟君、意外と熱血なんだね。お姉ちゃんは今日まで知らなかったよ」

「は！？ 熱血う！？」

自分が目指しているイメージと余りにもかけ離れていて、凄く嫌な言葉だった。それが露骨に顔に現れたようで、

「そんな道端で偶然ツチノコと出会ってしまった時のような顔をしないでいいじゃないか。しかし、最初は勢いで決闘を申し込んでしまったと後悔していたのに、一夜明けて見れば、今度は無性にやる気と来た。これが熱血じゃなくて、他に何だと言うのかね？」

昨日の朝、通学路で京極に掴み掛かった後、真っ先に連絡したのが姉さんであった。一心、サヤナミカの開発者で、俺のパイロット権を握っている相手でもあるので、連絡しないわけにはいかない。

……つか、道端で偶然ツチノコと出会ってしまった時の顔って、どんな顔！？

「今度は突然、頬つぺたをマッサージし出してどうしたんだね、弟君？ これは別に悪い意味じゃないが、どうやら最近、色々と、心というか、スタンスが揺れているようだね？」

「別に……仕方ないだろ、想定外のことばかりが起こるんだから。姉さんに騙されて、あいつらを押し付けられてから、トラブル続きで、怒りっぽくなるし。おかげで京極と決闘まですることになっちゃまうし。自分でも色々と混乱してるんだよ。大体、元はと言えば姉さんが」

「はいはい、分かってる分かってる」

まるで全てを理解したかのような笑顔で、ばんばんと背中を叩い

て来る。痛い。そして、絶対に分かってない。

「まあ、若いんだから、心やら考え方が揺れるのは当然のことだよ、弟君。さつきも言っただろう？ スタンスが揺れるのは別に悪い意味じゃないって。もっと揺れたまえ。ぐらぐら揺れたまえ。揺れに揺れて何か新たなものを見つけたのが、思春期というものよ！ それでも見つからない時はっ」

白衣を、ぱつとコウモリの羽のように広げる姉さん。

「未佳にも負けないお姉ちゃんの豊満な胸に飛び込んで来て、思う存分に甘えたまえ！ さあ！」

「断固拒否する！」

「何だ、つまらん」

沙耶みたいに口先を尖らせ、姉さんは羽を下ろす。

「思春期……」

一瞬、その言葉を頭の中で反芻して、俺は首を横に振る。

思春期なんてものは、十年前に親父が死んだ時に捨ててきた。別に後悔なんかしていない。そんな不安定なものはいらない。

「それはそうと、弟君。沙耶から、作戦は二段構えだと聞いたのだが、具体的にはどうするのかね？」

こちらの様子などお構いなしに、姉さんが尋ねて来る。

何か勘付かれるのも癪なので、俺は真顔で答えた。

「基本的には、サヤナミカへの合体を目指すのが作戦の一段階目だ。だけど、期間的に無理な可能性がある。というか、無理な可能性の方が高い。だから、作戦の二段階目は、合体をせずに三機のコンビネーションを駆使してミストリアと戦う。理想は、三機共に一般のスーパーロボット以上のハートドライブ出力を発揮出来るようになることだ」

このままだと、後者が実行されることになるだろう。

ハートドライブの出力は、ジリジリと伸びてはいるが、個人的にどうにも腑に落ちない点がある。合体が上手く行かないのも、技術より、その点が関係しているような気がするのだ。

「メインは、誰にするんだ？」

「ここで姉さんが言う「誰にする？」は、俺がサヤ、ナミ、ミカの内、どの機体に搭乗して戦うのかという意味であろう。」

「三機にはそれぞれコクピット席が用意されている。状況に合わせてパイロットが乗り分けられるようにする為であるらしい。サヤナミカ合体後は、胴体部の専用コクピットに移動するようになってい、とマニュアルには記述してあった。」

「個人的には、ミカあたりがベストだと思っていたんだけど」

「ああ、なるほど」

「姉さんは納得したように頷いた。」

「続きは言わなくていいぞ。今の弟君の台詞で、誰だか分かったかな」

「でしょうね。」

話は遡って、昨夜の作戦会議。

「はいっ！」

「二段構えの作戦を伝え、俺が誰に搭乗するかという話になった途端、一人の少女が元気よく手を挙げた。」

「ボクがいいと思います！」

「もはやわざわざ言う必要もないと思うが、一応誰だか言っておくと、空風沙耶である。」

「奈美には十中八九拒否されるだろうし、選ぶなら沙耶か未佳のどちらかだろうと思っていた。しかし正直、沙耶は何かと不安要素が多い。完全に独断と偏見だが、やる気が空回りして失敗しそうな感じがするのだ。何となく。」

「故に。」

「個人的には、未佳がいいと思ってるんだが、どうだ？」

「えっ、ウチ？」

「はいっ！ はいっ！」

目の前で、ぴよこぴよこことピンク色のツインテールが揺れている。俺は更に気付かないフリ。

「ちなみに、奈美はやっぱり駄目……だよな？」

「ふん。聞かずとも答えは分かっているだろう、そんなこと。我は貴様をパイロットとして認めただけではない」

「ですよー」

沙耶を見る。ぱちりぱちりとこちらにウィンクを送って来ていた。どうやらアピールのつもりらしい。

うーむ、いや、しかし

「じゃあ、やはり、ここは一つ未佳に……って痛あッ!？」

ついには噛まれた。右手の甲をガブリと。

「うー！」

涙目を潤ませながら、がじがじと追撃を入れて来る。

「分かった！ 分かりました！ 沙耶で行こう！ 今回のメインは沙耶痛でででで！」

沙耶はがじがじを止めて、口を離し、上目遣いに尋ねて来る。

「……もう、意地悪しない？」

「ああ、分かった！ しない！ そこまで言うなら、メインは沙耶に頼むことにする。その代わり、責任重大だぞ？」

彼女は、ぱあっと満開の笑顔の花を咲かせた。

「うんっ！ ボク頑張るよ！」

そのまま「やったあ！」と一回転をして、部屋の中をはしゃぎ回る沙耶。

俺はそんな彼女を見、次にくっつきりと齒形の付いた自身の右手の甲を見てから、ため息をつく。

「不安だ……」



というような経緯があつて。

合体練習を開始した次の日の早朝。

俺は沙耶と一緒に、近くの河原へと向かっていた。

「ふんふんふん　　ふん　　」

雀が舞う青空の下、今日も元気に、ぴよっぴよっことツイントールを揺らしながら、俺の前でランニングを続ける沙耶。自宅の前で「まずは河原までBダッシュ！」、「北斗くん、Bって何!？」というやりとりがあつてから、鼻歌を奏でつつ、快走を続けている。

いや、快走というか、もはやスキップだ。しかも、体力無尽蔵のスーパーロボットとあつて、かなり速い。

天才の俺としては、自分のスーパーロボットに負けることは、プライドが許さないので、全力疾走で付いて行っているのだが……目の前の少女、ノリノリである。

こちらは朝から汗水垂らして必死だというのに、このテンションの差は一体何だというのか。

納得がいかないので、聞いてみた。

「……おい、沙耶」

「うん？　どうかした、北斗くん？」

「お前、何でそんなに嬉しそうなんだ」

沙耶は「えへへ」と照れ笑いを浮かべて、

「だって、二人きりでこうしていると、何だか早朝デートみたいじゃない」

「デートって……あのな、俺達は決闘の為の特訓をしに行くんだぞ？　第一、幾ら何でも、この服装でデートはないだろう」

俺は自分の着ているグレーのジャージを摘まんで引っ張る。沙耶も同じく、上も下も長袖の、赤いジャージを着用していた。

すると、彼女はわざとらしく笑う。

「ふっふっふ。その言葉を待っていたよ、北斗くん！」

急ブレーキを掛けて立ち止まり、身体を百八十度反転させて、俺の方を向く。

「こんなこともあるつかと、新たなモードを獲得しておいたのさ！」  
「は？」

追いついて足を止める俺の前で、沙耶は特撮の某改造人間が変身する時のように右手を構える。

「チエンジ・サヤ！」

彼女は両手で腰を叩いた。

「ジャージブルマーモード！」

履いていた赤いジャージのズボンが光り輝く。それは、圧縮ナノマシンが活性化する際に発せられる輝き。

ジャージの裾が、糸が解けるように消えて行き、沙耶の白い太腿が露出した所で、残った布地の部分に圧縮ナノマシンが収束して行く。

彼女が腰から両手を離すと、光が粒子となって弾け飛び、赤色だった布地は紺色に変化。

ジャージの赤いズボンは、紺色のブルマーへと変身を遂げていた。  
「変身完了！」

赤いジャージの上着と合わせ、ジャージブルマーとなった沙耶の姿が、そこにあった。

「どう、北斗くん？ これぞ訓練時対北斗くん用決戦兵器ジャージブルマー！ 訓練しながらも、北斗くんに対して絶大なアピール効果を誇るこの服装。しかも！」

彼女はブルマーの内側に格納されていた上着の裾を外に出す。

「北斗くんの好みや、その日の気分に合わせて、上着の裾を自由にブルマーの中に入れてたり出したりすることが可能！ さらにっ！」

上着の前にあるファスナーを下ろし、中に着ている純白のティーシャツを曝け出す。

「第三のバリエーションとして、このように上着を羽織る感じの、ファスナーオープン形態も再現出来るのだあー！ ……ふっふっふっ、どうよ北斗くん。これだけ揃えば、北斗くんはもう完全にメロメロだって、機能を追加してくれた博士も言ってたよ！」

「あんのバカ姉……！」

肝心の合体を俺に押し付け、こんな下らない機能ばかり追加しやがって。一体何を考えてるのか。

「っーか、何度も言ってるけど、俺は別にジャージブルマーが好きなわけじゃない！」

「えええええ！？ 違うのお！？」

「何その新鮮な反応！？ 完全に頭の中で俺にジャージブルマーの図式が出来上がってるよねソレ！？」

沙耶は心底残念そうに肩を落とす。

「ちえー、せつかく北斗くんを喜ばせられると思ったのになあ」

「喜ばす？ 俺を？」

「うん。ボクが北斗くんに出来るのって、これくらいだから真顔でそんなことを言う。」

俺は彼女の額にチョップを喰らわし、表情を崩してやった。

「せいっ！」

「あ痛っ！？ 痛いよ北斗くん！」

「お前、何か弱気になってないか」

沙耶の肩が震えた。

「あつ、えつと……」

「弱気のままじゃミストリアに勝てないぞ。決闘の時にメインをやるんだろ？ だったらもつと、自信を持って、強気に行け。その為にこれから河原で、勝つ為の特訓をするんだからな」

「そ、そうだね！ うん！」

自分に言い聞かせるように頷く沙耶。

もしかすると、彼女なりに緊張しているのかもしれない。やる気があるだけに、なおさら。

「よし、だったら河原に急ごう。決闘まで期間がないからな。今日から日曜日まで、気合いを入れて行くぞ！」

「うん！」

笑顔を見せて、沙耶は再び前を走り出す。

ふと、俺はその笑顔に違和感を覚えた。

何だ……？

今のは、いつもと違う笑顔であった気がする。いつも放っていた輝きが鈍っているというか、そんな感じ。

ひよっとして、沙耶のハートドライブ出力が伸びない原因はそこにある……？

だとしたら、注意深く彼女の言動を観察していかねばならない。

だが、原因が分かるまでは、決闘の方に集中しなくては。たとえ彼女の心の詰まりを解消したとしても、肝心の決闘に負けてしまつては、元も子もないのだから。

俺は一通り考えをまとめてから、彼女の背中を追って駆け出した。

俺達が住んでいる住宅街を抜けた先には大きな川があつて、そこには広い、砂利敷きの河川敷がある。

「必殺技？」

堤防を登って降りて、その河川敷に辿り着いた俺が特訓の内容を話すと、沙耶（訓練時対北斗くん用決戦兵器ジャージブルマー・フアスナーオープン形態）は、首を傾げた。

「そう、必殺技だ。今日から日曜までの間、毎朝、沙耶には俺と一緒にこの場所で、新しい必殺技の特訓をしてもらう」

「おおっ！」

手を胸の前で合わせて、瞳をキラキラとさせる沙耶。

「必殺技というと、ロケットパンチとか、胸からミサイルとか、最近で言うと、腕が月まで伸びちゃったりとか！」

「いや、それは根本的に身体を改造しないと無理じゃね？」

あと多分、どんなに改造しても、腕が月まで伸びるようにはならないと思う。

「俺が教えるのはそういう必殺技じゃなくて、お前のハートドライ

ブから出るエネルギーを利用した奥義だ、奥義。お前も幾つか使えるだろう?」

「えっ? 例えば……ファイヤーボール・スパイクとか、ファイヤーブレードとか?」

「そう。そんな感じのやつ」

今更だが、ハートドライブには属性というものが存在する。発せられるエネルギーの質と言ってもいい。数日前に三人娘が自宅を破壊した際に使っていたものがそれで、沙耶は炎、奈美は氷、未佳は雷を操る。スーパーロボットの性能を決める要素の一つであり、戦術に大いに関わってくる。

「沙耶のハートドライブ属性である炎は、とにかく攻撃力が高い。今回はその攻撃力を最大限に発揮する為の必殺技を覚えてもらう」

「はい! 北斗くん、質問!」

沙耶が手を挙げる。

「よし、言ってみる」

「オールバック男の連れているスーパーロボット、ミストちゃんのハートドライブ属性は、何なの?」

「いい質問だ。今回の特訓は、彼女のハートドライブ属性を打ち破る為のものでもある。ミストリア四式のハートドライブ属性を教えようと、『幻』だ」

「マボロシ?」

「その名の通り、相手に自身の幻影を見せる。分かりやすく言うと、忍者みたいに分身する。最大何体まで同時に分身出来るのかまでは分からないが、今までに俺が見た限りでは、十体。この能力が厄介なのは、作り出す分身には、実体があつて、実体がないことだ」

「実体があつて……実体がない……?」

俺は頷いて、右手の人差し指を立てる。

「まず最初にミストリアの実体であるAがいたとしよう。これが、ハートドライブの力でBという分身を作り出したとする」

人差し指に加え、中指を立てる。

「さて、じゃあこの時、本物のミストリアはどっちだと思う？ 沙耶はどちらに攻撃する？」

問い掛けると、彼女はすぐさま、俺の人差し指を握る。

「普通にAじゃないの？ だって、実体なんでしょ？」

俺は首を横に振る。

「残念、この時の正解はBだ」

「え？ どうして？」

「これがミストリアの能力の真骨頂、『実体交換』だ。ミストリアは好きな時に分身と実体を入れ替えることが出来る。つまり、沙耶がAを攻撃した時には、分身のBが実体にならなくて、沙耶の攻撃はAを擦り抜けてしまう。もしもBを攻撃したとしたら、Aを実体のままにしておくだろうから、まあ、どちらにしても不正解だな」

沙耶はしばらく、狸にでも化かされたかのような顔をしていたが、次第に大きい瞳を更に大きく見開いて、ついには声を上げる。

「そんなの勝てるわけじゃないじゃん！」

「だから、勝てるようになる為に、必殺技の特訓をするんだ。ミストリアの能力は確かに強力だが、隙がないわけじゃない」

「な、何とかなるの？」

「ああ。相手が何体の分身を作り出して襲って来ようとも、必ずこちらの攻撃を当てる方法が一つだけある」

俺は言った。

「カウンターだ」

相手がどんなに分身でフェイントを掛けても、攻撃する瞬間だけは必ずそこに実体がある。実体でなければダメージを与えられないのは、相手も同じこと。

「相手の攻撃の瞬間を見極め、一撃必殺の威力を持つ技で、逆に敵を仕留める。合体せずにミストリアを倒すには、この方法しかない」

「カウンターで……一撃必殺……！」

「しかし、ミストリアのハートドライブは出力強化型で、一般機よりも遥かに強固なバリアーを張っている。加えて、相手は重装甲型。

ハートドライブ出力で圧倒的に劣るこちらが普通に攻撃したところで、おそらくびくともしないだろう。ミストリアの防御を上回る方法はただ一つ。沙耶のハートドライブの全エネルギーを一点に集中させて、思いっきり叩き込む！」

右の拳を、左手の平に叩き付ける。

沙耶は自分の拳を見つめ、ぐっと握り締める。

「ボクが……叩き込む……！」

「訓練方法は至ってシンプルだ。拳にありったけのエネルギーを溜めて、腕を引き、思いっきり前に突き出す。これだけでいい。重要なのは、拳にどれだけ多くのエネルギーを集められるかだ」

「分かった。やってみる」

頷いた沙耶は、右拳を前に出して、そっと瞼を閉じる。

唇が少し動いて、ゆっくりと深呼吸をする。

まず現れた変化は、ふわりと浮き上がるピンク色の髪。熱気が彼女の身体の周りを渦巻いているのだ。

俺にも高い温度を伝えていた熱気は時間が経過するにつれ、段々と引いて行き、代わりに右拳が赤い光を帯びて行く。

赤い光が大きくなって来たのを見計らい、沙耶はジャージの右袖を捲る。炎が燃え移らないようにする為だろう。

「ラブ

」やがて、彼女はそう呟きながら、右腕を引く。

「ファイヤアアア

」川を流れる水面の方へ向かって、勢いよく拳を突き出した。

「パアアア

」ンチッ！」

……。  
……。  
……。  
しーん。

河原に沈黙が流れる。沙耶の拳からは、炎どころか、熱気の一つも出やしない。水面には、波紋すら立たない。

「…………あれ？」

彼女はぶんぶんと右腕を振ってみたり、ぼんぼんと左手で右拳を叩いてみたりする。反応はない。

そうして顔に近付けて、観察し始めたところで、ぼんつという音と共に、真つ黒な煙が噴出した。

「けほっ、けほっ！」

涙目で咳込む沙耶。

どうやら、この訓練も時間が掛かりそうである。いや、何となく分かっていただけけれども。

ただ、俺には、今この場で、どうしても彼女に訊いておかなければならないことがあった。

「沙耶」

「けほっ…………何、北斗くん？」

「必殺技の名前、どうしてもそれじゃなきゃ駄目か？」

ラブファイヤーパンチは…………恥ずかし過ぎる。

ラブファイヤーパンチで押し切られた。

また、今朝の時点では必殺技のコントロールに時間が掛かりそうだと思っていたのだが、沙耶のやる気は、どうやら俺が思っていたよりもずっと上であつたらしい。

合体練習の方は相変わらず成功の兆しを見せないままに夜を迎えてしまったが、きっかけは就寝前のこと。

明日も早朝から特訓をするから、あまり夜更かしをするなよー、と一応注意しておこうと思ひ、俺は自宅二階の沙耶の部屋を訪れた。ところが、扉をノックしても、返事がない。

「沙耶ー？」

更に二度、ノックする。部屋の中からは、物音一つ聞こえて来ない。



もう寝てしまったのだろうか？

「貴様、沙耶の部屋の前で何をしている」

振り向くと、寝巻き浴衣姿の奈美が廊下に立っていた。

普段ポニーテールの髪を下ろしており、浴衣の色は純白、それに負けじと白い肌に、細身の体が相俟って、今の彼女は大和撫子という言葉を連想させる。いずれにしても似合っていた。

奈美は険しい表情のまま、沙耶の部屋の扉を見、俺に視線を戻す。

「まさか、部屋に侵入し、沙耶の下着を盗むつもりか！」

「盗むかつ！」

訂正。大和撫子なんてどこにもいませんでした。世界の  
大和撫子ファンの皆さんゴメンナサイ。

奈美は侮蔑の眼差しを向けて来る。

「何て下劣な男だ！ 当人が部屋にいないのをいいことに、自由に柄まで選択、それを自分の部屋に持ち帰って、あんなことやこんなこと、おまけにそんなことまでだど！？ おのれ……日頃洗濯して干す際に嫌というほど見ているのにも関わらず、今度はそれを自らの手中に収めようとするとは……恥を知れこの外道ッ！」

「既に下着泥棒扱い！？ もう嫌だ！ 二度とお前らのぱんつ洗濯しない！」

主夫なんて止めてやる！ と宣言しようとして、奈美の罵倒の中に、重要なワードが含まれていることに気付く。

「……待て。沙耶は今、部屋にいないのか？」

「ああ。ジャージに着替えて、外に出掛けて行ったぞ」

「こんな夜遅くに？」

手首のSRコマンドを見ると、時刻はもうすぐ深夜の零時を回ろうとしている。

奈美は肩に掛かっていた髪を、手で背中に払って、

「自主練だそうだ。河原に行くと言っていた」

「あいつ……。分かった。ありがとう、奈美」

「戯けたことをぬかすな、下着泥棒。貴様に礼など言われる筋合い

はない。あつ、ちよつ、髪を乱すな馬鹿者！」

下着泥棒と言ってくれた礼に、わしゃわしゃと頭を撫で、俺は自分の部屋に向かう。

寝巻きからジャージに着替え、靴下を履き、一階に下り、リビン  
グで懐中電灯を回収してから、玄関で運動靴に足をつ込む。そこ  
で家の鍵を忘れたことに気付き、自室まで一往復した後、外に出る。  
夜空には、今が梅雨であることを全く感じさせない程に明るい月  
と星々が煌いており、住宅街を照らしていた。

とりあえずは懐中電灯を点けなくてもよさそうである。俺は玄関  
の施錠を確認してから、河原へと走った。

やがて、見えてきた堤防へと登り、河原に小さく灯る赤い光を視  
界に捉える。

それに照らされて、うつすらと浮かぶツインテールのシルエツト  
は、間違いなく沙耶であった。

彼女は流れる川に向かつて、拳に赤い光を灯しては、腕を引き、  
前に突き出すという動作を、休むことなく繰り返している。

堤防を降りて、歩み寄るが、それでも彼女は気付かず、何度も、  
何度も、必殺技の手順を繰り返す。

やがて、彼女は疲れたのか、肩を上下させながら、右腕をぶら下  
げる。

「沙耶」

俺が声を掛けると、彼女は「ひゃあつ!？」と身体を震わせて、  
大きく後退さる。何故か恐怖を顔に浮かべて、

「ほほほ北斗くん!? えつと、こ、これはその、決闘まであと数  
日しかないんだなあって思ったら、緊張してきちゃって、居ても立  
ってもいられなかったというか……! ご、ごめんなさいッ!」

勢い良く頭を下げる沙耶。だらんとツインテールが垂れ下がる。  
「何で謝るんだ? 沙耶は自主練してたんだろ? 別にそれは怒  
られるようなことじゃないだろ」

「う、うん、だけど……」

「だけど？」

「えっと……」

沙耶は俺の顔色を窺うように、ちらちらと視線を送って来る。

「ああ、夜遅く外出したからか？ まあ、確かに、一言断っておいて欲しかったな」

そんな考えは、沙耶の練習する後ろ姿を見て、いつの間にか吹き飛んでいた。

「そ、そうだね。ごめん」

「奈美に部屋にいないって聞かされて、これでも心ば」

言い掛けて、手で口を塞ぐ。

ちよつと待て。俺、今何て言おうとした！？ 何かとてつもなく恥ずかしいことを、さらりと言おうとしていなかったか！？

「北斗くん？ 今何て……」

「何も言っていないッ！ 何も言おうとしてないッ！」

「いや、でも何か……」

「そんなことよりも！ 必殺技の調子はどうなんだ！？」

強引に話を逸らす。

沙耶はしばし、不思議そうに首を傾げ、大きな瞳をぱちくりとさせていたが、首を横に振る。

「イマイチなんだ……。どうにも拳にエネルギーを集中させる感覚が掴めない。幾ら風船を膨らまそうとしても、どこかに穴が開いていて、そこから空気が逃げて行っちゃう感じで……」

そう言って、右手を開いたり閉じたりする。

「とりあえず、もう一度、やって見せてくれるか？」

「分かった」

流れる川の方を向き、沙耶は再び、右拳を赤く発光させる。

「はあああ……！」

エネルギーを溜める為に、自然と力が籠もるのだろう。右腕が震えている。

沙耶は溜まったエネルギーを逃がさないようにする為か、早々と

腕を振りかぶる。

「てえええい！」

掛け声と共に、拳を突き出す。何度も練習したとあって、横で見  
ていた俺の方にも温かい風が流れて来る。

だが、それだけだった。緩やかな水面にわずかな波紋を立てる程  
度。

「北斗くん、こんな感じなんだけど……」

「うーむ」

俺の気になった点は、二つ。

「多分だが……沙耶。お前、右拳に直接エネルギーを集めようとし  
てないか？」

「え？」

大きな瞳を瞬かせていることで、俺はそれを肯定だと受け取る。

「右拳に集めるのは、感覚的にはエネルギーじゃない。そもそも、  
そのエネルギーは何から生み出したものだ？ ハートドライブから  
だろ？」

「あつ、そうか……エネルギーを集めるんじゃない、感情を集め  
るイメージ……！」

ほんと両手の平を合わせる沙耶に、俺は頷く。

「おそらくは。集めているエネルギーの本質を把握し切れていない  
為に、集まりきらなかったんだと思う。もう一つ気になったのは、  
そのせいか、エネルギーが集まりきらない内に、早々と腕を引くモ  
ーションに入ってしまったことだ。この必殺技は、全てのエネ  
ルギーを一撃に込めるものだから、練習は数をこなすんじゃなく、  
一回一回を大事にしないと駄目だ。タイミングを外して、溜めたエ  
ネルギーが霧散してしまってもいい。限界まで溜めることが大切だ」  
「なるほど……うん！ 何だか出来そうな気がして来たよ！ さす  
がは北斗くん、天才だねっ！」

そこだけ昼間と見間違えるような、底抜けに明るい笑顔を見せる  
沙耶。

……あれ、おかしいな。当たり前のことなのに、他人から自称じやなく天才と言われたのは、生まれて初めてな気がする。いやいや、まさか。そんなことは。

沙耶は「よし、またやる気が出て来たぞ。そうだ！ 今度は大車輪式で」とか言いながら、ぐるんぐるんと右腕を回し始める。

「あつ……沙耶！ 練習はあと一時間だけだ。起きられずに、明日の早朝の特訓が出来なくなったら、自主練の意味がないからな」

「了解ー！」

時間制限を設けたところで、必殺技の練習が再開される。

今度は力む感じではなく、精神統一するように、静かに右拳にエネルギーを溜めている。先程までとは明らかに様子が異なり、右拳の光がどんどん強さを増して行く。

そして、腕を引き、解き放つ。巻き起こる熱風。

沙耶は肩を上下させ、呼吸を落ち着かせてから、また溜めのモーションに入る。

月に照らされた横顔は、凜として、真剣だ。

それは、俺にとって、初めて見る沙耶の表情。

ふと、疑問が湧く。

「なあ、沙耶」

「うん？」

練習の合間、呼吸を整えている時に尋ねてみる。

「どうして急に、自主練をする気になったんだ？」

「それは……」

俺を見て、沙耶は少し逡巡したようだったが、口を開く。

「……北斗くんがボク達の為に、練習をしてくれるようになって、ボクはそれに応えたいって思ったんだ」

彼女は月を見上げる。

「オールバック男に馬鹿にされた時、ボクは何も言い返すことが出来なかった。現状を認めてしまったと思う。どこかで合体なんて出来ない、これ以上強くなれないって、諦めかけてたんだ。だ

けど、北斗くんが怒ってくれて、ボクは頑張りたと思って思った。諦めないで、もう一度頑張ってみようって思った。だから  
大きな瞳が俺を映し出す。

「見てて、北斗くん。ボク、必ず役に立ってみせるから」  
俺には、もう一つ疑問に思っていることがあった。

それは、前にも思ったが、どうして沙耶がここまで俺に信頼を寄せられるのかということ。

俺は沙耶が思っているような男じゃない。決闘が終わって、合体を成功させたら、彼女達から離れて行く。他のパイロットと変わらない。

練習を続ける沙耶に、再び聞こうとして、止める。

それを聞いて、俺は一体どうするのだろうか。せっかくやる気を出している彼女に、水を差すようなことを言うのか？

それとも、彼女に同情をして、パイロットを続けるのか？

わざわざ自分で問題を広げる必要はない。そう思う。少なくとも、京極との決闘が終わるまでは。

それから毎日、サヤナミカへの合体練習と、朝と夜の必殺技特訓を繰り返して、二週間が経ったある日の早朝。沙耶のやる気はついに形となって現れることとなる。

河原に着いて、練習を繰り返した、十一回目。

既に沙耶は何度も全力でエネルギーを放出し続けている為に、疲労が顔に現われ、額や首筋を汗が伝っているのが見えるのだが、彼女の瞳には強い光が、未だ消えることなく宿っている。

「ラブ」

沙耶が右拳に紅蓮の光を灯す。昨日とは比べ物にならない程に眩い輝きは、まるで小さな太陽のよう。しかし、以前は少なからず感じられていた、肌を焼くような熱さ、空気の震えはない。静かに、

拳の輝きだけが増して行く。

「フアイヤアアア」

弓を引き絞るように、彼女は大きく腕を引く。拳の光が軌跡を描き、彼女の周りを渦巻く風に、ピンクのツインテールがなびく。

「パアアア　ンチッ！」

そして、渾身の右ストレートを放った。

直後、轟音と共に、右拳から凄まじい突風が巻き起こり、川を横切るようにして、水面が真っ二つに割れた。

肌を焼くような熱風が俺の前髪を揺らし、切り裂かれた川から水飛沫が上がって、雨のように降り注ぐ。

間違いなく成功と言っている一撃であったが、放った本人は初めての現象に実感が持てないようで、水飛沫を浴びてびしょ濡れになりながら、瞳をぱちくりとさせる。

「ほ、ほ、ほ、北斗くんっ！」

川の方を指差しながら、こちらに視線を送って来る沙耶。

俺はすっかりと頷いて見せる。

「ああ、成功だ」

沙耶の表情に、ぱあっと歓喜が広がった。

「やったあ　っ！」

彼女はガッツポーズをし、ラグビーのタックルのごとく俺に抱きついて来る。

「おわっ!?　ちよっ、沙耶、倒れる倒れる！」

砂利敷きの上で尻餅をつく。だが、そんなことはお構いなしに俺の胸にぐりぐりと頭を押し付けて、喜びを表現する沙耶。先程までの疲労はどこへやら、元気一杯の笑顔。

「やった！　ボク、出来たよ北斗くん！　ボクにも出来た！」

俺は彼女の頭を撫でる。

「分かった分かった。ただ、喜ぶのはいいが、まだ一回成功しただ

けだ。今のイメージを大事にして、コンスタントに出せるように……  
…って、聞いてるか？」

「……うん！……うん！」

本当に嬉しくて堪らないのだろう。沙耶はただただ頷く。

「やれやれ……」

俺はため息をつきつつも、今この瞬間、沙耶の必殺技が成功して、素直に嬉しいと思えたのだった。

同日、午後四時過ぎ。地球防衛局東京第一支部指令所内。

何十人という局員が目の前のキーボードに向かい合っている広い室内は、地下にある為に窓はなく、現在は警戒態勢に入ったので薄暗くなり、指令所最前部にあるメインスクリーンが照明代わりとなっている。

局員が口頭で情報を交換し合って騒がしい中、髪伸び放題の白衣の女性が、栄養ドリンクの蓋を捻って開けながら、メインスクリーンに流れる映像を見つめていた。スーパーロボット開発部総責任者、白坂南である。

彼女は局員の一人である男性に、声を掛ける。

「あー、君、この次元震が観測されたのは何分前だったかな？」

「今から七分前です！ 日本標準時刻にして、午後三時五十九分三十八秒」

「既に七分か……ふむ」

栄養ドリンクの瓶に口を付けて、喉に流し込む南。

指令所の自動ドアが開いて、明るい髪色をした三つ編みの女性が入って来る。胸のプレートには『司令』の二文字が刻まれている。

「状況は？」

地球防衛局東京第一支部指令、羽柱鈴音が南に尋ねる。

髪伸び放題の悪魔は振り向き、ニヤリと笑って、



「遅いじゃないか、スズ。マズイことになってるよ。」

「いや、マズイことになってるのを伝えるのに、口元が笑ってるってどうなのよ？」

「おっと、悪いね。つい癖で」

「とにかく、状況を詳しく教えてくれるかしら。避難指示の警報を何故鳴らさないの？」

鈴音は指令所の最後部、中央の席に腰掛ける。

南は「ちよつと借りるよ」と、局員の男性の前にあるキーボードを操り、メインスクリーンに映像を表示する。

「今から少し前、東京上方に位置する宇宙空間で、強力な次元震が観測された。これが人工衛星で撮影された、その時の映像」

宇宙空間に一本の亀裂が走り、それが広がり、やがて砕けて直径四十メートル程の大穴が開く光景が映し出される。

「え？」

鈴音は訝しげに眉をひそめる。

映像の中の亀裂はしばらくして、巻き戻されるように閉じて行く。最後には何事も無かったかのように、元の宇宙空間の姿になった。

「南、これは……」

「ああ。次元震は確かに確認された。しかし、映ってないんだよ。

肝心の――

南は最後の一口を飲み切り、空になった栄養ドリンクの容器を白衣のポケットに突っ込む。

「宇宙怪獣が」

過去二度を除き、人類の脅威はいつも同じ方法で地球へと進攻して来た。宇宙空間の外 別次元を通り、通常よりも短時間で長距離を移動する次元跳躍。地球大気圏外ギリギリのところ、次元の壁を突き破り、宇宙怪獣は出現するのである。

「じゃあ、次元の亀裂は偶然起こったもので、宇宙怪獣が次元跳躍して来たわけではない、ということ？」

「ありえないな、それは」

南はいつになくはつきりと断言する。

「宇宙空間が裂けるなんてことは、何かが次元跳躍して来た以外にまずありえない。仮に偶発的に起きたとしても、発生確率は天文学的数字、大きさは針の穴程度のものだ。それが直径四十メートルの大穴、次元震が観測される程のものになって、偶然発生したなんてことは絶対がない。スズ、次元震は何かによって大きく次元が歪められるから発生するんだよ？」

「だとしたら、敵は新種の……」

「姿を消せる宇宙怪獣、という可能性が高い」

そう言った南と、鈴音の視線が交錯する。

「……参ったわね。よりによって、ベテランパイロット達が出払ってるこんな時に……！」

「出払ってるからこそじゃないの？ どうするんだい、スズ」

鈴音は目を瞑り、左手の親指で、下唇をなぞる。

すると、指令所内のざわめきが消え、静寂に包まれる。局員達全員、指示を仰ぐべく、司令である鈴音の方を向く。

やがて鈴音は目を開けると、右腕を薙ぐように振った。

「総員、第一種戦闘配置！ 東京一帯に避難指示発令！ ミストリア及びサヤナミカのパイロットに出撃要請！ 観測班は少しの異変も見逃さないで！」

指令所内が一気に騒がしさを増した。

その日の沙耶ときたら、早朝の特訓以降、とにかくもうご機嫌である。

登校時は公道で、前を見ずに踊り出したものだから、電柱に頭をぶついたりするし、学校では授業中に何やら妄想に耽っており、先生に注意されたのを差されたと勘違いしたらしく、慌てて立ち上がり、「はい、分かりません！」と発言して、クラスメイト達に爆

笑されたりしていたが、いずれにしても終始にこにこと笑顔を絶やさなかった。

「ふふふん、ふふふん　ふふふん」

放課後になり、合体練習の為に地球防衛局へ向かう道中も、一番先頭で、鼻歌とスキップで嬉しさを演出している。

そんな沙耶に代わって俺の横を歩く未佳が、「ウチはまだ信じられへん」と言葉を洩らした。

「なあ、ほーやん。本当にさーやんの必殺技、成功したん？　だって、練習を始めたのって、二週間前なんやろ？」

「成功したのは本当だ。といつても、その後の練習で何度か失敗してるから、成功確率としては、まだ半々くらいだけどな」

それでも俺は、上出来だと思っている。わずか二週間で、沙耶はエネルギーのコントロールを身に付けたのだ。やはりサヤナミカは、磨けば光る力を秘めている。今回のことで確信した。

何気なく、スキップしている沙耶の後ろ姿を見つめっていると、じつと横から未佳が俺の顔を覗き込んでいることに気付く。

「どうした、未佳？」

「ウチ、ほーやんが笑ってるの、初めて見た……」

「笑つ……！？」

俺は反射的に自分の顔を押しさえる。

笑っていた……俺が！？　確かに沙耶が必殺技を成功させたことは嬉しく思っているが、顔を綻ばせた覚えはない。無意識に頬が緩んでいたとでもいうのだろうか。そんな馬鹿な。

指摘されて、あれこれと考えている内に、妙な恥ずかしさで顔が熱くなつて来る。

話を聞いていたらしく、前を歩き、ポニーテールを揺らしていた奈美が言った。

「くだらん。必殺技の一つや二つ出来るようになったくらいで、何が嬉しいんだか。まだ実戦で使ってもいないというのに」

先頭の沙耶が、身体ごと振り返る。

「大丈夫だよ」

彼女は俺を見て、それから奈美を見た。

「せっかく北斗くんに教えてもらったんだもん。たとえ宇宙怪獣が攻めて来たとしても、今度こそラブファイヤーパンチで倒してみせる。ボクはこの必殺技で、北斗くんの役に立つんだ」

沙耶の力強い瞳と言葉に、奈美は「ふん」と鼻を鳴らして、そっぽを向く。

ふと、未佳が横で呟いた。

「さーやは、ほーやんのこと、本当に信じとるんやね……」

俺は金色の癖っ毛を見下ろす。彼女は意識しないと聞き取れないくらい小さな声で、

「けど、ウチは」

その先の言葉は、突然上がった爆音によって掻き消された。

「何だ!？」

遠くの方で、大きな火柱と共に、黒煙がもうもつと上がっている。まさか、宇宙怪獣……!? だが、避難警報はまだ鳴っていない。

そう思った直後に、避難警報のサイレンが辺り一帯に鳴り響く。

連動するように手首のSRコマンダーが音を立て、ボタンを押すと、画面から出た光が空中に四角のウィンドウを作り出し、そこに鈴音さんの顔が映った。

『北斗くん、宇宙怪獣が出現したわ!』

「今、肉眼で西の方に黒煙が上がるのを確認しました。何で避難警報が遅れたんです!」

『そのことの説明は後です。今は一刻を争うの。サヤナミ力は現場に向かって、宇宙怪獣を掃討して頂戴』

「了解! 聞いたな、三人共!」

「うん!」「ああ」「把握したで!」

頷く三人娘。

俺は指示を出す。

「各機変身!」

「チェンジ、サヤ！」

「チェンジ、ナミ！」

「チェンジ、ミカ！」

掛け声と共に三人娘の肢体が眩い光に包まれる。

「ロボットモード！」

光はそれぞれ強く、巨大に変化し、全長二十五メートルのピンク、ライトブルー、レモンイエローのスーパーロボットを公道に顕現させる。

「サヤ！」

名を呼ぶと、ツインテールに似たバインダーを装備したピンクのロボットが地面に片膝を着き、そっと巨大な右手を俺の前に下ろす。「乗って、北斗くん！」

圧縮ナノマシンで出来た金属の手の平に乗る俺を、サヤは自身の腹部に持って行く。

サヤの腹部装甲が開いて、その奥にコクピットが出現する。

俺は中に入り、コクピット座席に着くと、コクピット右にあるポタンの一つを押し、開いている腹部装甲　コクピットハッチを閉めた。

同時に、全天を覆うようにモニターが付き、コクピット全体が透明のガラスに変わったかのように、上下左右三百六十度、外の景色を映し出す。

「サヤ、パイロットスーツ展開！」

モニターに四角のウィンドウが開き、人間姿のサヤが表示され、口を開く。

『了解！ えっと……コクピット内に圧縮ナノマシンを散布！パイロットの着ている服をパイロットスーツに変換！』

コクピット内にキラキラと光の粒子が舞い、俺の着ている制服を覆う。やがて、光が消えると、俺の服装は白を基調としたパイロット

トスーツに姿を変えていた。

「続いて、パイロットスーツ・ロック！」

『分かった！パイロットスーツ背面を座席に固定！3、2、1、ロック完了！』

ボルトの閉まるような音がする。確認の為に上半身を前に引つ張つてみると、スーツの背中と座席を繋げたチューブが少し伸びるが、立つことは出来ない。

「ロックに異常なし。サヤ、各部の調子はどうだ」

『オールグリーン！ハートドライブの調子も良好だよ！』

「問題ないな。それじゃあ、コントロールを借りるぞ」

座席の左右にある操縦桿を握る。片膝を着いていた機体を動かし、直立させた。

モニターを見ながら、サヤの両手を開いたり閉じたりして、操縦の感覚を確かめる。

「ナミとミカはどうだ？ 行けそうか？」

声を掛けると、サヤと同じく、モニターにウィンドウが開き、人間姿の二人の顔が表示される。

『問題などありはしない。さっさと出撃するぞ！』

『ほーやん、ウチも行けるぞ』

「よし！サヤナミカ、出撃する！サヤがメイン、ナミとミカは援護に回ってくれ！」

『了解！』『了解！』

俺はサヤの脚部と背面のブースターを点火し、日が傾きつつある空に飛び上がらせた。ナミとミカが付いて来ているのを確認してから、黒煙が上がる西の方へ飛翔する。

ピリリリと音声が鳴って、モニター横を見ると、『羽柱鈴音』の文字。自動的に鈴音さんのウィンドウが開く。

『北斗くん、サヤに搭乗したのね。本部のコンピュータと機体のハートドライブをリンクさせたわ。詳細な地点を送信します』

「了解。これより現場に向かいます」

『ミストリアも宇宙怪獣迎撃の為にそちらに向かっている。着くのは北斗くん達の方が早いわ。それで、現場に着いたら、宇宙怪獣について確認して欲しいことがあるの』

「それは避難警報が遅れたことと関係が？」

『さすが自称天才。察しがいいわね』

「自称じゃありません」

そこで再び、通信回線が繋がる音。モニターには『白坂南』の文字。新たなウィンドウが開き、見飽きた身内の姿が現れる。

『やあ、弟君。相変わらず白いパイロットスーツがキマっていて、お姉ちゃんは正直堪りません』

「ふざけている場合か。さっさと宇宙怪獣の説明をしろ」

『酷い！ 弟君はお姉ちゃんと宇宙怪獣、どっちが大事なんだね！』  
？

「宇宙怪獣」

『スズ、大変だ！ 私の愛しの弟君が宇宙怪獣フェチに目覚めて…  
…くああああ！ 頭が割れるように痛い！！？』

ウィンドウに表示された姉さんの頭に、誰かのアイアンクローがめり込んでいる。と、ウィンドウが消滅した。

鈴音さんのウィンドウを見る。そこには、何事もなかったかのよう  
うに、女神のごとき微笑みを湛えた鈴音さんが映っていた。

一応訊いてみる。

「あの…姉さんとの通信が途絶したんですけど」

『あら、そうなの？ 通信機の故障かしら。とりあえず、それはそれでいいとして、確認して欲しいことは、宇宙怪獣が姿を消せるのかどうか、ってことなの』

「姿を消せる？」

『次元震が観測された際、宇宙空間に裂け目が発生したのは映像で確認してる。ただ、そこに宇宙怪獣の姿が確認出来なかったのよ』

「宇宙空間に裂け目が発生したにも関わらず、肝心の宇宙怪獣の姿がなかった、ということですか？」

『そう。だから、今回の宇宙怪獣は、不可視になれる能力を持つ新種である可能性が高い、というのが南の推測よ。戦闘の際には、敵の能力をまず確認してから、十分に気を付けて戦って』

「現場の市民の避難は完了しているんですか？」

『何とか間に合いそうよ。北斗くん達が到達するまでには完了させるから、戦闘に集中しなさい』

「了解！」

サヤのスピードを上げて、モニター左上に表示されている地図の、明滅しているマーカーの地点に急ぐ。

数分で、高層ビルが立ち並ぶ、中心市街地に到達する。上空から見下ろすと、そこには既に上半分が破壊され、炎を上げるビルや、何かに押し潰され、無数の亀裂が走ったコンクリートの地面が、見受けられる。

サヤがウィンドウを開いた。

『ほ、北斗くん、羽柱司令の言った通り、これだけ被害が広がってるのに、宇宙怪獣の姿がどこにも見えないよ！』

「気を付ける。どこから仕掛けて来るか分からない。三機共、索敵に集中しろ！」

サヤの左右を固めている、ナミとミカにも呼び掛ける。

加えて、サヤに言う。

「サヤ。それから、外の音声を取り入れて、コクピットに流してくれ。目で確認出来ないなら、耳で確認する」

『う、うん！ 分かった！』

ウィンドウ内の彼女が頷くと同時に、機体に吹き付ける風や、下方で燃える炎の音、遠くでパトカーや救急車、消防車のサイレンの音がコクピットに入ってくる。

モニターに注意深く視線を走らせながら、耳を澄ます。

ふと、異質な音が背後から聞こえる。これは……コンクリートが砕ける音！

機体を百八十度反転させ、下方を見る。道路の真ん中に二つのク



レーターがある。

直後、風を切るような音が、コクピット内に響く、。

「来るぞ！ 全機、全速上昇！」

操縦桿を引き、ブースターを全開、足元に来た見えない何かを回避する。だが。

「にやあッ！？」

横から聞こえる悲鳴と共に、上昇していたレモンイエローのスーパーロボットの動きが止まり、逆に地面に吸い寄せられる。

「ミカ！」

その後、見えない何かに引き寄せられ、ミカは空中で円の軌跡を描くと、投げ飛ばされるようにして、高層ビルに突っ込む。崩れ落ちるコンクリートに飲み込まれ、機体が地面に埋もれる。

そこで、はっと思い付き、俺はライトブルーのスーパーロボットに向かつて、叫んだ。

「ナミ！ 下方に向けて、アイスブリザードだ！」

「何？ ……そうか！ よし！」

頷いたポニーテールブースターの機体は、真下に両手の平を突き出す。

「アイスブリザードッ！」

手の平から吹雪が発生して、中心市街地に勢いよく吹き付ける。燃えていた半壊のビルも、砕けたコンクリートの道路も、氷で覆ってゆく。

すると予測通り、その中に唯一、歪な形をした氷の塊が現れる。

「見えたぞ！ サヤ！」

「り、了解！ ファイヤーボール」

サヤが右手に火球を作り出し、それを宙に浮かせる。

「スパアアイクツ！」

火球を手の平で強打し、氷の塊に向かつて射出する。直撃して、爆風が巻き起こった。

機体を降下させ、今の爆風で溶けつつある氷の地面に着地させる。

ナミも横に降り立つ。

爆風が止み、白煙が消えて、姿を現したのは、左右が三百六十度別々の方向を見定めんとギョロつく双眼。

「お出ましたな」

およそ全長三十五メートル超。体の色は濃い緑で、二足歩行。長い尾を持ち、前足後足の爪はそれぞれ二股に分かれている。いや、詳しく説明しなくとも、目の前の宇宙怪獣は簡単に言い表すことが出来る。

二足歩行の巨大カメレオンである。

「なるほど、姿を消せるわけだ」

カメレオンが大口を開き、咆哮する。

「キシヤアアア ツ！」

ギョロリと双眼がこちらに向く。大きく開いた口から、真っ赤な舌が弾丸のごとく発射された。

すかさず横に飛んで避ける。コクピット内に響く風を切る音は、ミカを掴まえた時のものと同じ。

横のポニーテールブースターのロボットを呼ぶ。

「ナミ！ 俺とサヤが引き付けている間に、ビルの瓦礫からミカを助けるんだ！ それから三体で宇宙怪獣の動きを止めて、サヤの必殺技を叩き込む！」

「ふん、所詮は姿を消せるだけに敵に過ぎん。必殺技など必要ない」

「なっ!？」

ナミは右腕を構えると、氷柱のように凍らせて、槍を作り出す。

「こいつは我一人で仕留める！」

舌を蛇腹状に縮ませて収納したカメレオンに向かって、突撃した。  
「止せ、ナミ！ 戻れ！」

叫ぶが、ナミの突進は止まらない。

カメレオンが再び舌を射出する。その攻撃に対して、ナミはブースターで低空飛行し、ボディを回転させて潜り抜ける。

『はあああ!』

ナミは氷槍の突きをカメレオンに繰り出す。濃緑の巨体を浮かせ、突進の勢いのまま、背面に立つ高層ビルへ叩き付ける。

『これで……何!?』

ナミが驚愕の声を上げる。氷槍はカメレオンの身体を貫いておらず、二股の爪によって掴まれ、寸前で止まっていた。

「キシヤアツ!」

カメレオンの鳴き声と共に、掴まれた氷槍にヒビが入り、粉々に砕け散る。宇宙怪獣の身体が一回転し、長い尾がナミの脇腹の装甲にめり込む。

『かはツ!?』

ライトブルーの機体は吹っ飛ばされ、ビルを三つ貫いて、コンクリートの粉塵を宙に巻き上げた。

「ナミ!」

ギョロギョロと瞳を回転させながら、カメレオンが身体をこちらに向ける。しばらくして双眼が回転を止め、サヤを捉えた。

「くっ……!」

落ち着け、白坂北斗。ここは一旦防御に転じて、体制を立て直す。まずは宇宙怪獣の隙を突き、奴の動きを止める。次に瓦礫に埋もれたミカの回収。ミカを起こして、彼女にはナミを助けに行かせる。

そうして三体が揃ったところで、攻撃に転じる。焦りさえしなれば、やって出来ないことはないはずだ。

「サヤ! ファイヤーボール・スパイクで宇宙怪獣の両目を攻撃、怯んだところでミカを助け出す。機体制御は俺がやるから、サヤはハートドライブの出力安定に努めてくれ。行くぞ!」

ブースターを点火して機体を空中に浮かせるべく、操縦桿を引くが、全く動かない。

「サヤ!?」

「っ……!」

モニターのウィンドウには、俯くサヤが映っている。前髪に隠れ

て、表情を見ることは叶わない。

しかし、そこで、僅かだが、機体が震えていることに気付く。

「サヤ……お前」

サヤのウィンドウに気を取られていた一瞬、隙が出来る。モニタ  
ー前方に表示される『危険』の赤い文字。

「しまった！」

弾丸のごとく飛んで来た赤い舌が、サヤのボディに巻き付く。  
脱出を試みようとして操縦桿を動かしてもがくがどうにもならず、機体  
が凄まじい力でカメレオンの方に引き寄せられる。

そして、その勢いを利用して、ミカと同じく円を描くように振り  
回される。

カメレオンは、サヤを力一杯道路に叩き付けた。

コンクリートが砕ける音、金属の軋む音と、激しい震動が、コク  
ピット内にも伝わって来る。

「ぐっ……サヤ！ 大丈夫か！」

巻き付いていた舌が解かれる。カメレオンが道路に亀裂を増やし  
ながら、一歩一歩こちらに近付いて来る。

サヤのウィンドウは、今の衝撃で消滅してしまっている。だが、  
コクピット内に呻き声が響く。

『うう……こんなことで……負けるわけには……！ ボクは  
操縦していないのに、機体が勝手に起き上がる。』

『ボクは 』

モニターに表示されるハートドライブ出力上昇の図と文字。棒グ  
ラフが上昇して行く。

この出力は……まさか……！

「サヤ！ 落ち着け！ それを使うのはまだ早い！」  
嫌な予感的中した。右拳が赤く光り輝いている。  
止めさせるべく、操縦桿を動かすが、反応がない。完全に俺の  
コントロールを拒絶している。

サヤが何度も河原で練習して来た時のように右腕を引く。

「ボクは……北斗くんの役に立たなきゃいけないんだああッ！」

カメレオン目掛けて、一直線に飛び出した。ブースターで一氣に加速。懐に飛び込んで、炎の拳を突き出す。エネルギーが収束された拳に危険を察知したのか、巨体に似合わず、素早く飛び退いてかわすカメレオン。

「おおおおッ！」

サヤは間髪入れず、拳を炎で赤く染める。カメレオンに接近し、もう一度拳を振り抜く。

その攻撃をすり抜けるようにして、カメレオンの濃緑が透明に変わり、視界から姿を消失させた。

「き、消えた!?!」

動揺し、辺りを見回すサヤに、俺は再び呼び掛ける。

「落ち着け、サヤ！一旦後退するんだ！ナミとミカを助け出して、体制を立て直す！」

声が届いていないのか、サヤはまたも右拳に炎を纏う。休むことなく連続使用しているせいで、出力が下がっているのが、目に見えて分かる。

背後でコンクリートの砕ける音がした。

「サヤ！後ろだッ！」

「えっ……！」

サヤが振り向くよりも速く、カメレオンが巨体を現す。二股の爪が唸りを上げて襲い、サヤを跳ね飛ばす。

「きゃあああッ！」

機体が道路の上をバウンドし、転がる。それでも止まることが出来ず、サヤはビルの壁面に突っ込んだ。

コクピットが激しく揺れ、俺は危うく意識を持って行かれそうになる。頭を横に振って、意識を覚醒させる。

モニターに、機体の損傷状況が表示されている。損傷率四十八パーセント。これ以上まともに攻撃を喰らうとマズい。

「サヤ、無事か!？」

「うっ……あっ……ぐう……!」

ノイズ混じりの声。機体がゆっくりと起き上がる。

モニター正面に、こちらに近付いて来るカメレオンが見えた。攻撃の手を緩めるつもりは全くないらしい。

と、機体が大きく震え、サヤの動きは地面に座り込んだ状態で止まってしまった。それどころか、後退さを始める。

「あ、ああ……」

「サヤ……」

間違いない。サヤは今、目の前の宇宙怪獣に脅えていた。

機体が震えていたのも、がむしゃらに突っ込んでいたのも、彼女が脅えていたからなのだ。

モニターに映るカメレオンが、次第に大きさを増して行く。

「こ、来ないで……来ないでえ! 嫌ああ!」

地面に転がっているビルの瓦礫を片っぱしからカメレオンに投げるが、動揺している為にまるで当たらない。

ついには両腕を前にかざし、その場で縮こまってしまふサヤ。

「サヤ、立ち上がって逃げるだけいい! この場から離れるんだ!

このままじゃ、敵にやられるぞ!」

俺は操縦桿を引きながら何度も叫ぶが、機体はびくともせず、カメレオンが目の前まで迫って来る。

太い足がサヤの眼前のコンクリートを砕き、クレーターを作った。いつの間にか分厚い灰色の雲に覆われた空をバツクにして、二股の爪を天空に掲げる。

振り下ろされる鋭い爪の切っ先に、死を覚悟した、その時。

横から放たれたパープルカラーの巨腕が、カメレオンを殴り飛ばした。低空を錐揉み回転し、宇宙怪獣は地面に沈む。

巨腕の主は、全長四十メートルを超える巨大なスーパーロボットであった。全身を、西洋の甲冑を思わせる分厚い装甲で覆い、頭部のゴーグルの内で、黄色いアイカメラが強い光を放っている。直線

より曲線の方が多いフォルムは、重装甲タイプにも関わらず、首に巻かれた漆黒のマフラーと相俟って、どこか洗練された美しさを感じさせる。

スーパードロボットの名は、ミストリア四式。

『ミスト！ 敵がまた姿を消す前に、一気に決着を着けるぞ！』

『……了解しました、マスター。参ります』

オールバックの男とお付きのメイドさんの声がして、パープルカラーのスーパードロボットは、忍者のごとく、両手で印を結ぶ。

『 幻影の舞』

ミストが呟くと共に、機体が中心市街地に所狭しと分身。九体のミストリア四式が、倒れているカメレオンを囲むように出現した。

総勢十体もの全長四十メートル超の機体が、ビルの上、空中、道路に並んで、身体の前で腕組みをし、漆黒のマフラーを風に棚引させる光景は、壮観である。

カメレオンが上半身を起き上がらせる。

『させるものか！ ミスト！』

『……はい、マスター』

京極の叫びに、サヤの前にいたミストリアがブースターを点火し、カメレオンに突撃。アッパーを叩き込み、濃緑の巨体を宙に浮かす。

『 必殺奥義』

ミストの呟きに合わせ、十体のミストリアが、両腕の甲部から仕込み刀を展開する。全機が一斉にカメレオンに向かって、突っ込んだ。

『 『 百花繚乱ッ！』』

一つの実体を九つの分身とタイミングよく切り替え、一度の攻撃で、敵に無数の斬撃を与える、ミストリアの必殺技。

十体のミストリアが地面に着地する。

『 結』

京極がそう言うと、カメレオンが断末魔の咆哮を上げ、空中で爆散した。

俺達の苦戦が嘘のような、圧倒的な力。

分身が消え、ミストリアは元の一体に戻る。こちらを向くと、歩いてやって来る。

やがて目の前まで来たところで足を止め、ミストリアはサヤを見下ろした。

ウィンドウを開くわけでもなく、京極は外部音声で言う。

『無様だな』

それだけだった。ミストリアはすぐに背中を向けて、灰色の空に飛び去って行く。

サヤは、何も言わなかった。

コクピット内は静まり返って、モニターの外には、ボロボロになった中心市街地と、爆散して燃える宇宙怪獣の残骸だけがあった。

ふと、灰色の空から雫が降って来るのが見えた。雫は次第に量を増し、雨となってサヤのボディを濡らして行く。

俺はコクピットハッチを開けて、外に出た。機体を降りて、コンクリートの大地を踏む。

振り返って、外からサヤを見た。糸の切れた人形のように、サヤは動かない。

けれど、小さく光を灯すアイカメラを見て、AIが正常稼働していることを確認する。

雨脚はそれ以上強くなるわけでもなく、弱くなるわけでもなく、俺とサヤを打ち続ける。

俺は空を見上げて、今が梅雨の時期の真ただ中であつたことを思い出した。

それからサヤのコクピットに戻って、鈴音さんの通信で、ミカ



とナミが無事に回収されたことを伝えられた。両機共、AIにノイズが走り、意識は不安定であったが、物理的損傷は軽傷で済んだらしい。俺はとりあえず、ほっと胸を撫で下ろしたものの、目の前のサヤを見ていると、安心ばかりもしていられなかった。

損傷率四十八パーセントの身体よりも、彼女に関しては精神的ダメージの方が大きいだろう。

しばらくして、現場に地球防衛局の局員が到着して、俺と沙耶は第一支部に運ばれた。

沙耶は第一支部に着くと、病室に運ばれ、俺は特に怪我もなかったので、軽く検査をして、すぐに解放された。

俺は局員の人に頼んで、自宅まで車を出して貰い、家のタンスを開けて、大きなバッグに四人分の着替えを突っ込む。再び車に乗って、第一支部に戻ると、シャワールームで温水を浴びてから、私服に着替えた。

技師の先生から面会の許可が下りたので、バッグを持って、まずは奈美の病室を訪れる。

「よう、調子はどうだ」

「絶好調だ。だから、荷物だけおいて、さっさと失せる馬鹿者」  
ベッドに身体を埋めた奈美は、ノックをしたにも関わらず、病室に入って来る俺を視界に捉えるや否や、吐き捨てるようにそう言っ  
て、相も変わらず刺すような視線を送りつけて来た。しかし、今は  
むしろそれが安心する。

「分かったよ。とりあえず、一応家から着替えを持って来たから、  
ここに置いてくぞ。先生から許可が下りたら着てくれ。……あつ、  
そうそう。俺も今日は防衛局に泊まるつもりだから、何かあったら  
呼んでくれ。俺はこれから、未佳と沙耶の様子を見に行つて来る」  
ぼんぼんと大きなバッグから取り出したビニール袋を叩いて、ベ  
ッド横の棚に乗せる。

そのまま「じゃあ」と手を振り、病室から出て行こうとしたところ  
で、背中に声が掛かった。

「待て」

見ると、奈美の眉間に、不快を示す皺が寄っていた。

「貴様……何故、我を責めない」

奈美はベッドから上半身を起こし、切れ長の瞳で真面目な返答を訴えて来る。

だから俺も、嘘を付かないで、本心で答えることにした。

「俺は天才になろうとは思うが、お前の理想に合うようなパイロットになるつもりはない。だから、お前の信頼には応えられないとは限らない。俺は俺で、自分の目標がある。それは、ある人に絶対に成し遂げると誓った目標だから、何物にも代えられない」

結局のところ、自分勝手なのは俺も同じだ。そして、それは曲げられないし、曲げたくない。

全ては信頼されてない俺の責任だ。ここで独断先行した奈美を責めるのは、筋違いだと思う。

「だけど俺は今、一度お前達のパイロットになった以上、出来る限りのことはしたいと思っている。一人のスーパーロボットパイロットとして」

奈美の切れ長の瞳から目を逸らさず、俺は言った。

「だから、次はちゃんと、俺の指示を聞いてくれると嬉しい」

「……」

奈美はシーツの裾を握り締め、瞳を逸らす。

俺はそれ以上何も言わず、彼女の病室を後にした。

続いて、未佳の病室を訪れようと、廊下を歩いて行くと、自動販売機のあるフロアで、缶ジュースを片手に持った彼女に遭遇する。

「未佳」

声を掛けると、彼女は「にヤッ!？」と肩を震わせて、丸くした瞳をこちらに向ける。

突然、逃げるように走り出した。

「ちよっ……未佳!？」

意味が分からないので、とりあえず、こちらも走って追い駆ける。

「あにゃあー！」

猫みたいなき声声を上げながら、金髪癖つ毛の少女は廊下をひた走る。

「何で逃げる！」

「にゃうあー！」

「廊下を走るんじゃない！」

「ひにゃあー！」

「その鳴き声には、幾つのバリエーションがあるんだあああー！」  
「にゃにゃにゃー！」

少女の姿をしても、やはりスーパーロボットというだけあって、未佳は尋常じゃなく速い。

危うく見失いそうになり、こちらも全力疾走で追跡する。

だがしかし

「くっ……！」

俺の五十メートル走のタイムは、六秒ジャストで、かなり速いと自負しているが、それでも未佳にどんと距離を離されて行く。

ひよつとすると、未佳のハートドライブ属性である雷も関係しているのだろうか。

ハートドライブは炎、氷、雷といったものを操るだけでなく、極のミストリアが、自身の実体と作り出した幻影とを入れ替えることが可能なように、スーパーロボット自体に効力をもたらすものもある。それを『概念効力』と言うのだが……。

思考が深くへと及ぶ前に、未佳がとある病室に飛び込む。

俺はネームプレートに『ミカ』と書いてある、その病室の前に立ち、扉をノックをした。返事は勿論ない。

「入るぞ、未佳」

扉を開けると、ベッドの上で丸くなり、シーツに包まっている彼女がいた。シーツの隙間から、気まずそうな顔を覗かせている。

「ほ、ほーやん、えっと、ウチ、すぐにやられてしもうて……！」

どうやら、俺の顔を見るなり逃げたのは、怒られるのを恐れた為であつたらしい。

俺は首を横に振ってみせる。

「気にしないで、今はゆっくりと休め。着替えを持って来たから、ここに置いとくぞ」

未佳はシートで顔の下半分を隠し、俺の様子を窺いつつ、

「ウチのこと、怒らへんの……？」

ニユアンスは違うが、奈美と同じようなことを言う。

「あれは未佳のせいじゃないだろ。不意打ちだったし、宇宙怪獣の能力を計り損ねた俺の責任だ。どちらかと言つと、俺が謝らなきゃいけない。すまなかつたな、すぐに助けてやれなくて」

「そ、そんなことあらへん！」

ふるふると首を横に振る未佳。

「ただ、今までのパイロットはこういう時、優しい言葉なんて掛けてくれへんかつたから……」

「俺だつて、怒る時は怒るぞ。事実、前の時は怒つたろ。誰が見ても指摘するくらいバラバラのコンビネーションで、今までお前らは何を考えて戦つて来たんだ、つて」

「うん……けど、ほーやんはその後、呆れながらもウチらにコンビネーションを教えてくれた。今までのパイロットは、決してそんなことしてくれへんかつた。だからウチは……」

彼女は続けて何かを言うが、小さくて聞き取れない。

「未佳？」

「ううん、何でもない。気にせんといて」

今日の出撃前にも見せた、どこか思い悩むような表情。

沙耶がハートドライブに抱いていたものと同じように、未佳もまた何か思うところがあるのだろうか。

だが、俺が今聞いたとしても、未佳はおそらく教えてはくれないだろう。話してくれるまで、焦らずに待とうと思う。

「未佳、俺はこれから沙耶の様子を見に行くが、何かあつたら呼ん

でくれ。今日は防衛局に泊まるつもりだから」

「さーやんは結構損傷が酷かったって聞いたけど、大丈夫なん？」

「というより、心の方かな、問題は……。けど、沙耶のことは俺が何とかする。未佳はゆっくりと休んで、身体の傷を直してくれ。三日後には、ミストリアとの決闘だからな」

「そうやったね……」

頷く未佳を見てから、二つ三つ言葉を交わして、部屋を出る。

俺は、沙耶の病室に向けて、歩き出した。

沙耶は戦闘による機体損傷が激しかった為、他の二人とは別の、スーパードット開発部棟に病室がある。

渡り廊下を通ると、窓から外を見ることが出来る。今は午後八時。日はとつくに落ちており、空は黒のカーテンに覆われていて、街の外観は見えにくい。ガラスには無数の水滴が張り付き、見えにくさに一層の拍車を掛けていた。

やがて、『サヤ』とネームプレートに書かれた部屋の前に辿り着く。ノックをした。

返事を待つが、物音一つ聞こえて来ない。デジャヴを感じて、病室の扉を開けると、ベッドはもぬけの空になっていた。

シートが捲れているところを見るに、部屋を間違ったとかそういうわけではなく、先刻まではこの場にちゃんといたのだろう。

しかし、今日は訓練というわけではあるまい。とりあえず部屋の中にバッグを置いて、再び廊下を歩き出す。

と、角を曲がったところで、壁に寄り掛かり、煙草らしきものを啜えている白衣の女性にエンカウトした。

「やあ、弟君。無事で何より」

ニヤリとほくそ笑む姉さんがそこにいた。

これがロールプレイングゲームの中だったとしたら、間違いなく速攻で『にげる』のコマンドを選択していたことだろう。

俺は深くため息をついたが、おそらく狙ったことであろうから、尋ねる。

「沙耶がどこに行ったか知らないか？ 病室にいないんだ」

「知ってるよ」

「教えてくれ」

「いいとも。その代わり」

姉さんは白衣のポケットから煙草のケースを取り出す。そこから一本取り出して、こちらに差し出して来た。

「一本付き合わないかね？」

よく見るとそれは、一箱六十円の煙草チョコレートだった。

第一支部の正面玄関の自動ドアを潜り、外に出ると、雨は既に止んでいた。

渡り廊下を歩いていた時は、窓に付いた水滴を見て、まだ雨が降り続けているものと思っていたが、どうやらそうではなかったらしい。空を見れば、雲の切れ間から白い月が覗いている。

一旦屋内に戻って、手に持っていた傘をロビーの傘立てに置いてから、再び月明かりの下に出る。俺は姉さんが教えてくれた場所に向かった。

そこは、第一支部の敷地内にある公園。

彼女の姿はすぐに見つかった。

公園の入口から少し歩いたところにベンチがあつて、病院服を着たピンクツインテールの少女は、そこに腰掛けていた。

「沙耶」

近くに行つて名前を呼ぶと、彼女は顔を上げる。ベンチの真上にある外灯に照らされた顔には、いつもの花咲くような微笑みも、必殺技を練習していた時のような凜と輝く表情もない。

敗北と絶望に塗れた、触れたら今にも壊れてしまいそうな弱々しさ、散る花のような儚さが、今はそのまま目の前の少女だった。

「北斗くん……」

少女は俯く。

「ごめん……北斗くん……。ボク、負けちゃった……」

「俺は別に気にしてないさ。今回の負けを経験にして、次の時に勝てばいい」

「だけど、ボクは……北斗くにまだ何も返してない……！ 北斗くんから教わったことを何も活かせてない……！ 何もっ！ ボクは何一つ役に立てないっ……！」

両膝の上に置かれていた少女の拳が、ぐっと握り締められる。

「ボクはいつも辛い目に遭った時、北斗くんの言葉に助けられて来た。絶対に諦めるなって言葉を信じられたから、ここまで来れた。いつか本当に信じられるパイロットに出会って、サヤナミ力に合体して、世界一のスーパーロボットになるの諦めないでいられた。夢を諦めなかった……！」

初めて聞く、少女の本音。

「だからボクは、ボクに大切なことを教えてくれた北斗くんがパイロットになってくれた時、本当に嬉しかった。頑張って、成長した自分を見て貰おうって思った。必ず役に立ってみせようって思った……！ 必殺技だって、その為に練習した……！ だけど……」

ぼたり、と握り締めた両手の甲に雫が落ちる。

「怖かったんだ、宇宙怪獣が……！ どうしようもなく、戦うのが怖かった」

ぼたぼたと止め処なく雫が落ちて、手の甲を伝う。

「どんなに、大丈夫、怖くないって、自分に言い聞かせても、身体の震えが止まらなかった……！ 何も出来なかったんだ……！」

嗚咽を漏らしながら、目元を拭いながら、

「今まででもそうだった。戦場に立つと、必ず身体が震える。怖くて仕方がない。スーパーロボットなのに、戦うのが怖いんだ……！」

結局、どんなに頑張ったって、ボクはやっぱり」

少女は、ツインテールを振り乱し、声を絞り出す。

「出来損ないの、不良品だ……！」

ここに来る前に聞かされた姉さんの話によると、少女には昔、恩人とも言える人物が存在したらしい。

もつとも、昔といっても、一年程前のことらしいが、サヤナミカがその頃に開発されたのを考えれば、少女にとっては昔と言えるのだらう。

その恩人は、当時十六歳の高校生で、自身のことを天才と豪語する少年であったそうだ。聞くところでは、若干十四歳にしてスーパーロボットのパイロットになったのだとか。この俺を差し置いて、何ともおこがましい輩である。

少女が恩を感じた出来事を簡潔にまとめれば、パイロットにフラれて悲しみに暮れているところを励まされた、ということらしい。

姉さんは煙草チョコを齧りながら、

「おそらく、その少年は何気なく声を掛けただけで、全く覚えていないだらうけどね。少女の方は、少年の言葉を大事に胸に閉まって、今日まで笑顔で頑張つて来たってわけさ。どうだい、少しは参考になつたかい？」

と意味ありげな視線を俺に向けて来た。

だから、俺は姉さんに、こう言葉を返してやったのだ。

「姉さんは、一つ大きな勘違いをしている」

俺は目の前の少女に言う。

「お前に、とある少年の話をしてやろう」

うな垂れるピンクツインテールを見ながら、話を始めた。

「一年くらい前、ちょうど今みたいな梅雨の時期のことだ。その日は、梅雨なんて嘘のように晴れていて、とても気持ちのいい一日だった。少年はスーパーロボットパイロットで、地球防衛局まで自主練に来ていたんだが、その日の終わり、廊下でピンク色の髪をした少女とエンカウントした」

びっくり、とツインテールが反応し、少女は濡れた瞳をこちらに向



ける。

「この世に生を受けてこの方、鮮やかなピンク色の髪なんて見たことがなかった少年は、驚いて少女に注目してしまった。そして、それが運の尽きだった。あろうことか、その少女は廊下でうずくまり、泣いていたんだ」

今日は一日、気持ちのいい一日で終わらせるはずだったというのに。このまま無視をして帰ったら、後味が悪い。

少年は悩んだ末、コマンドから『にげる』ではなく、『たたかう』を選択した。

「聞けば、その少女はスーパーロボットだった。廊下で鼻水と涙を垂れ流して泣き喚く姿は、少年の知るスーパーロボット像とは似ても似つかなくて、たいそう驚いた。しかし、鮮やかなピンク色の髪の原因も、それならばしつくりと来て、納得がいった」

少女が泣いている理由は、自分が幾ら練習しても合体出来ないからパイロットにフラれてしまった、というものだった。

合体という単語を聞いて、少年は「合体ロボなのかよ!」と思わずツツコンだが、真剣に悩んでいるらしい少女を見て、「合体出来るまで、ひたすら練習したらいいじゃないか」と言った。

「少女は少年に、夢はあるのかと質問した。少年は、あると答えた。少女は更に、自分にも出来るだろうかと訊いて来た。これまた真剣な眼差しだった。適当なことは言えない。少年は考えた末、無難な言葉を一つ選択して、少女に答えたんだ」

目の前の少女と目線の高さが合うように腰を屈めて、俺は大きく見開かれた瞳と対峙した。

「絶対に、諦めるなよ」

少女は何度か言葉を発しようとして唇を動かして、失敗してから、震えた声を出す。

「北斗くん、あの時のこと覚えて」

俺は少女の頬っぺたを両手の指で摘み、引っ張った。

ぐにーん。

「ふあ！？ ひひふあひふあひふふのは！？」

何言ってるか全く分かん。

俺は頬つぺたを掴まんぞ指はそのままに、きっぱりと断っておく。

「一年前のことなんぞ、俺は知らん」

「ふえ？」

「白坂北斗とかいう同姓同名の男が一年前に何を言おうが、今の俺には関係ない。ついでに言うと、お前もそんな奴の言葉を、いつまでも胸に閉まってるんじゃないやねえ。絶対に諦めるなよ、いい言葉じゃねえか、ああ、結構だとも。けどな、お前には今、俺というパイロットがいる」

頬つぺたは引っ張っても、合わせた視線だけは逸らさない。

「戦場に立つ時は誰だって怖い。怖いに決まってる。得体の知れないう宇宙怪獣だぞ？ 天才たる俺だって怖い。だけど、俺はその怖さを乗り越えてあいつらと戦える。何で分かるか？ それは、お前達スーパーロボットが、その装甲で俺を守ってくれているからだ。

お前達が力を貸してくれるから、俺は怖くても戦える。だから、俺が今から言うことを決して忘れるな。お前が俺を守ってくれてるように、俺もお前を守ってやる。どんな逆境に陥っても、俺が頭をフル回転させて、作戦考えて、必ずお前を助けてやる。俺はお前のパイロットだ。怖いと思ったら、迷わず俺に言え。奈美と未佳だっている。お前は一人じゃない」

掴まんでいた頬つぺたを離す。

「そして、お前のパイロットである俺は、絶対に諦めるなよなんて投げっ放しなこと言わない。いいか、一回しか言わないから、よく聞け、沙耶」

上着のポケットに手をつ突っ込み、ここに来る前に、あらかじめ用意していた物を取り出す。

俺は『ミルクたっぷりカフェオーレ』と書かれた缶ジュースを、

沙耶の眼前に差し出した。

「一緒に、頑張ろう」

唐突だが、沙耶の涙腺をダムに例えよう。頬つぺたを引つ張って完全に止めたと思われた沙耶ダムの水漏れは、俺の一言によって水漏れを通り越して一気に決壊した。穴が開いた所の騒ぎではなかった。コンクリの壁が全部吹っ飛んだ。

擬音にすると、こんな感じである。

「ぶええええええええええええええええんツ！」

顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら抱き付いて来る。ラグビーを超越した猛牛の突進のごときタツクルを喰らって、死ぬかと思っただ。あばら骨が何本か逝ったんじゃないかなろうか。

何にしても、沙耶は泣いた。わんわん泣いた。

鼻を齧るくらいになるまで介抱して、それからベンチに座らせ、カフェオレを飲ませて落ち着かせる。

それから公園の水で顔を洗った沙耶に、「そろそろ病室に戻るか？」と尋ねると、彼女はようやくいつもの笑顔で「うん！」と頷いた。

外に出たばかりの時は、月を囲うように鎮座していた雲も、今はどこかに消えてしまい、開けた夜空には数多の星が瞬いている。

「ねえ、北斗くん」

正面玄関に向かう途中、沙耶がツイントールの片方を右指にくると巻き付けて弄びながら、口を開く。

「ん？ どうした、沙耶？」

「あ、あのさ……」

何やら言いにくそうに、ちらちらと横目で盗み見して来る。

沙耶はやがて、頬に朱線を走らせて、言った。

「手……繋いでもいい？」

いつもの俺なら「断固拒否する！」と断っているだろうから、余計に言いにくかったのかもしれない。

「……今日だけ貸してやる。ほれ」

俺は右手を沙耶の前に差し出す。

沙耶は、ぱあっと表情を明るくして、ガッツポーズをする。

俺の手をぐわしを握り、万歳のポーズで、月に向かって吠えた。

「北斗くんの手、獲ったとおおお　ッ！」

「前言撤回！　返せ今すぐ！」

いつも通り拒否しておくべきだった。調子に乗るとすぐこれだ、全く。

というか、握力が強くて振り解けん！

「やだ！　北斗くん、貸してくれるって言ったもん！　男に二言は無いでしょ！？」

「文章を読み返して見る！　そんな台詞はどこにも書いてない！」  
空中で腕相撲をしているかのような格好になりながら、手を引っ張り合う。

「ぜえええつたいに離さないんだからあああ！」

「馬鹿力程度で天才パイロットたる俺が諦めると思ったら、大間違いだぞ！　離さないなら料金を請求してやる！」

「いくら！」

「一秒五十円！」

「高いよ！？　ソレ、一時間で一万八千円だよ北斗くん！？」

悪戦苦闘の末、結局、俺が折れる。今日は色々なことがあり過ぎて、もう疲れた。

「やったあー！　ボクの勝ちー！」

歩きながら、繋いだ手をぶんぶんと前後に振る沙耶。

しかしまあ、沙耶が幸せそうなら、それでいいか、とも思っ。

「北斗くん」

「何だ」

そう言っつて、何気なく沙耶の顔を見ると。

「ボクね」

そこには、一年廻って春がやって来たかのような、

「北斗くんがパイロットで……本当によかった！」

満開の、笑顔の桜が咲いていた。

### 第三章 決闘までの二週間

#### 第三章 決闘までの二週間

翌日、サヤナミカの三人娘は無事に修理が完了し、家に帰れることになった。

俺的には今日くらいは練習を休んでもいいだろうと思っていたのだが、なんと沙耶、奈美、未佳の方から、練習しようと思い出て来た。

俺に断る理由はない。なので、午前中から早速、合体練習を開始することにした。場所は勿論、地球防衛局東京第一支部の演習場だ。しばらくして、ラムネ菓子の入った袋を右手、ノートパソコンと計測機器を左手に姉さんがやって来て、ハードドライブの出力計測をし始めたが、彼女はパソコン画面から俺の方に視線を移し、ニヤリとほくそ笑む。

「どうした、姉さん？」

「どうしたじゃないだろう、弟くん。君だって、実は分かっているじゃないのかい？」

「まあ、何となくは」

こうして二週間以上、合体練習を繰り返し見て来たから、データを見なくても分かる。

一昨日練習した時よりも、合体シークエンス時の動きが明らかに良くなっていた。

金属同士の衝突音がして、見上げる。本日十回目の合体失敗。だが、三機は空中で上手くブースターを使用し、体勢を持ち直して着地する。

俺は拡声器を使って、彼女達に言った。

『よし、ここで五分休憩ー！ ボディーの各部チェックして、異常があったらナノマシンで自己修復！ それでも問題あったら、すぐ

俺に言うこと！」

「うん。分かったよ、北斗くん！」

「言われずとも分かっている」

「ほーやん、了解や」

そうしてから、俺は白衣の姉に向き直り、

「姉さん、データを見せてくれ」

「あいよ。ついでにラムネ食う？」

ノートパソコンの画面と共に、小さく包装されたラムネ菓子が沢山入っている、袋の開け口をこちらに向けて来る。

姉さんに餌付けされているような気がしたので、ラムネの袋は無視する。俺は計測データを見る。

「ん、貰う」

が、すぐに気分が良くなり、やっぱりラムネを一つ頂くことにした。両端で捻つてある包装を解き、口に放り込む。サイダー味の爽やかな甘さが、口の中一杯に広がった。

「これが、怪我の巧妙つてやつかね」

姉さんが同じように舌でラムネを転がしながら、くっくと笑う。

果たして、三人娘のハートドライブ出力はそれぞれ上昇を見せ、スーパーロボット平均の五十パーセント以上を記録していた。一昨日が四十パーセント程度だったことを考えれば、驚きの成長である。宇宙怪獣にはこれまで沢山敗北してきたが、昨日の敗北は彼女達のハートドライブの感情領域に、大きな影響を与えたらしい。

特にサヤだ。ナミとミカの出力が五十パーセント代前半なのに比べ、サヤは六十パーセント代にまで上昇を見せていた。

「……って、おい。何故にこちらへスマートフォンカメラを向ける？ バカ姉」

「へ？ いやあ、弟くんが久方ぶりに笑っているからさ」

「な！？ 笑つてねえよ！」

「あつ、怒り顔になっちゃった！ やつちった！ 言うんじゃなかったあー！」

俺は自身の顔に触れ、ぐにぐにとこね回す。笑ってない。こんなことくらいで笑いはしない。

俺が笑えるとするならば、いつか目的を果たした時だけだ。そうだと。

と、その時だった。

「はーっはっはっはっはー！」

一番聞きたくなかった高らかな笑い声が、背後からした。

「うわぁ……」

マジでか。よりによって昨日の今日という、このタイミングで。

……いや、だからこそか。

俺は振り返りたくないが、振り返る。

当然ながら、薔薇の造花をくわえたオールバックヘアの男がそこに立っていた。しかも今日は、何故か紫色スーツの上着の前側を開き、無駄に格好付けていた。ウザさ全開である。

そして、今日も今日とて、無表情な紫髪メイドのミストさんも一緒。彼女はじーっと俺を見つめて来て、身体の前で手を重ね、「どうも」と丁寧にお辞儀をしてくれる。あっ、どうも。

京極霧夜はわざとらしく靴音を鳴らしながらこちらに歩いて来て、薔薇を右手に持ち、口を開いた。

「やあ、自称天才パイロットの白坂北斗くん！ おはよう！」

「……おはよう。で？ 一体、何しに来たんだお前は」

「そんなもの決まってる。君達の意味を確認しに来たのさ」

「俺達の……意思だと？」

京極が何を言いたいのか計り兼ねていると、演習場中央から「あー！」という大きな声がある。

「オールバック！ それにミストちゃん」

二者に対して正反対の反応を見せながら、ピンクのスーパーボットがドドドドドツと突撃して来る。それに気付いて、ナミとミカもやって来る。

彼女達は人間の姿になると、俺の横に並び、決闘の相手を睨み付



ける。

京極の方は、ふんと鼻を鳴らして、

「来たね、ポンコツ共」

「何いー!？」

沙耶が、がるるると噛みつかんばかりにいきり立つ。ピンクのツインテールが鬼の角みたいに逆立っている。

「これは驚いた。昨日、宇宙怪獣にあれだけ無様な負け方をしておきながら、奮起する程の根性がまだ残っていたとはね」

「うぐっ……!」

沙耶は若干、宇宙怪獣への敗北を思い出したのか、しおしおとツインテールが垂れ下がって行く。

京極はやれやれと肩を竦ませて、俺に視線を向ける。

「まあいい。僕が今日来たのは、昨日の敗北を踏まえた上での君達の意味を訊く為だよ、白坂」

「それはつまり……六月九日の模擬戦をやるかやらないかってことか？」

「その通り。君と、そのピンクツインテールは、見ていたはずだ。君達が三機掛かりで立ち向かい、手も足も出なかった宇宙怪獣を、僕がミストリア一機で瞬殺する様を！」

「……」

横を見やると、沙耶は俯き、ぐっと拳を握り締めている。

京極は続ける。

「模擬戦まで約二週間と迫った今、あんな様では僕とミストリアに勝つことはまず不可能だ。悪いことは言わない。ここで諦めるんだ。そうすればこれ以上、無駄な恥を欠かずに済む。分かっているだろう、白坂」

「……それは出来ない」

「何故だい？二ヶ月前までベテランパイロットに匹敵する戦果を上げていた、天才パイロットとしてのプライドが許さないからか？そんなもの、そのポンコツ共のパイロットになつたせいで失っ

てしまっただろうに。聞いたところによると」

彼はそこで、俺の隣……姉さんを指差した。

「どうやらその白坂博士に、パイロット権の剥奪を盾にして、脅迫されてるそうじゃないか」

俺は驚いて、彼の顔を見る。

「何故そのことをお前が……！」

「なに、我が京極コンツェルンの権力つてやつを使って、調べさせて貰ったんだよ。僕の方が実力は上だと自負しているが、白坂も一応、僕と同じ最年少でスーパーロボットパイロットになった男だからね。そんな君が、宇宙怪獣を一体たりとも倒せないようなどうしようもないポンコツに、理由も無く乗り続けるはずがない」

姉さんは「参ったな……」と後ろ頭を掻く。

片手の薔薇を揺らしながら、京極は笑みを浮かべる。

「そうだ。一つ、君にとって良い提案をしようじゃないか。もし君が模擬戦の不戦敗を認めるなら、白坂博士が持っている契約書を無かったことにしてやってもいい」

「なっ！？ そんなこと……！」

「出来るさ。京極コンツェルンの権力を舐めてはいけない。たかだかパイロットの進退なんて、やろうと思えばどうにでもなる。このままつまらない模擬戦を行うくらいなら、多少金を使ってでも、不戦勝を手に入れた方がマシだと、僕は考える」

「……凄く魅力的な相談だな、それは」

俺がそう口にする、沙耶が瞳を大きくして、こちらを見る。

未佳は暗い表情になって肩を落とし、奈美は眉間に皺を寄せる。

「だろう？ ちなみに僕には、騙す気なんて毛頭ない。こんな分かりやすい嘘を付く程、僕は馬鹿じゃないからね。何なら、ここで新しい契約書を作って、サインをしても構わないよ」

そう、俺にとって、この交渉はメリットしかない。二ヶ月前ならともかく、サヤナミカのパイロットになり、幾度も敗北を味わって来た今は、負けの一つや二つ増えたところで、大して何も変わりや

しない。それでサヤナミカとおさらばし、新たなスーパーロボットに乗り換えることが出来るなら、万々歳だ。

俺は京極の目を見て、言った。

「断固拒否する！」

「何!？」

「はつきり言つて、死ぬほど魅力的な提案だ。こいつらみたいな変なスーパーロボットを任されて、正直参つてたからな。嬉し過ぎて涙が出そうなくらいだ。でもな！」

泣きそうになっている沙耶の頭に手を置き、くしゃくしゃに撫で回しながら、

「俺はやり切つてもいねえ内から諦めんのは、大つつ嫌いなんだよッ!」

どれだけ負けようが、傷付こうが、変わることはない、自身の誇りを口にする。

「お前の提案を受けることはつまり、自分はサヤナミカを合体させられない、勝たせられないって認めるということだろ？ あり得ないな！ 何故なら俺は、天才スーパーロボットパイロット！ 一度役目を引き受けた以上、サヤナミカは俺が意地でも合体させて見せる！ 模擬戦にだつて勝つ！」

京極が顔を怒りで歪める。

「白坂、君は……!」

「悪いが、そういうわけだ、京極。俺達の意味は変わらない。模擬戦は予定通り、二週間後に行う！ そうだろ、沙耶、奈美、未佳！」  
俺は自分の機体である、三人の少女を見やる。

奈美は腕組みポーズのため息を吐き、

「愚問だな。我は、白坂博士が開発した至高のスーパーロボット。恐れることなど何も無い」

未佳は笑顔を取り戻して、頷く。

「やっぱり、ほーやんはほーやんや……! ウチのパイロット様がそう言うなら、全力でやるしかないやろ!」

そして、沙耶は目元を拭い、

「うん！ 負けない！ 北斗くんと一緒に、絶対勝つ！」

力強い表情を京極に向けた。

彼はギリッと歯噛みをして、

「つくづく理解出来ない……！」

と洩らしたが、その後深呼吸をし、薔薇の造花を左手で弄びながら、ふつと鼻で笑う。

「しかしまあ、どちらにせよ僕の勝利は揺るがない。模擬戦をやるのがやるまいが、同じことだよ。先程、君達の合体練習も、少しばかり拝見させて貰ったしね」

「それで？ 何か分かったのか、京極」

俺は落ち着いて、探りを入れてみる。

京極も俺と同じく、最年少となる十四歳でスーパーロボットパイロットになった男だ。サヤナミカのことを幾ら馬鹿にしても、舐めて掛かるようなこと、手を抜くようなことは一切しない。そういう隙のない男であることは、俺が一番よく知っている。

「せっかくだから教えてあげるよ。僕は勝利を確実にする為に、自分の持つ力をフル活用して、二週間前から白坂達の偵察を行っていたんだ」

京極コンツェルンの御曹司としての権力で、人を使ったということだろう。

彼は右手の人差し指と中指を立てて、俺に見せつけて来た。

「そうして得た情報と、今日実際に自分の目で見たものを総合し、分かったことが二つある」

「一つ？」

「一つは、このまま行けば模擬戦で、サヤナミカが合体して来ることは、まずあり得ないということ」

「ほう、断言するか」

しかし正直、かなり難しそうだろ。何の根拠があるわけでも無いが、おそらく全機のハートドライブ出力を、最低でも並のスーパー

ロボット平均に達しなければ、合体は成功しない気がする。

京極は首を横に振り、

「違うね。そうじゃないよ、白坂。僕が言いたいのは、今まで成功したことはない合体を、模擬戦の切り札に持って来るかどうかって話さ」

俺は、はつとなる。

何も言えないでいると、京極は俺の心を見透かしたように笑って、「まあ、自称天才パイロットたる白坂北斗くんは、そんな一か八かの賭けを主軸には持って来ないだろうね。冷静に考えて、二段構えの作戦として、別の主軸があると考えるのが当然。そして、分かったことの二つ目だ」

沙耶を横目で見つつ、言った。

「今日の合体練習時の動き、態度、それと事前に入手していた情報、河原での技の練習。それらから考えられるのは、そのピンクツイテールが、模擬戦での勝ち筋を担っている可能性が高いってことだ。おそらく、今回の決闘で白坂が乗り込む機体のは、彼女だろう？」

「……」

「だとすれば、ミストを破る為の策というのが、練習している技と考えるべきだろう。例えば、一点突破の必殺技とかね。ああ、そうだ、言っておくけど、カウンターを当てるなんて甘いことは考えない方がいい。自身のスーパーロボットの弱点くらい、把握しているつもりだよ」

こめかみを嫌な汗が伝う。

京極には、作戦の全てを見切られていた。

「まあ、合体もロクに出来ないスーパーロボットごときに僕が負けることはあり得ないが、模擬戦は、全力で行かせてもらうとするよ。獅子は兎を狩るにも全力を尽くす。そして僕は、兎に噛み付かれるような真似はしない」

彼の瞳が真剣なものに変化する。熱くも、冷静な、覇気すらも纏

つた視線。

俺は直感的に悟る。

……このままじゃ、サヤナミカは負ける。

「じゃあ、僕はそろそろ失礼するよ、白坂。お願いだから、模擬戦ではせいぜい楽しませてくれ」

そうして紫色のスーツを着たオールバックは、再び薔薇の造花を啜えると、「……失礼します」とお辞儀する無表情なメイドを連れて、演習場を去って行く。

沙耶が、思い詰めた瞳で、服の袖を引っ張って来る。

「北斗くん、ボク……」

「心配するな。明日が試合ってわけじゃないんだ」

もう一度、わしわしとピンク髪を撫でてやる。

「やってやるさ」

何か、京極が予想も出来ないような、新たな策を思い付く必要がある。

「んー」  
沙耶にああ言ったものの、そんなすぐには良い策が思い付かない。

白坂家の暗い自室で、デスクの明かりだけを点け、ボールペン片手にメモ帳と格闘するが、何度ペンを走らせても、結局は丸めた紙屑に変わってしまう。

先程考えたのは、奈美のハードドライブ属性である氷を最大限に活用した策で、決闘開始と同時に、奈美にアイスブリザードを使用させ、演習場の地面をスケートリングのように凍らせるというもの。大型のスーパーロボット・ミストリアの重量ならば、幾ら分身しようとも、実体が存在する場所の氷が重さに堪え切れず、砕けて足跡が残るはず……のだが、分身が十体、加えて高速で実体交換されようものなら、俺でも見切れる自信がない。むしろ、足跡が残ると

いうことを京極に利用される可能性もある。

「あー、駄目だ、思い付かん！」

もっとシンプルで、相手に利用されず、どちらに転んでも良い作戦を考案しなくてはならない。以前のように俺一人で戦うなら、多  
少難しい作戦でも、技量さえあれば何とかなるだろうが、今回は三  
人娘と共に、四人で戦うのだ。

多少融通の利く策でなければ、見切られた際に、一つの小さな穴  
からダムが決壊するかのごとく、あつという間にコンビネーション  
を崩されて、敗北してしまうだろう。

だが、融通の利く策と言っても、こちらの切るカードの枚数が、  
余りにも少な過ぎる。

最も強力なカードであるところの沙耶は、既に京極に見切られて  
いる。実質、手札は全てオープンされたと言っても、過言ではない。  
手首のSRコマンドーを見ると、午前の二時を回っている。

「今日はこんなところか……」

二週間はあつという間だ。なるべく早く考えなければ、準備が間  
に合わなくなる。しかし、早朝のラブファイヤーパンチの練習を怠  
るわけにはいかない。完全に見切られているとはいえ、ミストリア  
に対して最も有効な正攻法であるカウンター技なのだ。これがなけ  
れば勝負にならない。

俺はボールペンのキャップを閉め、携帯のアラームを午前五時に  
セットしてから、デスクの明かりのスイッチを切り、ベッドに横に  
なる。

毛布を被って、意識を沈めて行く。

ふと、部屋の扉が開けられるのが、音で分かった。

誰かが、そつと室内に忍び込んで来る。ゆっくりと俺の寝ている  
ベッドの方に近付いて来る。

「……誰だ？」

「……」

返事はなかった。ただ、闇におぼろげに浮かぶシルエットと、霧

困気で、理解する。

「未佳か？」

「……にゃあ」

聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で鳴いて、未佳は俺の足元の方から、もそもそとベッドに潜り込み、俺の背中 窓側の方に顔を出す。

彼女は俺の背中に身を寄せて、抱き付いて来る。

「ちよっ……未佳、さてはお前、寝惚けて……！」

「違うんや」

腹部に回された手に、ぎゅっと力が込められる。

「え？」

「ウチは、自分の意思でここに来たんや。……ほーやんの側で眠りたくて」

そこで俺は気付く。

「未佳、お前……震えてるのか？」

「……」

彼女は答えない。けれど確かに、ふるふると微かな震えを背中に感じる。

静かな暗闇の中、金髪癖っ毛少女の小さな声だけが、俺の耳に届く。

「ウチな……ちよっと今日、不安になったんや」

「不安？」

「うん……」

俺は未佳の手の甲に触れる。どうして、彼女はこんなにも震えているのだろうか。何かを怖がっているかのようだ。

「何なら、聞いてやってもいいぞ」

「……あのな、ウチ……ほーやんと一緒に暮らすようになってから、よっ同じ夢を見るんや」

「夢？」

「そう、夢。その夢はな、最初は夢なのかどうかすらも分からへん。



目覚めると、朝で、いつもと同じ自分の部屋なんや。ウチはベッドから起きて、一階のリビングに降りる。だけど」

金髪癖っ毛の少女は言う。

「いつもなら、エプロンを付けて、朝食を作っているはずのほーやんが、何処にもいない」

彼女曰く、その夢の中は、俺が存在しない世界なのだそうだ。場所は白坂家。しかし、いつもならば洗濯物を干しているはずのベランダ、寝起きして、学校の宿題に勤しんで、趣味のライトノベルを読み耽っている私室、何処を探しても、俺の姿はない。

「だから、ウチはさーやんとなーやんを起こして訊くんや。ほーやんは何処にいるんや、って。けどな、二人共、ウチが幾ら真剣に尋ねても、首を傾げるん。ほーやんって誰？ って真顔で答えるんや。ウチはそこで、ようやくこれが夢の世界なんだって気付く。ウチはその度に、ごつつう怖くなるんや。もしもこの夢から覚めた時、本当にほーやんがいなかったらどないしよう、本当はこれが現実で、ほーやんがウチらの傍にいてくれる世界の方が夢だったら、どないしようって……」

「……だから、不安になったのか？」

「合体練習の時、京極霧夜が来て、ほーやんに、博士と交わした契約書の内容を白紙に戻してやるって言うたやろ？」

「ああ」

「で、そんな時ほーやん、それは魅力的な提案だって答えたやんか。あん時ウチな、一瞬だけ、ほーやんがウチらを捨てて、どこかに行ってしまうやないかって思ってしまったんや……」

「行かねえよ。言ったろ。俺はお前らをサヤナミカに合体させる。離れて行くとしたら、その後だ」

「でも……ウチはやっぱり怖い……。心のどこかで、ほーやんを疑ってる……」

不安げな声を出す未佳。

なので、俺はため息混じりに言ってやる。

「そうか、残念だったな」

「ほ、ほーやん？」

「お前が信じられなかるうが、何だろうが、これは紛れもない現実だ。今更お前がどんな夢を見ようとも、俺がお前らを合体させるという意思に何の関係もない。俺はお前の目の前にいる。俺は約束とか、契約とか、一度決めたことには、とことん執着するタイプなんぞでな。だから、意地でも消えてやらねえよ」

「そっか……そうやね……」

俺の背中に、こつんと未佳の頭が当たる。

「ほーやんは少なくとも、サヤナミカへの合体が成功するまでは、ウチらの側に居てくれる。せやから、ウチも、ほーやんを信じなきゃあかん。ウチだけ逃げてるわけにはいかないんや。今よりもっと強くならへんと……。その為に、今日だけでええ。ほーやん、もう一度だけ、こうして側で眠らせてくれへんか……？ 朝になって、ほーやんが隣に居てくれたなら、ウチはきつと大丈夫やから……」

「それで未佳の感情領域が安定して、ハートドライブ出力が上昇するなら、安いもんだ。俺の背中くらい、幾らでも貸してやるよ。別に減るもんでもないしな。不安になったら、目を開けてみればいい。俺は天才的に寝相がいいから、朝まで微動だにせず、ここにいるぞ。仮に、宇宙人にキヤトルミューティレーションされようとも、UFOを撃墜して、すぐここに戻って来る。だから、心配せずに寝ろ」

「うん」

安心したのか、それとも眠くなったのか、未佳はそれ以上何も言わない。

くっ付いた背中が、ぼかぼかとホツカイロのように温かい。そのせいか、次第に俺の臉も降りて来る。

途切れ気味になる思考で、俺は何気なく思ったことを訊いてみる。

「なあ、未佳……」

「にゃあ……？」

「模擬戦、勝ちたいか……？」

「勝ちたい……ほーやんと一緒に……」

「そうか……」

未佳の奴、温つけえな……。本当……。猫みたいだ……。俺の意識は、心地良いまどろみの中に沈んでいった。

「北斗くん」

誰かが俺の名前を呼んでいた。

「北斗くん。北斗くんつてば」

身体が揺すられている。

「北斗くん！ 起きないと、ちゅーしちゃうよ！」

……うるさいな、少し静かにしてくれ。俺はまだ眠い。

「いや、待てよ、これはひよっとしてチャンスつてやつじゃ……？」

今ならば、北斗くんに、ちゅーをし放題……！ うわっ、何かボク、猛烈に興奮して来た！」

何だろう、思考は回らないのに、起きなければ危険だと、身体が訴えている気がする。

「で、では、せっかくだし、一回目はマウス・トウー・マウスで……！」

マウス？ ネズミ？ いや、唇か？ トウーって、何て意味だっ

け……？

「ちゅー」

「真剣白刃取りッ！」

ぱちいんっ！

「ひでぶっ！？」

身体が反射的に俺の両手を動かし、迫り来る何かを挟んで受け止めた。十四歳でスーパーロボットパイロットになるまでに、様々な武道を習得した結果得た防衛能力が、無意識の内に発動したらしい。それにしても、両手が挟んだ物は、やたらと張りがあって、柔ら

かい。ぷにぷにしている。何だろうか、これは？ 受け止めた時に、爽快な音と、昔の少年漫画に出て来るような悲鳴が聞こえたが……。「ん……」

未だ漂う眠気で重い、瞼を開く。

目の前に、潰れた饅頭みたいになっているピンクツインテール少女の顔があった。

俺は彼女に問う。

「お前……何してんだ……？」

「……いえ、何も」

両手で挟んでいた物は、沙耶の頬つぺただった。試しに押ししたり引っ張ったりしてみる。ぐにーん。

「沙耶……ふと思っただが……」

「はひ？」

「お前……凄く（肌が）綺麗なんだな」

「ふあああああああつー！」

沙耶の顔がみるみる赤くなって、ぼんっ！ と頭のとっぺんから湯気を噴出した。

「熱っ！？」

同時に、引っ張っていた頬つぺたが、熱した金属のごとく高温になって、思わず両手を離す。いや、金属で合ってるのか。沙耶の身体は、圧縮ナノマシンで出来てるわけだし。あるいは、彼女のハーフトドライブ属性が炎だからかもしれない。

いずれにしても、今の熱さで完全に目が覚めた。

自室のベッドの上で仰向けに寝ていた身体を起こし、室内を見渡す。ベッドの脇には、何故か顔を赤くしている沙耶が立っている。

「……って、沙耶！？ 何でお前、俺の部屋にいるんだ！？」

「おおお起こしに来たんだよ！」

「は？」

枕元に置いてある携帯電話を取って、開く。時刻は朝の四時三十七分。寝る前にセットしておいたアラームが鳴るのは、午前五時で

あるから

「なんだ、まだ二十分早いぞ？　一瞬、寝過ごしたかと思ったじゃないか」

沙耶は口先を尖らせる。

「うー！　いいじゃん少しくらい！　昨日、オールバックにあんなこと言われたから、ボク的には不安なの！　もっと練習したい気分なの！」

赤色のジャージ姿である沙耶は、ぶんぶんと両腕を振り回して来る。

「ちよつ、危ないから止める！　お前の拳は生身の俺にとっては凶器なんだつて、凶器！　つーか、さつきからお前、やたらと顔が赤くないか？」

「そ、それは……北斗くんがさつき、変なことを言うから……！」

「ん？　俺、何か言ったっけ？」

「言ったよ！　僕の頬つぺたを触って！　ひよつとして……覚えてないの？」

「あー、すまん。沙耶の頬つぺたが異常に熱かったのは記憶にあるんだが、起きてすぐだったせいかな、それより前に何を言ったかまでは」

「ほ……北斗くんのバカアアツ！」

彼女は、両腕どころか、全身を凶器に変えて暴れ始める。

もそもそと俺の隣　ベッドの窓側の方で、毛布を被った何かが動いた。声を上げる。

「にゃー……」

猫のような声だった。

「え？」

目を丸くする沙耶。

「あ」

俺は背中から冷汗が溢れ出すのを感じる。そうだ、この部屋には、もう一人いたんだつた。

沙耶は頬の筋肉を引き攣らせる。

「ま、まさか……！」

彼女はベッドの毛布を掴み、勢いよく剥ぎ取る。

金髪癖っ毛の少女が、俺の寝巻きの裾を掴み、隣で眠っていた。

……何だろう、天才パイロットたる俺でも、さすがに予知能力は所持していないが、この先のオチが読める。

ベッドの脇から、部屋ごと燃やし尽くさんばかりの、渦巻く熱気を感じる。

恐る恐る沙耶の方に視線を向けると、ピンクツインテールがゆらゆらと赤のオーラを帯び、浮き上がっていた。こめかみには青筋が立って、瞳には紅蓮の輝きが灯っている。

「北斗くん、これはどういうことかな？ 懇切丁寧に説明して貰えと、ボクとしては凄く有難いんだけど。というか、説明すべきだよね」

怒った時の鈴音さん並に恐怖を感じた。むしろ、ハードドライブにより、怒りが炎となって具現化してる分、身の危険も合わせ、リアルな恐怖を肌に感じる。

「お、落ち着け、沙耶。これには、マリアナ海溝のチャレンジャー海淵よりも深い理由があっただな……」

「どんな理由があると、未佳ちゃんが北斗くんの部屋で寝てることになるのかな？」

「えーっと……」

未佳の寝顔を見やる。完全に安心し切っている表情だった。

どうやら、俺の居ない夢世界には、迷い込まずに済んだようだ。

俺は沙耶に視線を戻す。

「あー、すまん、沙耶。やっぱり、理由は話せない」

「つ……！ へえ、そうなんだ。だったら、二人まとめて……！」

彼女は怒りで顔を真っ赤に染め上げ、両手を頭上に掲げて、巨大な火球を作り出す。

……これは俺、死んだかもしれない。

火球を片手に移し、ピンクツインテールの少女は振り被る。俺は覚悟して、瞳を閉じる。

部屋が一つ、跡形もなく消し飛……ばなかった。

「あれ？」

それどころか、火球が飛んで来ることもない。

瞳を開けて、沙耶を見る。

彼女は、火球を振り被ったまま、怒りを堪えるように自らの頬を膨らませていた。

「むううう……！」

「沙耶……？」

顔は真つ赤なままだったが、ピンクツインテールの少女は手の平から火球を消失させ、ゆっくりと腕を下ろす。

「本当なら、部屋ごと吹き飛ばしてやりたいところだけど……！」

北斗くんが話さないのには、ちゃんと理由があるんだろうし……！」  
拳を握り締めながら、悔しげに口から言葉を絞り出す沙耶。

「万が一、北斗くんが腕を怪我して、ボクの操縦を出来なくなったら困るし……！」

寝る前に、未佳も模擬戦に勝ちたいと言っていたのを思い出す。

それと同じように、沙耶もまた、今回の戦いに強い思い入れがあるのだ。

「沙耶」

「何さ？」

不満そうなジト目をこちらに向ける彼女に、俺は言う。

「後で、俺を煮るなり焼くなり、好きにして構わない」

「え？」

沙耶は大きな瞳をぱちくりさせていたが、やがて、「うん！」と力強く頷き、

「じゃあ、煮る！」

高らかに宣言した。焼くのより怖え！

それはともかくとして、俺は未だ隣で寝息を立てている、金髪癖

っ毛の少女の肩を揺する。

「んん……」

彼女は緩慢な動きで、上半身を起き上がらせる。

「何や、もう朝なん……?」

寝癖でライオンのたてがみと化した頭を掻きながら、糸目を擦った。

「未佳」

俺が呼ぶと、はっと彼女は瞳を開いて、顔をゆっくりとこちらに向ける。

視線が合ったところで、俺は軽く右手を挙げ、挨拶した。

「おはようさん」

未佳は瞬きもせず、しばらく俺を見つめていたが、おもむろに口を開く。

「居て……くれた……?」

「当たり前だ。そう簡単に消えてたまるかよ」

「本当に、居てくれた……!」

「ぐっすり眠れたか?」

「ほーやん!」

金髪癖っ毛の少女が抱き付き、胸にぐりぐりとおでこを押し付けて来る。

ベッド脇の沙耶は、頬を膨らませる。

「むー」

未佳がそれに気付いて、顔を上げる。

「あれ、さーやん? どうしてここに?」

「それはこっちの台詞だよ!」

俺は、抱き付いているライオン頭の少女に尋ねる。

「未佳、それで、調子はどうだ? 今日も練習、頑張れそうか?」

彼女は、にかっ的微笑んで、

「もう大丈夫や。今なら、どこまでも走って行けそうな気分やで!」

「走る……」



寝惚けているからか、どうでも良さそうなのその言葉に、俺はカメレオン型の消える宇宙怪獣に負けた日、地球防衛局の廊下で、未佳と追走劇を繰り広げたことを思い出す。

「そつだ……！」

思わず、ぱつと立ち上がる。

サヤナミカにはまだ、切れるカードがあるかもしれない。それを活かすにはどうすればいい？

俺はベッドから飛び降りて、デスクの所に行き、メモ帳を開き、考えたことをとにかくひたすら文字に変えて行く。

「ほ、北斗くん、どーしたの？」

「ほーやん？」

「沙耶、俺はお前に土下座しなくちゃならないかもしれない」

「え？」

「ただ、俺はやるなら、勝ちたいって思う。模擬戦だろうが何だろうが、勝って、俺は胸張って叫びたい。俺は天才なんだ！ って。

沙耶、お前は……」

彼女に向き直って、問う。

「どこまで勝ちたい？」

ピンク髪ツインテールの少女は、ぱちぱちと瞬きをして、それから俯いて、考えて、俺の目を真っ直ぐに見て。

「北斗くんと一緒なら、どこまでも……」

「そっか」

だったら俺は、全力で勝ちを取りに行くことにしよう。

次の日、いつものように放課後、演習場で合体練習をし、家に帰宅して夕飯を済ませた後で、俺は三人娘を自室へ呼び集めた。

部屋の中央で、四人で向かい合うように座ると、

「集まってくれて、ひよっとして模擬戦の作戦会議？」

沙耶が首を傾げて、ピンクツインテールを揺らす。

俺は頷いてみせる。

「そうだ。知つての通り昨日、京極に俺達の作戦が筒抜けだったことが発覚した。そこで、対応策として作戦を大きく方針転換することにした」

奈美が、ふむと頷く。

「まあ、そうなるだろうな。しかし、京極霧夜は確か、人を使つて我々の偵察をしていると言っていた。このままだと、新しい作戦も知られてしまうのではないか？」

「いや、大丈夫だ。少なくとも、この部屋での作戦会議は、外には洩れないはずだ」

「何故そう言い切れる」

「盗聴器がないか、事前にチェックしておいた。この部屋には一個も仕掛けられていない」

「……」

三人は目を丸くしたり、あんぐりと口を開けたり、呆れたような表情を浮かべたりしている。

未佳が「にはは……」と苦笑いをした。

「ほーやんつて時々、謎の超人っぷりを発揮するなあ」

「天才たるもの、これくらいの心得はないとな」

沙耶がキラキラと瞳を輝かせて、

「北斗くん、素敵……！」

「えー」

奈美はそんな彼女にどん引き。

おい、何だその反応。

「……とにかく、これから新しい作戦について話す。京極にバレないようにする為に、作戦会議はこの一度だけ。それ以降は、作戦については最低限のことしか話さないから、そのつもりで」

そうして、俺は彼女達に、昨夜思い付いた策を伝えた。

沙耶は最終的に納得して、頷いてくれたが、未佳は半信半疑な様

子。

「貴様、本当にその作戦で行く気なのか……?」

奈美が複雑そうな表情を浮かべて言う。

「ああ。お前達の能力を考慮した上で、これが一番の策だと、俺は考える。奈美には、一番嫌な役回りを押し付けることになってしま  
うが……」

「くっ……!」

眉間に皺を寄せ、視線を逸らすライトブルーポニーテールの少女。  
「ただ、これだけは何度でも言う。この作戦は、誰が欠けても駄目  
だ。三機だからこそ、京極の隙を突くことが出来る」

俺は奈美を見た。提示した作戦上での奈美の役目は、プライドの  
高い彼女には、酷く向かないものだ。

しかし、彼女が納得してくれなければ、この作戦は成り立たない。

「奈美」

彼女はしばらく、考えるように俯いていたが、

「……いいだろう」

そう言っつて、切れ長の瞳が、俺を映し出す。彼女が何を思ったの  
か、そこから伺い知ることは出来ない。

けれど今は。

「分かった。なら俺は、お前を信じることにする」

「……」

彼女は何も言葉を返さなかった。

それから、奈美と未佳には、放課後の合体練習だけでなく、個別  
の練習メニューを追加することになった。

奈美は早朝と夜に、俺が指導役として側に付き、沙耶と同じ拳一  
点集中の必殺技を練習。

未佳は、とにかく暇があったら走らせた。全力疾走で、ひたすら

に長い距離を。

沙耶は、今まで通りラブファイヤーパンチの反復練習。正攻法のカウンター技として、とにかく完成度を高めて貰う必要があった。ただし、俺は奈美の練習を見なくてはならない為、未佳も沙耶も自主練習でやって貰っていた。

当然、二人とは顔を合わす時間が減るので、

「寂しいよ〜、北斗く〜ん。特に唇が」

と沙耶が自主練を終えた後に、口先を尖らせて、迫って来たりする。彼女にはチョップを喰らわしてやり、

「にやー、ほーやん。ウチの髪、とかしてくれへん？」

未佳は櫛を片手にやって来たりするので、仕方なくその金髪癖っ毛を梳いてやつたりした。

沙耶がガビーンと目を丸くする。

「ちよっ、何この扱いの差!？」

「お前のスキンシップは、セクハラっぽいんだよ」

「じゃあじゃあ、ボクも! ボクの髪も梳いて!」

「えー、ぶっちゃんけ面倒くさい」

「イジワル! イジワルだよ北斗くん!」

「はいはい、分かったよ。こっち来い」

俺はため息を吐きながら、手招きする。

「えへへー」

嬉しそうに寄って来て、背中を見せて座る沙耶。俺はツインテールのリボンを解いて、ピンクの髪を手入れして行く。鮮やかな色をしつつも、柔らかかな、触り心地の良い髪。仄かに甘い香りがした。と、そこで奈美が、こちらを見ていることに気付く。そんな彼女は珍しいので、俺は声を掛けてみる。

「奈美、お前の髪も梳いてやるうか？」

「なっ……! 誰が貴様なんぞに触らせるか! いらん!」

ぷいっとそっぽを向かれる。

「まあ、そうなるよな」

分かりきっていたことだ。しかし、だとすれば、彼女はこうしてこちらを見ていたのだろうか？

サヤナミカへの合体練習は、作戦の方針転換を図った後も続いていた。

その理由は、大きく分けて三つ。

一つは、これまで合体練習を繰り返して来たことで、少しずつだが三人のコンビネーションが良くなりつつあったからだ。始めた当初に比べれば、極端なミスも無くなり、三人の意志疎通がちゃんと出来るようになっていた。機体同士のコンビネーションは、戦闘では大いに役に立つので、身に付けて置いて、損は無い。

二つ目は、少しずつだが、三人娘のハートドライブ出力が上昇を続けているから。日々の練習で、彼女達の心　ハートドライブの感情領域は、間違いなく成長を見せている。言わば、彼女達にとつて、合体練習は基礎トレーニングのようなものだった。

そして三つ目は、これが最も大きな理由で、諦めない気概を持ち続ける為だ。現状を見るに、模擬戦までに合体が上手く確率は限りなく低い。しかし、諦めず当日まで練習を続ければ、決してゼロではない。それは、俺達が今回の模擬戦で心掛けるべき姿勢に通ずるものがある。

諦めない限り、勝利の確率は決してゼロにはならない。どんなに実力の差があっても、諦めず戦い続けた先に、勝機が見えることがある。そうして、過去最強と言われた宇宙怪獣を倒した男を、俺は一人知っている。

だから俺は、合体練習には一切手を抜かないと決めていた。

模擬戦まで残り一週間となった今日も、拡声器で叫ぶ。

『三機共、高度が上がり過ぎてるぞ！　練習に熱が入るのはいいが、合体シークエンスは冷静に、丁寧によれ！　ちゃんとシークエンス

プログラムとデータを照合しろ！ サヤ、動きが雑になってる！  
そんなにジョイントが上手く行くと思うな！ ミカは逆！ サヤ  
とナミに合わせようとし過ぎだ！ お前は定位置に着いたら、ブレ  
ずにキープ！ それからナミ！ お前はもつと、臨機応変に対処し  
る！ 何の為にシークエンス中に誤差修正フェイズがあると思っ  
てる！」

サヤとミカの二人は時折、ひーとか、にゃーとか喚きながらも、  
投げ出したりすることなく付いて来ている。

一方のナミはどうなのかと言うと、

「了解した！ 次行くぞ、二人共！」

文句の一つもこぼさなかった。新しい作戦を伝えた日から、ずっ  
とこんな調子だ。

相変わらず、不機嫌そうに眉間に皺を寄せている。けれど同時に、  
真剣な表情で、俺のダメ出しをちゃんと聞き入れてもいる。

正直、俺には彼女の考えが読めなかった。新しい作戦で与えた役  
目が役目だけに、なおさら。

ナミは本当のところ、どう思っているのだろう。不満を心の奥底  
に押し込めているのだろうか。だとすれば、良くないことだ。

しかし、どうしたって、彼女には役目をやって貰わなくてはなら  
ない。京極の裏をかく為には、彼女の協力が必要不可欠なのだ。

結局俺は、どうするべきかと迷いつつも、その答えを見つけられ  
ないまま、練習の日々を過ごしていった。

しかし、模擬戦まで残り三日と迫った木曜日のこと。

放課後の合体練習を終え、奈美と共に白坂家近くの河原へ行き、  
作戦の中で彼女に課した、沙耶と同じ拳一点集中の必殺技練習も終  
える。

その後で、

「おい」

家へと帰る道中、俺の前を歩いていた彼女が突然振り返り、口を開いた。

俺はびっくりして、思わず自身の背後を見やる。が、誰もいない。

「どこを見ている。話し掛けている相手は貴様だ、ヘボパイロット」

「マジで!？」

「実に意外そうな反応だな」

「いや、何と言うか……うん……」

練習以外での奈美は、俺に対してほとんど喋らなかつた。これまでも仲が良いとは言えなかつたし、加えて、作戦のことは極力話さないようにと伝えていたから、彼女とはこうやって河原と自宅を歩き来する時、一定の距離を開けて、お互い無言を貫き通すことが普通になっていた。

だからこそ、彼女の方から話し掛けて来て、驚いたのだ。

「それで、どうした奈美？ お前から話し掛けて来たってことは、何か重要な用件なのか？」

「まあ、一応そうなるか。外では話し難いことだから、深夜にお前の部屋に行つて話す。それまで寝るんじゃないぞ」

「深夜？ この後帰つてすぐじゃ駄目なのか？」

「駄目だ。沙耶と未佳に知られるわけにはいかん」

何故彼女達にまで隠すのか、少し気になったが、俺は頷く。

「……まあ、そういうことなら、分かつた」

そんな経緯があつて、深夜の一時頃。一応、高校生という身分もあるのです、ここ一週間くらいの授業内容の要点を見直していると、トントンと扉をノックする音がした。

「奈美か？」

「ああ」

「入つても大丈夫だぞ」

俺は教科書を閉じて、部屋に入つて来るライトブルーポニーテ

ルの少女と向き直る。彼女はいつもの寝巻き　浴衣姿で近くまで来ると、床に正座をし、膝に両手を置いて、こちらを見上げる。

点けている電灯は、デスクの蛍光灯のみであり、暗闇の中で照らされた彼女は、どこか神秘的な美しさを感じさせる。俺が「部屋の明かり、点けるか？」と尋ねると、「別にこのままで構わん」と首を横に振る。

「それで、奈美。話っているのは？」

「うむ。模擬戦に関することだ」

「だろうな」

わざわざ俺の部屋で話すのは、盗聴器を警戒してのこと。ならば、当然作戦の内容についてだろうと俺は思っていたのだが……。

「いや、作戦については、特に何も。模擬戦に関する事で間違いないが、作戦とは別のことだ」

「沙耶と未佳に聞かれると、まずいのか？」

「いや、別段支障があるわけではない。しかし、個人的に、あの二人には見せたくなかった」

「見せたくなかった？」

「一体、何をだろうか。そう思っていると、彼女は片手を持ち上げて、開いたり閉じたりしてみせる。

「貴様も知つての通り、我は、一点集中の必殺技練習が上手く行っていないだろう？」

「……そうだな」

沙耶と同じ、拳にエネルギーを集中させる必殺攻撃。それと同じ練習を奈美にやらせているのだが、彼女はどうにも上手くコントロールが出来ていなかった。

「我にはそれが納得出来なくてな。だから、時間さえあれば、学校や家でも、手にエネルギーを集中させる練習をしていたのだ。こんな風に」

奈美の持ち上げた片手が薄っすらと青白い光を帯びて行く。しかし、河原での練習と同じように、何故か冷気が発生しない。青白く



光るだけだ。

「何故他に出来て、我には出来ないのか。ハートドライブ属性が違うからか。色々考えて、色々試してみた。そしたら数日前、ある結論に辿り着いた」

手の平を輝かせたまま、奈美は立ち上がると、俺の目の前にやって来る。

「奈美？」

「へボパイロット、よく聞け。貴様、今すぐエネルギーを集中させたこの右手を握れ」

「凍って死んじゃうよ俺!？」

「死なん。この手が今、冷気を帯びてないことは、貴様も知っているだろう。それとも」

彼女は眉根に皺を寄せるでも無く、声に冷たさを帯びるでも無く、右手を前に差し出しながら、ただ真剣な表情で俺に訊いた。

「私のことが信じられないか？」

「!」

俺は新しい作戦のことを伝えた日、奈美を信じると言った。その言葉は、決して無責任に口にしたわけではない。

だから俺は、奈美の手を握る。

青白く光る手は、冷たくなど無く、むしろ温かかった。

奈美は頷き、

「ちゃんと握ったな。ならば、我がいいと言ったら、瞬きをする。そうすれば、分かる」

「瞬き？」

深呼吸をして、集中。彼女の手がひととき強い光を放ち、熱くなる。

「いいぞ」

彼女に言われた通り、俺は瞬きをしようとして……気付いた。

「え?」

瞬きが、出来なかった。しようと思っても、瞼が閉じない。

数秒して、彼女の手から輝きが消えて行く。俺はそこでようやく、瞬きをすることが出来た。

驚いて、彼女を見る。

「奈美、まさかこれ……！」

「うむ」

「お前の『概念効力』か？」

「おそらくは。ただ、見ての通り、現状だとコントロールが上手く行かず、保って数秒。しかも発動と同時に、大量のエネルギーを消費してしまう。つまりは未完成品だ。恥ずかしくて、まだ沙耶と未佳には見せられん」

「なら、どうして俺に……？」

思わず、尋ねてしまった。

彼女は眉間に皺を寄せて、いつものようにそっぽを向いてしまうが、口を開く。

「……本当ならば、貴様に見せる方がよっぽど恥ずかしい。だが、今回は……決めたからな」

「決めた……？」

「透明になる宇宙怪獣に負けた日、病室を訪れた貴様が我に言ったこと、覚えているか？ あの時、貴様は我にこう言ったな。……一度お前達のパイロットになった以上、出来る限りのことはしたいと思っている。次はちゃんと、俺の指示を聞いてくれると嬉しい」と

「ああ」

勿論覚えている。

「だから我は、一度だけ、貴様の作戦に従うことに決めた。我だって、今度の模擬戦には勝利したいと思っている。故にこうして、未完成ながら、場合によっては役に立つかもしれないと考え、恥を忍んで貴様に技を見せることもした……」

「奈美……」

「正直、不満は山程ある。貴様をパイロットとして認めただけでは

断じてない。だが、それらは今回、胸の内にはまっておくことにした。一度だけ、貴様を信じてやる。だから」

奈美は切れ長の瞳に俺を映して、言った。

「三日後の模擬戦で、必ず我らを勝たせろ、白坂北斗」

それは残り三日にして、最後の最後、ラストスパートの加速を与えてくれる、何よりの激励だった。

「元よりそのつもりだ」

俺が不敵に笑ってみせると、

「調子に乗って、足元をすくわれなければいいがな」

彼女は呆れたようにため息をつき、しかし少しだけ柔らかい表情を浮かべるのだった。

## 第四章 激突！ サヤナミカVSミストリア

### 第四章 激突！ サヤナミカVSミストリア

地球防衛局東京第一支部の演習場には、ガラス張りの観覧室が設置されている。

稀にスーパードロイド同士が模擬戦を行うことがあるが、主にその関係者が演習を見る為に使用することが多い。高さは地上から二十五メートル程の高い位置にあり、防衛局の施設内から、あるいは演習場に隣接するエレベーターから行き来することが出来る。

六月九日、第二日曜日。模擬戦当日。

白坂南は、第一支部の近所の駄菓子屋で新たに仕入れて来た笛ラムネを啜え、一定の高さの音を響かせつつ、観覧席へと続くエレベーター脇の壁面に寄り掛かっていた。

見上げれば、快晴の青空が広がっており、やや西よりになった太陽が、暖かな日差しを演習場に降らせている。

白衣のポケットから携帯を取り出し、液晶画面を開く。時刻は十二時五十分。

演習場の中央に立つ、紫色のパイロットスーツを着た京極霧夜は、銀髪のメイド少女と共に、何をするわけでもなく、かれこれ十分以上、虚空を見つめ続けている。

南は笛ラムネを吹くのを止め、カリッと奥歯で噛み砕く。エレベーター脇のボタンを押した。

しばらくして、エレベーターの扉が開き、彼女は中に乗り込む。扉が閉まってから十数秒して、観覧室に着く。

そこには、サヤナミカの開発に携わっていた研究員がちらほらと確認出来て、その他の見知らぬ顔は、おそらく京極コンツェルンの関係者か何かだろう。南のことを知っているらしく、挨拶をしに来たスーツの男が、名刺を取り出す。それを見ると、やはり『京極工

業スーパーロボット開発部』と印字されていた。

面倒だと思いつつも、南は白衣の胸ポケットから自身の名刺を一枚抜き、スーツの男に渡す。

そんな感じで、他の京極コンツェルン関係者とも名刺交換を終え、ようやく見知った研究員のところへ行くことが出来た。

「やれやれ……」

南は肩を竦めながら、一面強化ガラス張りで、演習場を隈無く見渡すことが出来る、最前列の席に腰を下ろす。

斜め後ろの席に着いている男性研究員が、苦笑した。

「ご苦労様です、白坂博士」

「全くだよ。これだから、責任者ってのは嫌なんだ」

「物は考えようです。責任者だからこそ、自由が利く場合もあります」

「それはサヤナミカのことを言いたいのかな？」

演習場に目を向けたまま、南が背後に尋ねると、「その通りです」と返ってくる。

「僕は正直、サヤナミカの開発には反対でした。何故なら、サヤナミカが合体することに、特別な意義が感じられないからです。白坂博士のことは尊敬していますが、サヤナミカの開発には、明らかに私情が、白坂博士のエゴが混ざっていた。いや、エゴそのものと言ってもいいでしょう」

「サヤナミカを作ったのは、ハートドライブの共鳴効果を証明する為だよ」

「確かに、ハートドライブには、未知の可能性がまだまだ秘められています。しかし、共鳴効果を証明するだけならば、合体させる必要はありません。双子のハートドライブを作り出して、同じ人格を持たせれば、それだけで事足りたはずです。それなのにあなたは、合体させることに、それも三体合体に拘った。三つのハートドライブに、それぞれ異なる人格を与えてまで」

「……」

南は答えない。

男性研究員は、彼女を怒鳴るわけでも、非難するわけでもなく、至って平静に続ける。

「白坂博士は、とにかくハートドライブの出力増強に拘ってしましたよね。サヤナミカに異なる人格を与えたのは、異なる人格が心を通わせた時にこそ、大きな共鳴効果を生み出すと考えたからじゃありませんか？ 三体合体を選択したのも、より大きなハートドライブ出力を得たかったからでしょう？」

「後者は合ってるよ。だが、前者には、別の理由もある」「何です？」

「サヤナミカは、ただのスーパーロボットじゃない」「南は斜め後ろの席を振り返り、答える。

「私の、大切な娘達でもあるんだ」

男性研究員は、ふっと表情を崩して、笑った。

「白坂博士のそういうところ、僕は尊敬してます」「それから彼は、演習場に目を向ける。

「だから……僕も影響されたのかもしれませんが」

「ほう、何をだね？」

「僕、休憩時間の度に、ここから見ていたんですよ。サヤナミカ、博士の弟さんと一緒に、一ヶ月、ずっと練習してましたよね。宇宙怪獣に敗れても、諦めずに」

南も一ヶ月に渡る合体練習の様子を思い出しながら、強化ガラスの外に向き直る。

「……ああ。そうだな。開発者の私でさえ、驚かされることばかりだったよ。合体練習だけじゃなく、他のことでも」

「何かあったんですか？」

「いや、こつちの話だ。気にしなくていい」

再び彼女が携帯を開くと、時刻はまもなく午後の一時を示そうとしている。

背後の方で、自動ドアが開く音がする。

見ると、司令のネームプレートを付けた三つ編みの女性、羽柱鈴音が観覧室に入って来るところだった。

南は、近付いて来る彼女に手を振る。

「やあ、スズ。指令所の方は放つて置いてもいいのかい？」

鈴音は、南の隣の席に座る。

「問題ないわ。サヤナミカとミストリアの決闘が終わる頃には、向こうも何事もなく終わっているはずだもの」

「ん……それもそうか」

「ところで、肝心のサヤナミカがまだ到着していないようだけど」

鈴音の言う通り、演習場に立っているのは、京極霧夜とミストリアだけであり、北斗とサヤナミカの姿は何処にも見えない。

南は、涼しげな顔で言う。

「どうやらそうみたいだね」

「そうみたいって……大丈夫なの？ もう演習開始の時刻になるわよ？ 万が一遅れでもしたら、そのまま不戦敗になる可能性だって

……」

「大丈夫さ」

髪伸び放題じゃなくなった悪魔は、ニヤリと口元を歪める。

「何しろ、ウチの弟君は天才だからね」

「……ブラコンね」

「失礼な！ 私は一人の女として、心の底から弟君を愛している！」

「なお悪いわ！」

そんな会話をしていると、南の視界に三つの機影が映る。

「おっ、来たみたいだよ」

ブースターで空中を飛翔し、演習場に降り立つ、全長二十五メートルの三機。それぞれ鮮やかなピンク、ライトブルー、レモンイエローの三色に彩られた機体は、間違いなく、南が開発したスーパーロボットである、サヤとナミ、そしてミカ。

彼女は手元の携帯の液晶を見た後、それを白衣のポケットに入れた。

「午後一時ジャスト。……さて、いよいよだ」  
ついに、サヤナミカとミストリアの模擬戦が幕を開ける。

「サヤ、外部音声を開いてくれ」

俺は機体を演習場の中央に着陸させた後、コクピットのモニターに表示されているデジタル時計が、十三時になったのを確認してから、ウィンドウに映っている、ピンツインテルの少女に言った。

『了解。外部音声の回線をリンク。準備オツケーだよ、北斗くん』

「よし。あー、テストス。聞こえるか、京極！」

サヤの機体前方で腕を組み、こちらを見上げている、紫色のパイロットスーツの男に呼び掛ける。

彼の口が動き、

『そんな大声を出さなくても、聞こえているよ、白坂。耳障りだから、音量を下げてくれないかな』

嫌味ったらしい声がコクピット内に流れて来る。

なので俺は、サヤに指示を出す。

「サヤ、外部スピーカーの音量を上げてくれ。五割増しくらい」

『うん、分かった』

『ちよつと待てえええ！』

見ると、京極が耳を塞ぎながら、騒いでいる。

「何だよ、うるさい男だな」

『うるさいのは君の声だ！ 外部スピーカーの音量を下げる！ 変な嫌がらせは止めて、正々堂々と勝負しないか！』

「甘いな、京極。勝負は戦う前から始まっているんだよ。そして、俺は正々堂々、真正面から嫌がらせをしている！ ボクシングとかの格闘技で、試合前にやる、舌戦と同じだ。お前は、俺のスーパーロボットを酷く馬鹿にしてくれたからな。これはそのお返しだ、キザ野郎」



『白坂、君って奴はあ……！』

オールバックの男は、腹立たしげに顔を歪める。

俺はトドメとして、サヤの操作を借り、左手は腰に、右手の平は上にし、親指以外の四本の指を同時に動かして、挑発のポーズを取る。

「心配しなくても、ちゃんとスーパーロボット同士の戦闘でも勝つてやるよ。ただし、スピーカーの音量が気になって、戦闘に集中出来ないというなら、考えてやらないこともないが、どうする？」

『ふざけるな！ ミストツ！』

こめかみに青筋を立てて、京極が隣のメイドさんの名を叫ぶ。

ミストは、無表情な顔を主人の方に向ける。

『……はい、何でしょう、マスター』

『ロボットモードに変身しろ！ このフヌケ男を、力で黙らせる！』

『……了解しました』

平坦な口調で答えた彼女は、突然、ふわっと風船が浮き上がるように、大きく後方に数十メートル程跳躍し、着地。

メイド服のスカートをそっと両手で摘まみ、持ち上げて、お辞儀をする。

『……変身と、それに伴う掛け声、失礼致します』

そう言っつて、顔を上げた彼女は、

『参ります』

両手を重ね合わせ、印を結んだ。

『チェンジ、ミストリア！ ロボットモード！』

透き通った、張りのある声が響き、鮮やかなパープルの光が彼女を包み込む。

身長百七十後半の長身である紫髪の少女は、巨大化にもそれを反映させ、あっという間にサヤ、ナミ、ミカの全長を追い抜き、三人娘のおよそ三倍、全長四十メートルの巨軀を誇る、パープルカラーの西洋甲冑を纏った、忍者のごときスーパーロボットと化す。

黒いゴーグルの奥の黄色いアイカメラが輝き、首に巻いた黒いマ

フラーが風になびく。

重装甲タイプのスーパーロボット、ミストリア四式。

鋼鉄の彼女は、巨大な足を進ませ、こちらに近付いて来る。

俺達とミストリアとの数十メートル開いていた距離が近くなるにつれ、見上げる角度が大きくなり、四十メートル超という巨大さを、改めて実感させられる。

『……マスター、ロボットモードへの変身を完了致しました』

京極の近くまで辿り着いた彼女は、従者の機嫌を窺うように、片膝を着いて、頭を垂れる。

『よし！ ミスト、コクピットハッチを開放！ 搭乗する！』

『……了解しました。マスター、私の手に』

ミストリアが巨大な手の平を京極の前に差し出す。

オールバック男はそれに飛び乗る。

巨大な手の平が腹部に移動するのに合わせ、腹部装甲が上に開く。その奥には更にハッチがあり、左右にスライドし、コクピットを露わにする。

京極が中に入り込み、二重のハッチが閉じて行く。

ミストリアのアイカメラが一際強く輝いて、紫色の巨軀を立ち上がらせた。

俺達と対峙する全長四十メートルのスーパーロボットは、まるで目の前に、一つの山がそびえ立っているかのような。

ふと、サヤの身体が震えていることに気付いた。俺はウィンドウのピンクツインテールの少女に、声を掛ける。

「サヤ、怖いのか？」

『うん。正直、怖いよ……だけど！』

「心配するな、俺が付いている。それと、今日まで練習して来た、自分の力を信じる。お前のハートドライブ出力は、一ヶ月前より格段に上がったんだからな」

ウィンドウ内の沙耶が深呼吸をすると、サヤのボディーも振動を止める。

彼女はウィンドウ内の自分の頬を、ぴしゃりと両手で叩いた。

『……これで大丈夫！ 後は……全力を尽くすだけ！ 行けるよ、北斗くん！』

「ああ。なら俺は、お前を信じる！」

ミストリアの外部スपीカーから、京極の笑い声が響く。

『はーっはっはっはっはー！ 立場が一気に逆転したな、白坂。今度は僕が君を見下ろす番だ』

俺はモニターを覆い尽くさんばかりの巨軀を見上げて、言う。

「巨大な鎧を得た途端、急に機嫌が良くなったようじゃないか」

『機嫌……？ 最悪に決まってるだろ、そんなもの』

京極の言葉には、強い努力が込められていた。彼は吐き捨てるように、続ける。

『ずっと最悪だった。機嫌が最悪なのは、遡れば三年前からだ。ここ二ヶ月は最悪の極みだ。秀才の僕に唯一並ぶ男が、そんなちっぽけで情けないスーパーロボットと慣れ合って、墮落していった。ここ最近で君は変わったよ、悪い方向にね。少し前の君は、もっと冷静沉着で、何事にも動揺しない、強い心を持っていた。それが、今やスピーカーを大音量にして、嫌がらせをして来るような矮小な男に成り果てた。見るに堪えないんだよ。腹が立つ』

「俺の目指している先は、今も昔も変わらない。ここ二ヶ月の間、墮落していたのは事実だ。でも、今の俺は、自分が間違った方向に行っただとは思っていない！」

ミストリアが巨腕を左右に広げる。

『分かっているさ。今更言葉を交わして、どうなるものでもない。第一、元より分かり合っつもりなどない。だから、僕は今日、この戦いに勝利することで証明してみせよう。君がいかに墮落し、変わり果てたか……そして、僕がいかに君より優れたスーパーロボットパイロットであるか！』

両腕の甲から鋼鉄のブレードが展開すると同時に、ミストリアの頭部が防衛局の施設の方を向く。

『管制塔、演習場の防護フィールドの展開を!』

京極は、姉さんや鈴音さんが見ているであろう観覧室とは別に、演習場の隅に立っている塔型の施設に呼び掛ける。

『了解、防護フィールドを展開します!』

管制塔の外部スปีカーが返答し、演習場の周囲の地面から、高さ百メートル程の支柱がせり上がる。特殊合金で出来ており、数は四本。

それぞれの支柱から薄い光のヴェールが伸び、支柱同士を繋ぎ、演習場の周りを四角に囲う。まるで、ボクシングやプロレスのリングを定めるかのように。

この防護フィールドは、流れ弾等が演習場より外へ出るのを防ぐ以外に、戦闘演習における行動可能範囲を制限する意味合いもある。演習場の広さは一キロ四方。障害物は一切無し。

「サヤ、一時的に外部スปีカーとのリンクを切断」

『了解!』

サヤに頼んで、通信の音が外に漏れないようにしてもらおう。

俺は、ウィンドウに映っているポニーテールの少女　サヤの左横に立っているライトブルーの機体に最終確認をする。

「ナミ、作戦は分かっているな。お前はミカと一緒に、ひたすらミストリアの分身と思われる奴に攻撃を浴びせてくれ」

『とりあえず、目の前の敵に集中すればよいのだろうか?』

「ああ。ただし、敵の攻撃には気を付ける。実体交換による不意打ちが、いつ来るか分からない。まともに喰らえば、パワーに物を言わせて、そのまま捻じ伏せられる。とにかく、敵の攻撃をかわすことが最優先事項だ。いいな?」

『……よかろう。我も、同じ轍は踏まん。この前のような醜態を晒すわけにはいかないからな!』

「それから、ミカ」

俺は、金髪癖っ毛の少女が映っているウィンドウに視線を移す。

『じゃ?』

サヤのように緊張しているわけでもなく、ナミのように闘志に満ち溢れた表情をしているわけでもなく、やけに落ち着いた様子で、ぱちくりと瞬きをするミカ。

「お前は、何というか……いや、落ち着いてるのはいいんだけど、逆に落ち着き過ぎというか。……大丈夫なのか？」

「えっ？ ああ、ごめんな、ほーやん。変に心配かけてしもつたみたいやね。ただ、今、凄くハートドライブが穏やかなんよ。戦いの前やのに、自分でも不思議なんやけど。何と言ったらええかな、そう……ホツカイロや」

「ホツカイロ？」

ウィンドウの彼女は、にかつと八重歯を覗かせる。

「ハートドライブがぼつかばかに温まってるってこと。ほーやんと一緒に居るからかもしれへんね」

……そういえば、猫って生き物はマイペースなんだったな。いつだったか、姉さんも言ってたっけ。

俺は瞼を閉じて、サヤと同じように、深呼吸をする。

ゆっくりと息を吐き、目を開けて、三人娘に告げた。

「よし！ 行くぞ、三機共！」

『うん！』『承知！』『にやあ！』

再び外部スピーカーの回線を開き、機体を構えさせると、管制塔のスピーカーからも、最終確認が来る。

『それでは、ミストリアとサヤナミカの両者とも、準備が出来たようなので、これより模擬戦を開始したいと思います。模擬戦のルールに則り、どちらかのパイロットが搭乗している機体の損傷率が、五十パーセントを超過した時点で、戦闘は終了とします。よろしいですね？』

「はい！」

『問題ありません！』

俺と京極が答えると、どのくらいだったかも分からない、数秒だったか、数十秒だったか、しばしの間、沈黙が辺りを支配する。

『では』

やがて、その支配を突き破り、演習場に、ゴングの代わりとなる言葉が響いた。

『 模擬戦開始ッ！ 』

先に動いたのは、ミストリアだった。

巨大な手の平を重ね合わせ、先日の宇宙怪獣との戦闘で見せた、あの印を結ぶ。

『 白坂、早速で悪いが、僕は最初から全力で行かせて貰うよ。昨日も言った通り、獅子は兔を狩るにも全力を尽くす。そして僕は、兔に噛み付かれるような真似はしない！ ミスト！ 』

『 ……はい、参ります 』

京極の呼び掛けに応じ、ミストリアの黄色いアイカメラが発光する。

『 幻影の舞 』

何枚重ねにもしていた薄い紙を剥がして行くがごとく、ミストリアの背後から、第二のミストリア、第三のミストリアが現れ、やがて、最初のミストリアと合わせ、総勢十体となる。

三人娘の三倍近くもある巨人が、十体である。それらが全て、こちらを見降ろしているのだ。モニター越しの俺にさえ、尋常じゃない威圧感が伝わって来る。まるで山脈を見上げているかのような気分だ。

だが、サヤは震えていなかった。ウィンドウの彼女は、必殺技の練習をしている時のように、凜とした表情をしている。

ナミは「ふん」と相変わらず不敵な笑みを浮かべ、右手を手刀の形にする。

ミカも戦闘体勢になる。腰を屈め、両手をコンクリートの地面に着け、四足歩行の構えを取る。

対峙する十体のミストリアのブースターが、唸りを上げた。

『 行くぞ、白坂！ 』

京極が言うや否や、その中の三体が飛び出し、サヤ、ナミ、ミカ

にそれぞれブレードで襲いかかって来た。

すかさずブースターを噴射して避ける三人娘だが、三体のミストリアは巨体に似合わぬ素早さで、更なる斬撃を繰り出す。

それに呼応するかのように、三人娘が技名を叫ぶ。

『ファイヤーブレード！』『フリーズランス！』『サンダークロウ！』

サヤは、右手で握り拳を作り、それを柄代わりにして、炎の刀身を伸ばす。

ミストリアが放つ上からの斬撃を、ブースターで横にかわす。そのまま地面を砕くはずの一撃が、溶け込むようにコンクリートに吸い込まれるのを見て、サヤはミストリアの懐に飛び込む。

『はあああッ！』

ファイヤーブレードで、眼前のミストリアのボディーを横一線に薙ぐ。

分厚い装甲が紙切れのように裂け、ミストリアの幻影は霧が風で吹き飛ぶように、消滅した。

ナミは、あらかじめ構えていた手刀を腕ごと凍結、肘から先を氷で覆い尽くし、氷柱のように長く、鋭い槍を作り出す。ナミの十八番の技にして、メインウェポンの氷槍である。

彼女は先日、宇宙怪獣に敗北した鬱憤を晴らすごとく、ミストリアの攻撃を最低限のステップで避けると、一気に突っ込んで、攻勢に出る。

『見切った！』

腕が分身して見える程の、氷槍の高速乱れ突きを放つ。

彼女の言った通り、ミストリアの幻影に無数の穴が穿たれ、風穴だらけとなったボディーは形を保つことが出来ず、崩れ去った。

一方のミカは、四足歩行の体勢から、腕力と脚力、加えてブースターの勢いを利用し、ミストリアの攻撃を逃れて飛び上がって、空中でムーンサルトをする。

両手は既に電撃を帯び、白く発光している。ミストリアが上空を

見上げる前に、ブースター全開で急降下、

『うにゃあッ！』

両手の指先を食い込ませるようにして、ミストリアを縦に引き裂く。霧散する幻影。

結果として、本物は一体もない。京極は慎重な男であるから、全力とはいっても、まずは様子見のつもりなのだろう。

「どうした、京極！ 幻影だけを突撃させて、自分は高見の見物か！」

俺が外部スピーカーで煽ると、両腕を広げたポーズで並び、待機している残り七体のミストリアから笑い声がある。

『はーっはっはっはー！』

声は最初、中央のミストリアから聞こえたが、

煽っても無駄だよ、白坂』

次は右から、

『僕は焦って、決着を急ぐような真似はしない』

今度は左から、声がある。実体交換して、本物を悟られないようにする為だろう。

声の位置は留まることなく、しかし京極の話は続く。

『チェスや将棋と同じさ』

『いきなり敵のキングを取ることは出来ないし』

『焦って手を進めれば、逆にこちらの間を作ることになる』

『今のは、君達が、サヤナミカがどの程度の実力を持っているのか測る為の、言わばジャブみたいなものさ』

『それに、ミストリアの幻影は、最大九体までならば、幾らでも分身して、作り直すことが出来る』

その言葉通り、中央のミストリアが印を結ぶと、新たに三体の分身が増え、元の十体に戻る。

『ミストリアにとって、分身は、チェスで言うポーン、しかも、いつ何時でも盤外から呼び出すことの出来る、不死身の歩兵なのさ』

『それを倒した程度で、粹がって貰っては困るな』



「しかし、どうやら、腐っても鯛、腐っても白坂北斗のスーパーロボットとあって、完全に無能というわけでもないらしい」

「ピンクツインテールだけじゃなく、ライトブルーとレモンイエロ―も、思ったより出来るようだ」

「だから、次は」

俺の、パイロットとしての直感が、告げる。

「三人共、気を引き締める！ 来るぞ！」

「十体全員で行かせて貰う！」

ブースター点火と同時に、十体のミストリアが一斉に突撃を開始、乱戦にもつれ込む。

ナミとミカに向かって来たのは、それぞれ四体ずつ。

「この程度！」

ナミが氷槍の右腕を構え、真正面から迎え撃とうとするのが、モニターに見える。

「ナミ、言つたはずだ！ 避けることを最優先に考える！」  
「くっ……！」

明らかに反撃を繰り出そうとしていた彼女は、氷槍を引き、ブースターで後退しつつ、四体のミストリアの攻撃を凌ぐ。

ミカにも襲い来る、四体のミストリア。ミカならではの柔軟な動きで、空中を舞い、斬撃の雨を潜り抜ける。

それぞれ四体ずつ……計八体を彼女達に割いたということは、どうやら、京極はまず、ナミとミカから潰すつもりらしい。

いや、待て。本当にそうか？ ……違う、逆だ！

「サヤ！ 気を付けろ！」

ウィンドウのピンクツインテールの少女に言う。彼女に迫って来るのは、二体。

サヤは一体目の斬撃を避ける。先程と同じ要領で、懐に飛び込み、切り裂く。そのミストリアは幻影であり、靄のように揺らめく。

問題は二体目だった。消えかけた幻影を両断するようにして、サヤにブレードを振り下ろして来た。

『うあっ！』

炎の剣を前に構えて、敵のブレードを受け止めるサヤ。二体目のミストリアは本物で、鏝迫り合いになる。

京極は笑う。

『はーっはっはっはー！ さすがに一撃では仕留められないか、白坂！』

「当たり前だ！ 舐めるな！」

『だが、こうしてパワー勝負に持ち込めた。ミストリアのハートドライブが京極工業製の出力強化型なのは、知っているだろう？ 故に、純粋な出力で、ミストリアに並ぶ者は存在しない！ どちらにしても、チェックメイトだ！』

腕のブレードに、上方からの力を込め、サヤを押し潰そうとするミストリア。

『ぐう………！』

炎の剣にもう片方の手も添えて、堪えるサヤだが、押し返し切れず、足の膝が次第に折れ曲がって行く。

ビキッ！ と足元のコンクリートにヒビが走り、沈み込む。

「サヤ！」

このままではマズい。ここは予定より早い、ミカに頼るしかない。

「待ってる、今」

『駄目だよッ！』

サヤが怒鳴る。ウィンドウの彼女は真剣な眼差しで俺を見て、言った。

『まだ駄目！ ボクのことには心配ない。だから、北斗くんは、自分のすべきことに集中して！』

「だけど、お前………！」

『だけでもへったくれもない！ 北斗くん、さっき言ったよね。ボクを信じるって。だったら、信じて。信じて、前を見て。ボクはボクのすべきことをやる。必ず遣り遂げてみせる。だから、今は………』

「……分かった。お前に任せる。自分の力で……ミストリアを押し返してみせる！」

『うんっ！ 押し返す！』

サヤは笑顔で頷く。

コクピットの会話を聞いていたのだろう、京極が『はーっはっはっはっはー！』と嘲笑する。

『何を馬鹿なことを言っている？ 気合いでなんとかなる問題ではないさ。聞こえてなかったのか？ ならば、もう一度言おう。ミストリアのハートドライブは、京極工業が開発した、最新の出力強化型』

『ふぐううう ツ！』

『何い！？』

京極の唱える理屈を跳ね飛ばし、サヤが気合いの一声を上げ、ミストリアのブレードを押し返し始める。

地面の亀裂が広がって陥没、クレーターに変わろうとも、ピンクツインテールのスーパーロボットは屈せず、炎の剣に力を込める。

『ふぁーいーとおおー！』

完全にサヤの膝が伸び、まともな鏢迫り合いの形にまで持ち返す。京極が歯痒そうに、自らが駆るスーパーロボットに言う。

『ええい、何をやっているミスト！ こんな小さなロボットに、パワーで押されてどうする！』

『……申し訳ありません、マスター。しかし、これ以上、どうやっても押し切ることが』

『いっばあぁあつッ！』

直後、サヤが叫びと共に、炎の剣を思いっきり振り抜いた。

『ぐあッ！？』

ブレードの腕を弾いた勢いで、ミストリアの巨体を宙に浮かせ、吹き飛ばす。

「沙耶の奴……やりやがった……！」

素直に驚いた。しばらくの間、持ちこたえてくれさえすれば良かったのだが、まさか本当に押し返すとは。

沙耶のハートドライブ出力は、昨日計測した時点でもスーパーロボット平均の六十パーセント前半。にも関わらず、ぶつつけ本番で、ここまでの爆発力を発揮して来るとは思わなかった。

サヤの勢いはまだ止まらない。右手に炎の剣を残したまま、左手で火球を作り、それを宙に放り投げる。

『ファイヤーボール』

炎の剣をバットのごとく振りかぶり、落ちて来た火球を強打、

『ライナアアア ツ！』

ミストリアに向かって撃ち出した。

空中で体勢を立て直し、着地するパープルカラーのスーパーロボットに、炎の剛速球が走る。

『喰らうか！ その程度の攻撃、実体交換で容易くかわして……何！？』

ミストリアは火球の直撃を受け、四十メートルの巨体を、爆炎が包み込んだ。

やがて、漂っていた黒煙が消え去ると、両腕を身体の前で交差させた防御姿勢のミストリアが姿を現す。

さすがに重装甲タイプのスーパーロボットとあって、堅い。見たところ、ダメージを受けている様子はない。

だが、攻撃を当てたことに変わりはない。俺は京極に言ってやった。

「実体交換が出来なくて、残念だったな」

『……………』

「サヤとお前が鏝迫り合いをしている間、ミカとナミが何もしないで見ていたとも思ったのか？」

レモンイエローと、ライトブルーのスーパーロボットが、サヤの両脇を固めるように並ぶ。

ミカとナミを取り囲んでいたミストリア八体の幻影は、既に彼女

達の攻撃によって消滅しており、演習場に存在しているのは、対峙する本物のミストリアと、三人娘だけになっていた。

「まずは俺達が一ポイント先取だ、京極」

『ふっ……』

ふと、京極がぐぐもった笑い声を洩らした。今までの誇張するような笑い方とは異なり、心の底から可笑しいとも言いたげな笑い。

『ふははははははは！ それでこそ……それでこそ、白坂北斗だ！ ふはははははははは！』

ミストリアが防御姿勢を解除し、印を結ぶ。

『面白い……！ 僕と君、どちらが上か、決める戦いとして申し分ない。ミストツ！ 幻影の操作はもうしなくていい！ ここからは、本体も幻影も、全てのコントロールを僕が引き受ける！ お前は、ハートドライブ出力の安定に努める。幻影の舞、真の恐ろしさ、連中にとくと見せてやるッ！』

『……了解しました。私は後方に下がり、マスターの補助に徹します』

話を聞く限り、どうやら今までは、ミストリアが幻影を操作、京極が本体を操作、と分担して行っていたらしい。

俺は三人娘に告げる。

「注意しろ、三人共……今度の幻影は、一筋縄では行かないぞ」

ところが、いつまで経っても、ミストリアが動き出す様子はない。印を結んだ体勢のまま、沈黙を保ち続けている。

長く、不気味な沈黙。

さすがに様子がおかしいと思い、俺はカマを掛けてみる。

「どうした？ 仕掛けて来ないのか、京極！ 怖気づいたか？」

『いいや、怖気づいてなどいない。それに……もう仕掛けている』

「何を」

直後、金属の軋む音が響いた。

はっとなつて、俺は音の聞こえた方向のモニターを見る。

ライトブルーの機体、ナミの右肩の関節部分が、鋼鉄のブレードで、背後から貫かれていた。

ウィンドウのポニーテール少女の瞳が、驚愕に染まる。

「なっ……!?!」

ナミのライムグリーンのアイカメラが、背後の敵影を捉える。

四十メートル超のパープルカラーのスーパーロボット、ミストリアが、圧倒的な威圧感を漂わせて、そこに立っていた。

普通ならば気付くはずだが、太陽の傾いている方向の関係で、ミストリアの影は、俺達の背後の方に伸びている。それにしただって、ナミが貫かれるまで、音も、気配もしなかった。これではまるで、瞬間移動だ。

印を結んだ体勢のミストリアは、未だ俺達と距離を開けた前方に立っている。

「やられた……! ナミ! 退避しろ!」

ミストリアが刃を振り上げる。ナミの右腕がもげて、宙を舞い、演習場の地面を転がる。

「くっ!」

その場を離れようと、ブースターを点火するナミ。

しかし、ミストリアはそれを見逃さない。振り上げたブレードの刃を返し、

「遅い!」

ナミの頭部目掛けて、上からの斬撃を繰り返そうとする。

「しまっ……!」

攻撃を防ごうにも、彼女の武器である氷槍、フリーズランスは、右腕ごと斬り落とされてしまっている。京極がナミの右腕を狙ったのは、その為だろう。

鋼鉄の刃が、彼女に迫る。

「ナミちゃん!」

サヤが二体の間に割って入った。ファイヤーブレードで、ミストリアの攻撃を受け止める。

ナミはその隙に、ブースターで距離を開け、何とか退避に成功する。

俺はレモンイエローのスーパーロボットに呼び掛ける。

「ミカ！」

『了解や！』

ネコミミ型の排熱口のファンを開き、ピンクのアイカメラを光らせ、四足歩行の構えを取り、ミカはミストリアに突っ込む。電撃を帯びた爪を振りかざした。

ミストリアが紙のように切り裂かれ、消滅する。

「実体交換……！」

俺は額から嫌な汗が伝うのを感じる。

身代わりの術とでも言うべき、速さと変則さ。

そして、サヤとミカに、巨大な影が差す。

『遅いと……言っているだろう！』

ミストリアがブレードで薙ぎ払う。

サヤとミカは、サイドステップで間髪回避する。

幻影は霧が晴れるように薄れて消え、離れた所にいるミストリアが、結んでいた印を解いた。

『ふはははは！ どうだい、白坂。これこそが、ミストリアのハートドライブ属性「幻」の真骨頂！ 実体交換の、真の使い方だよ！』  
分身と自分の頭の中で決め付け、幻影は実体から分かれるようにして発生するものだと思っていた。しかし、実際は違う。

「幻影は、京極、お前の思い通りの位置に出現させることが出来るのか……！」

『その通りだ。といっても、出現させられる場所の限界距離は存在するがね。せつかくだ、戦闘に支障はないから、教えておいてあげよう。ミストリアは実体から半径一キロ以内の好きな場所に、九体までの幻影を出現させることが出来る。つまり、この演習場内ならば、どこへでも自在に幻影を配置することが可能なのさ！』

先程のナミの右腕を斬り落とした攻撃は、気配のない幻影を俺達

の背後に発生させ、印を結んでいた本体と瞬時に実体交換、ナミの右肩の間接にブレードを差し込んだ、というわけだ。

それはまさに

『驚きが隠せないようだね。まさに、瞬間移動みたいだろうか？ ミストリアは、元々この戦術を想定して造られたスーパーロボットなんだ。スペックの比重をパワーと防御力に置きつつも、ハートドライブ属性「幻」による、幻影の自由配置と、実体交換で、高速戦闘をも可能にする。それが我がミストリア。剛と柔を合わせ持つ、最強のスーパーロボットだ！』

京極工業は 京極コンツェルンは、なんと恐ろしいスーパーロボットを生み出したのか。

ミストリアが過去、一度たりとも宇宙怪獣に敗北していないのも頷ける。

西洋甲冑を着た忍者のようなデザインは、決して伊達ではないということだ。

だが、ミストリアがいかに強力な機体であるとしても、彼女を自在に操れるのは京極くらしいものだろう。彼の天性の戦闘センスと磨かれた操縦技術があつてこそ、ここまでの戦闘能力を発揮することが出来るのだ。

改めて、目の前の大型スーパーロボットが、強敵であることを知る。

『どうやら二週間前から、ライトブルーポニーテールにも必殺技をしこんでいたようだけど、こうやって事前に潰してしまえば何の問題もない。努力は徒労に終わったね』

「くっ……！」

やはり、そこまで知られていたか。

と、腕一つを失ったナミが、左腕にフリーズランスを展開し、ミストリアの方に向き直った。

『結局……何も変わらないというわけだ……』

右肩の間接の断面は、スパークを起こしている。迂闊に動くと、



関節部が爆発を起こしかねない。

俺はウィンドウの彼女に言う。

「ナミ！ 後方に下がれ！ その傷じゃ、これ以上の戦闘は無理だ！」

『戦闘は無理？ 勝手に決め付けるな。別にボディーを貫かれたわけじゃない。攻撃に必要な武器を一つ、持って行かれただけだ』

「武器じゃない、持って行かれたのは、お前の腕だ！ 痛みは感じないかもしれないが、ダメージを受けてることを自覚しろ！」

モニターには『ナミ、損傷率十六パーセント』の表示が出ている。ウィンドウの彼女が顔を上げ、切れ長の瞳を俺に向けた。

『黙れ、ヘボパイロット』

『貴様の言うこと聞いて、この様だ。何だ、これは？ 先日の宇宙怪獣の戦いと、何も変わっていないではないか。この上、貴様の指示に従って、後方に下がるだど？ 冗談ではない！ 我は貴様を信用しない。最後に頼れるのは……自分だけだ！』

ナミがポニーテールブースターで加速し、ミストリアに向かって突撃する。

「ナミッ！」

『うおおお ツー！』

フリーランスを前方に構え、ブースターの推進力をそのまま攻撃力に換え、矢の如く突っ込む。

しかし、ミストリアは、印を結ぶどころか、かわす素振りも、防御する素振りさえも見せない。

京極は呟く。

『愚かな……』

ミストリアはただ、目の前を見つめ、その場に立っている。

『くたばれえええ！』

ナミのフリーランスの切っ先が、ミストリアに突き刺さった。

が、切っ先は紫色の胸部装甲を少しも抉れることなく、表面に当

たったただけで、その動きを静止していた。装甲表面のバリアーを貫くことが、出来なかったのだ。

『馬鹿な……出力が足りてない……!?!?』

『馬鹿な、だと? 何を言ってる、当然の帰結だろう。パイロットの命令もロクに聞けない出来損ないの不良品風情が、僕を倒せるとでも思ったのか? だとしたら、甚だ遺憾だよ。君は戦いの舞台上がる資格すらない。邪魔だ、そっちがくたばれ』

京極はつまらなそうな声で、ミストリアの脚部を動かし、ナミを蹴り飛ばした。

『がつ……!』

ライトブルーの機影が、装甲の破片を散らせて、宙を舞う。

「ミカ! ナミを!」

『分かってる!』

俺が指示を出す前に、ミカは四足歩行の獣のごとく走り出していた。ナミがコンクリートの地面に叩き付けられる前にキャッチする。蹴られた際の衝撃のせいか、ナミとのリンクが途切れ、ウィンドウは消滅してしまっている。

ミカに抱きかかえられたナミは、ぐったりと動かない。想像以上のパワーで蹴り飛ばされたらしく、脇腹辺りの装甲が砕け、内部構造が露出し、バチバチと漏電を起こしている。

『う……!』

苦しげに呻くナミ。

ミストリアがミカとナミを見て、『下らないな』と首を横に振った。

『まさか、パイロットの命令を聞かずに特攻したスーパーロボットを、戦力を分断してまで助けるとは。白坂、僕には君の行動意図が、イマイチ理解出来ないよ』

「訂正しろ」

『何?』

「ナミを出来損ないの不良品と呼んだことを訂正しろ!」

俺は言った。

京極が腹立たしげに言葉を返す。

「……それが理解出来ないと言っているんだ。何故、君はサヤナミ力を庇う？ それだけの技量がありながら、何でそんなスーパーロボットのパイロットをしている？ 君ならもっと、自分の力を発揮出来るスーパーロボットに乗り換えることが出来るはずだ。いや、誰だって普通はそうする。それなのに、どうして君はそんなところに甘んじている？ 何故二週間前、わざわざ乗り換えるチャンスを与えたのに拒否した？」

「最初は、俺もそう思っていた。何で自分はこんな奴らの面倒を看なくちゃならないのかって、散々目の前の状況を呪ったよ。だが……そんなの、ただの言い訳だ。俺は、思い通りのスーパーロボットに乗れないからって、ガキみたいに拗ねてただけだ。甘えていた。でも、それじゃ駄目なんだ！ 俺はそのことに気付いた！ いや、気付かされた！ 他でもない、こいつらに！ だから、やってやるうと思った。意地でもこいつらを合体させて、逆に名を上げてやるうと、俺は決めた！ 俺は今……自分の意思でここにいる！」

「スーパーロボットは、パイロットと心を重ねてこそ、真の力を引き出せる。それすらも出来ないスーパーロボットを、君は自らのパートナーとして認めるといえるのか？」

「パートナー？ 違うな！ こいつらは俺の仲間だ！ どん底から這い上がるうとしていて強いハングリー精神と、何にも諦めず、誰にも負けないという誇りを持った仲間！ ナミは、自身がスーパーロボットであることを誇りに思っている。確かにあいつは、俺の言うことを聞かない。だけど、あいつはいつだって全力だ！ いつだって全力で強くなるうと足掻いている！ そんなあいつを、出来損ないの不良品なんて、絶対に呼ばせない！」

「それが下らないと言っているんだッ！」

京極の怒号と同時に、ミストリアが印を結んだ。

ミカとナミから離れた位置に居て、孤立しているサヤの周囲に、

九体の幻影が出現する。ミストリア本体と合わせ、十体で円状にサヤを取り囲む様は、まるで支柱の太い檻に閉じ込めるかのようだ。

『実際に目の前の状況を見る、白坂！ そのライトブルーの機体が独断先行したことで、君の乗る機体は孤立し、こうして十体のミストリアに取り囲まれる羽目になった。これはミストリア必勝の型だ！ 未だかつて、この型から逃れた宇宙怪獣は存在しない！ それでもなお、君は彼女を庇えるのか！？ 庇えはしないさ！ 庇えたとしても、それは偽善だ！』

「……だったら、掛かって来い。この型を崩して、ナミに頭を下げさせてやる！」

俺はウィンドウの、ピンクツインテールの少女に目を向ける。

「サヤ！ あれを使う！」

『うん！ ナミちゃんの仇も、まとめて討つ！』

幻影の檻の中央で、サヤがファイヤーブレードを消失させ、代わりに腕を引く。

それは一カ月間、早朝に特訓を繰り返して来た、必殺技の構え。

『はああ……！』

ピンクカラーのボディを中心に、炎が渦巻く。炎はボディから、右腕の握り拳に集中して行く。

京極が笑った。

『ふはははははは！ やはり来たな、カウンター狙い、一撃必殺、一点集中の必殺技！ 無駄だ、当てられはしない！ 教えてやろう、我が必勝の型は、カウンターを防ぐ為の型だ！ そして、これから放つ必殺技「百花繚乱」は、カウンターを繰り出す暇も、隙も与えない！』

先日の消える宇宙怪獣を、一瞬で八つ裂きにし、爆散させた技だ。だが、俺は退かない。この戦い、俺はサヤナミカ三人娘を信じて決めたのだ。

『これで終わりだ、白坂！ 必殺奥義、百花繚乱ッ！』

十体のミストリアが両腕のブレードを構え、一斉にブースターを

点火し、円陣の中央にいるサヤに突撃する。

サヤは動かない、右拳にエネルギーを集中させることだけを考えている。

「ここが第一のタイミング。」

「ミカ！ 今だ！ 全力で走れッ！」

俺はレモナイエローのスーパーロボットの名を呼んだ。

京極はそれを聞いてもなお、ミストリアの突撃を止めない。

「今からあの距離では間に合わん！ 僕の勝ちだ！」

「いや、間に合う！」

二十本のブレードの刀身が、サヤを貫こうとした、その瞬間。

爆音と共に、衝撃波が空気を揺らし、外部から飛び込んだ稲妻のごとき速さの機体が、逆に九つの幻影を切り裂き、一つの実体にタックルを喰らわせた。

「何だと！？」

「にやああああ！」

飛び込んだ機体は、もちろんミカ。

ミストリアはタックルに吹き飛ばされつつも、ブースターで体勢を立て直し、後退する。ミカはスライディングして火花を散らし、十数メートル先で停止。

すると京極は、ミストリアの常時両腕に展開していたブレードを、収納させる。

「くっ、ライトブルーポニーテールの必殺技が切り札だと読んでいたが、レモナイエローにも技をしこんでいたか……！ ハートドライブ属性「雷」で、稲妻のごとく加速する「概念効力」とは、随分と反則臭いじゃないか！」

それを言うなら、ミストリアの概念効力の方がよっぽど反則臭い。だが！」

ミストリアは右腕を引いた。それはまるで、対峙しているサヤと同じ技を繰り出すかのような構え。

「僕は秀才だ。その程度の予測、戦う前から出来ている！ ミスト

ッ、豪華絢爛を使う！』

『……了解しました、マスター。これより、豪華絢爛を発動します』  
メイドさんの淡々とした口調に導かれて、ミストリアの右腕に異変が起きる。

ただでさえ巨大な紫色の腕だが、それが更に巨大化を始めたのだ。質量は増え続け、最終的に元の三、四倍の大きさと化する。

本当、ミストリアの『幻』の方がよっぽど反則臭い。

『君がカウンター狙いをして来ることは既に読んでいた。だから、僕もカウンター対策をさせて貰った。それがこの必殺奥義「豪華絢爛」だ。君の機体が放とうとしている技と原理は同じだよ。ミストリアのハートドライブ出力の全てを右拳に集中させている。腕が巨大化して見えるのは、ハートドライブ属性「幻」によるものだ。視覚的にそう見えるだけで、実際の腕の大きさは変わっていない。しかし……この技の威力は、巨大化した腕に相当する！』

四十メートル超の身体と、技名に恥じぬインパクトを持った、ハンマーのごとき右腕を浮かす、ミストリア。

『これが、ミストリアの、対カウンター用カウンター奥義。敵と同じ技をぶつけ、パワーで押し切る！ 先程の罅迫り合いでは遅れを取ったが、今度はそうは行かない！ 二度も奇跡は起こらない！』

京極の言葉には、絶対的な自信が溢れている。

俺は決着が近いことを感じ取る。サヤの必殺技と、ミストリアの必殺技。双方の技がぶつかり合った果てが、この決闘の終局となるだろう。

ミストリアが、ミカの方に顔を向ける。

『どうやら、そのレモンイエローの機体は、スピードを強化しただけのようだからね。例え、ミストリアに攻撃がクリーンヒットしても、大したダメージは与えられまい。故に、この攻撃は止めることは敵わない！』

そして、ミストリアのアイカメラが、サヤに向けられる。

『白坂！ この一撃で、君のピンクの機体にダメージを与え、戦い

を終わらせる！ 行くぞッ！』

俺は、ウィンドウのピンクツインテールの少女に言う。

「サヤ！ この一撃に、全てのエネルギーを乗せる！」

『うんッ！ ラブ 』

ミストリアがブースターで加速、巨大な右腕を振りかぶる。

『ファイヤアアア 』

サヤも、弓を引き絞るように右腕を振りかぶり、ミストリアを迎え討つ。

両者の距離は、三十メートル、二十メートル、十メートルと一気に狭まり

『パアアア      ンチッ！』

『豪華絢爛ッ！』

壮絶な轟音と共に、互いの拳を激突させた。

凄まじい衝撃波が巻き起こり、演習場を取り囲む防護フィールドを震撼させ、スパークさせる。

十数倍はあるつかという巨大な拳に、サヤは負けじと自身の拳をぶつけ、押し返そうとしている。

ここが、第二のタイミンク。

俺はサヤとの外部スピーカーのリンクを切断、ウィンドウの金髪癖っ毛の少女に声を掛ける。

「ミカ！ 準備はいいか？」

あくまで落ち着きながら、しかし瞳には闘志に満ちた炎を燃やししながら、彼女は頷く。

『いつでも行けるで！ ほーやん、指示を！』

「よし、ミカ、加速準備！ 位置について 』

レモンイエローのネコミミロボットは、クラウチングスタートの構えを取る。

「よーい 』

両手の指はコンクリートの地面に着けたまま、腰を地面と水平にする彼女。

俺は操縦桿を引き、機体脚部と背部のブースターを点火しながらも、ブレーキのペダルを踏み、ギリギリまで溜める。

「ドンッ！」

俺は自らが駆るスーパーロボット・ミカを、激突する二体のロボットに向かって、疾走させた。

遡ること二週間前、作戦会議をした日。

俺は自室に呼び出した三人娘に、新たに考えた作戦内容を伝えた。要点は、四つ。

「一つは、俺が乗り込むメイン機体を、沙耶から未佳に変更する」

「えー！？」

「えっ、ウチ？」

不満そうな大声を上げたのが沙耶で、不思議そうな声を上げたのが未佳である。

沙耶は「何で何で何でー！ 北斗くん、ボクのこと嫌いになった！？ 嫌いになったの！？」と涙目で飛び付いて来る。

俺は彼女の頭に手を置き、

「違う。好きとか嫌いとか、そういうことじゃなくて、模擬戦で勝つ為にどうしても必要なことなんだ」

「必要なこと？」

「そうだ。俺が二週間後の模擬戦で沙耶に乗ることは、既に京極にバれている。ラブファイヤーパンチの存在もだ。当然、カウンター対策は万全だろう」

「じゃあ、勝てないじゃん！ 今日までの、ボクの早起きと、特訓の意味は！？」

シヨックを受けたらしく、取り乱す沙耶。



「落ち着け。裏を返せば、京極は俺が沙耶に乗ると思い込んでいたということだ。だから、例えば俺が未佳に乗っていても、サヤの外部スปีカーから俺の声が流れてさえいれば、京極は俺が沙耶に乗っているものと勘違いをする。模擬戦のルールは、『パイロットが搭乗している機体の損傷率が五十パーセントを超過した時点で終了』と決まっている。ということは――」

「ミストリアは、ボクを狙って攻撃を仕掛けて来る……?」

「そういうことだ。京極は隙のない男だが、俺が沙耶に乗っていると知っている内は、必ず未佳に背を向けるタイミングが発生する。

例えば、必殺技を放つ瞬間」

「そうか、分かったよ、北斗くん！ その瞬間に、背後から未佳ちゃんに攻撃するんだね！」

「正解。ただ、それだけなら別に、俺がわざわざ未佳に乗らなくとも、沙耶に乗って、未佳に指示を出していれば事足りる。しかし、これは前にも説明したが、ミストリアは重装甲を持つスーパーロボットだ。生温い攻撃では、装甲を貫くことはおろか、装甲表面のパリアーに阻まれて、傷一つ付けることが出来ない。そこで未佳には、要点の二つ目。模擬戦までの二週間で、二つの必殺技を習得して貰う」

黄色のジャージを着た、金髪癖っ毛の少女に、俺は右手の人差し指と中指を立てて見せる。

当然の反応として、未佳は目を丸くした。

「ふ、二つも!? 無理や! さーやんでさえ、一つの必殺技を覚えるのに、二週間掛かったんやで!」

「未完成でもいい。だからこそ、成功率を上げる為に、本番で、俺が未佳に乗ってサポートをするんだ。それに俺の予想が正しければ、未佳、お前はもう、必殺技の一つを習得しているはずだ」

「え?」

首を傾げる彼女に、俺は言う。

「未佳は、五十メートル走、何秒で走れる?」

「わ、分からへんけど……走るのは好きやで、確かに。あつ、同じくらい、家でぐるぐるしてるのも好きやけど……」

「じゃあ、今日から、ハートドライブ出力を足に集中させて走る練習をしてくれるか。手を使って、四足でもいい。その場合には、両手にもエネルギーを集中させるのを忘れずに」

「で、でも何で？」

「未佳。お前は多分、無意識の内に『概念効力』を使うことが出来る」

「概念……効力？」

俺は頷く。

「ハートドライブには属性があるだろう？ 沙耶なら炎、奈美なら氷、未佳なら雷。お前達は、それらを操ることが出来る。しかし実際は、炎とか氷とか雷とか、物質的なものを扱っているわけじゃない。お前らはその概念を操っているんだ」

「に、にゃあー？」

心底分かなそうに首を捻る金髪癖つ毛の少女。

「簡単に言えば、お前はおそらく、『稲妻のように速く』走る事が出来る」

実際、消える宇宙怪獣と戦った日に、地球防衛局の廊下で追走劇を繰り広げて、そう感じた。

「う、ウチにそんなことが……？」

「ああ。とりあえず明日、実際に走って、本当に出来るか確かめてみてくれ。もしも概念効力を使えるのなら、もう一つの必殺技も簡単に習得することが出来るはずだ」

「だ、大丈夫なんやろか……」

不安そうな表情を浮かべ、後ろ頭を搔く未佳。

俺は次に、ライトブルーポニーテールの少女へと視線を移す。

「要点の三つ目は、奈美。お前の役目についてだ」

「私の役目？」

「お前には、未佳のバックアップ 京極の意識を逸らして、隙を

作り出す為に、囷役になつて欲しい」

「なっ……我が囷だと!? ふざけるな!」

当然、激昂し顔を歪める奈美。

だが、俺は首を横に振る。

「ふざけてない。大真面目だ。いいか? 新しい作戦では未佳を隠し玉にするわけだが、このままではそれを京極に悟られる可能性がある。そこで必要なのが、あたかも作戦の要であるかのような囷役だ」

具体的にどうするかというと、奈美にも沙耶と同じ、拳一点集中の必殺技を練習させる。

本命である未佳には自主訓練をさせ、俺は奈美の指導役として彼女の側に付く。

こうすることで、偵察によつて情報を得た京極は『奈美が次の切り札かもしれない』と錯覚する。

「そして、模擬戦当日にも、奈美には囷役として重要な仕事がある。戦闘の最中、京極は切り札の可能性があるお前を、優先的に潰して来ようとするはずだ。そこでお前には、わざと戦闘不能になつて欲しい」

「我に負けると言うのか!?!」

「負けるわけじゃない。勝つ為に一芝居打つて欲しいと言ってるんだ。あくまで戦闘不能を装つてくれればいい。ハートドライブの情報処理機能をフル回転させてよく考えろ、奈美。向こうが切り札だと思つているお前が、京極の狙い通りにやられ、倒れる。そうすれば向こうは、精神的に余裕が生まれ、一気に勝負を着けようと、俺が乗っているはずのサヤに攻勢を掛けて来るはずだ。この時、ミカはどうなる? 奴の意識の外。つまりは、ノーマークだ」

「その為の囷役……」

複雑そうな顔をする奈美。

しかし、これだけ徹底しなければ、あの京極から隙を作り出すことは難しい。

「むー」

ふと、背後から声がした。くいつくいつとジャージの裾が引つ張られる。

振り返ると、沙耶が頬を膨らませていた。

「未佳ちゃんが一気に二つも必殺技を覚えて、奈美ちゃんが困役になつて、結局、ボクの出番はないわけ？」

俺は首を横に振る。

「そんなことはないぞ、沙耶。言つたら？ お前には、俺が乗つてると見せかけて、ミストリアを引き付けて貰う」

「だけど、未佳ちゃんの必殺技で、ミストちゃんに攻撃するんでしょ？ だったら、ボクが今日まで特訓して来た意味なんて……」

肩を落とすピンクツインテールの少女。

そんな彼女に、俺は四本指を立てて見せた。

「要点の四つ目。これを担うのが、沙耶、お前だ」

「！」

「言つとくが、未佳と同じくらい重要だから、これが出来ないとな俺達は負けるかもしれない。いいか、よく聞けよ。ミストリアはおそらく、ラブファイヤーパンチと同じ、一点集中型の必殺技を、隠し玉として使つて来る」

「なっ……！！ どうして!？」

「ミストリアは、重装甲・重火力タイプの機体だ。俺達が一点集中の必殺技を使つて来ると分かっている以上、カウンターに対するカウンターとして考えられるのが、同一の必殺技。そして、もしも一点集中型の必殺技同士が衝突した場合、ハードドライブ出力の高い方が勝つ」

「ちょ、ちょっと待って！ そんなことされたら、ボク、確実に出力負けしちゃうよ！」

俺は「そうだな」と頷いて見せる。その上で、言った。

「だから、耐えてくれ。俺と未佳が背後から必殺技を喰らわせる、その時まで」

「あ……！」

意味を理解したらしく、沙耶は瞳を大きくする。  
俺は続ける。

「ハートドライブ出力を一点集中させている間は、ミストリアは分身することも、実体交換することもない。装甲表面のバリアーも消えて、完全な無防備となる。そこへ俺達在必殺技をクリーンヒットさせて仕留める。……これは、沙耶、未佳、奈美の誰が欠けても成し得ない作戦だ」

「……分かった！ ボク、ミストちゃんの必殺技を、なるべく長く  
凌いでみせるよ！ いや、むしろ押し切ってみせる！」

力強く頷く沙耶。俺は、彼女の頭にも手を置く。

「よし、その息だ。もしもミストリアの必殺技を押し切ったら、今  
までの恨み辛みを、ありったけ込めた拳で」

ストップウォッチを持っている方の手で握り拳を作り、同じく沙  
耶が作った握り拳と、軽くぶつけ合った。

「ミストリアのどてっ腹を、思いっきりぶち抜いてやれ！」

「うん！」

ミカの機体が激しく振動し、コクピット外からの音声が聞こえな  
くなったことで、俺は音速の壁を突き破ったのだと知る。

ぐわっと視界が狭くなった瞬間、俺はウィンドウの金髪癖っ毛の  
少女に言う。

「ミカ！ 急減速と同時に、ミストリアの真上に向けて、跳躍！」

第二の必殺技を使うぞ！」

『了解や！ 行くで、ほーやん！』

身体に激しいGが掛かる。ミカが急減速しているのだ。

同時に開ける視界。ミストリアはもう目の前。

ミカがブースター全開で、ジャンプする。周りに空の青が広がり、

モニターの高度メーターを見れば、示す数字は、地表から百九十二メートル。

遙か下方に見える、拳を激突させている二体のスーパーロボットの姿。

俺はその片方、紫色の機体に狙いを定める。

「よし、ここまででいい！ ミカは全エネルギーを右足に集中させることだけを考えてくれ！ 機体の操作は俺に任せろ！」

『頼むで、ほーやん！ はあああ！』

俺は操縦桿を握り、ミカの右足を上に振り上げる。ボディーから右足へ、進む青白いイカヅチ。電は増大を続け、レモンイエローの脚部の一点に収束して行く。

俺は外部スピーカーをオンにして、叫んだ。

「京極ッ！」

ミストリアが顔を上げ、黒いゴーグルの奥のアイカメラを黄色く光らせる。

『何！？ 白坂、まさか……貴様ああッ！』

京極が怒りの叫びを上げるが、もう遅い。

俺はパートナーであるネコミミのスーパーロボットに呼び掛ける。

「やるぞ！ ミカ！」

『うにゃあ！』

「必殺ッ！」

右足を天高く掲げたまま、機体を重力加速度に乗せ、急速降下。

『スターライト』

俺はミカの言葉に乗せるように、真下のミストリア目掛け、溜めに溜めた雷のエネルギーを、

「フオオオ ルッ！」

ハートドライブ出力一点集中の踵落としを、解き放った。

天から落ちる稲妻のごとく、ミストリアの右肩に振り下ろす。

首に巻かれた漆黒のマフラーを焼き切った。パープルカラーの装甲に電撃が走り、亀裂が走る。そして、ミカの踵がついに、装甲にめり込んだ。

ミストリアはサヤと拳を衝突させている為、防御することも、反撃することも出来ない。

俺はミストリアのパイロットに告げる。

「これで終わりだ、京極ッ！」

京極の怒号が、演習場に木霊する。

『白坂あああ　ッ！』

京極霧夜は、十四歳まで、敗北という二字を知らずに生きて来た。

正確には、敗北という単語は知っていても、実際に負けたことは、一度もなかった。

生まれてすぐに英才教育を受け始め、五歳になる頃には、小学生レベルの勉強は全てつつがなくこなせるようになっていた。

彼は何でも出来た。様々な武道を習い、運動神経も、常人の枠を飛び抜けていた。

十二歳で、某国の工科大学の博士号を得た。まさに秀才と言うべき少年だった。

十三歳の時、彼は父親に連れられて、京極工業のスーパーロボット開発の現場を訪れ、スーパーロボットに興味を持った。

父親に頼んで、彼は特別に、スーパーロボットに乗せて貰った。最初はもちろん、テストパイロットに操縦方法を教えて貰っていたが、それからわずか数十分にして、彼は自在にスーパーロボットを操って見せた。

余りの異常な上達ぶりに、専門の医師によって、彼の身体が調査された。

「霧夜様は、特殊な体質をお持ちです」

医師はそう言った。

「異常なまでの空間把握能力を持っているのです。それはつまり、スーパーロボットを、手足の延長のように扱えるということ。パイロットになれば、霧夜様は間違いなく大成することでしょう」

彼はやはり秀才であった。

彼は、京極コンツエルンを継ぐことが決まっていたが、同時に、スーパーロボットパイロットになることも決めた。

だがそれも、彼にとっては余興に過ぎなかった。若くして優れた能力を持っていた為、彼は人生に退屈していたのである。スーパーロボットパイロットになることは、彼にとって、一時的な退屈凌ぎでしかない。そう思っていた。スーパーロボットパイロット試験を受ける、その日までは。

十四歳から受けられるスーパーロボットパイロット試験は、彼にとって大した難関ではなかったが、そこでちょっとしたサプライズがあった。

そもそもこのスーパーロボットパイロット試験、十四歳の少年が受けること自体が前代未聞なのだが、その年はあるうことが、同い年のパイロット志願者が、もう一人いたのである。

霧夜は楽しくなって、ちょっととした企みを思いついた。

もう一人の志願者の少年に、自分の圧倒的才能を見せつけてやるのだ。

場合によっては、相手が深く傷付き、スーパーロボットパイロットを諦めることになってしまうかもしれないが、それもまた一興。彼は自分が楽しければ、別に何でも良かった。

ところが、実際試験を行ってみると、霧夜が想定していたものは、全く逆の構図になってしまった。

京極霧夜は、試験において、もう一人の志願者の少年、白坂北斗を、何一つ上回ることが出来なかったのである。

皮肉にも、深く傷付くのは、彼の方であった。



何しろそれは、十四年間の人生で初めて味わう、敗北という名の屈辱。彼のプライドは、スーパーロボットパイロット試験を通じて、スタスタに引き裂かれた。

結局、その年は、霧夜と北斗の二人が試験を通過して、新たなスーパーロボットパイロットとして選ばれた。

成績は、北斗がダントツの一位で、霧夜は大きく離され、二位だった。

それから今に至るまでの京極の人生は、白坂北斗の名を出さずに語ることは出来ない。

三年間、霧夜は、ひたすら自身のスーパーロボット・ミストリアの強化に勤しみ、時間を忘れる程に、自らのパイロット技術も研鑽を重ねて来た。京極家の人間としてのプライドは少なからず残っていたので、北斗の前では、いつだって余裕ぶって見せたが。

現われる宇宙怪獣に対しては、全身全霊を賭けて、叩き潰して来た。

だが、決して白坂北斗のスコアを上回ることは出来なかった。

だからこそ、つい一ヶ月前、スコアブックを見た時は、霧夜は愕然とならざるを得なかった。その月の宇宙怪獣撃破数一位の霧夜に対し、なんと北斗が撃破数ゼロで、最下位にまで転落していたのである。

ようやく念願が叶ったというのに、霧夜は不思議なことに、微塵も嬉しさを感じることが出来なかった。

むしろ、怒り狂いそうになった。というか、こめかみの血管が音を立てて、切れた。

「何をやってるんだ、あの男は……!!」

すぐに京極コンツェルンの資金を使って、人を雇い、探りを入れた。

原因は特に苦労することもなく、半日もすると、判明した。それほどに単純な原因だった。

一ヶ月前、白坂北斗は、それまで乗っていたスーパーロボット

の故障により、彼の姉であるスーパーロボット開発の世界的権威、白坂南が一年半前に製作した『少女合体サヤナミカ』という機体に乗り換えた。ところが、そのサヤナミカ、合体ロボなのにも関わらず、合体システムに問題があり、未だに一度も合体することが出来ていないというのだ。

要するに、北斗はハズレを掴まされたのである。それも、大ハズレの中の大ハズレを。

いや、だが、それならば、さっさと契約を解除して、また別の機体に乗り換えればいいだけの話だ。

霧夜に疑念が浮かんだ。

何故、白坂北斗は、一ヶ月の間、サヤナミカを手放さずにいるのか。

霧夜の知る白坂北斗は、例えるならば、ダイヤモンドのような少年である。それは、初めて会ったスーパーロボットパイロット試験の会場で、嫌という程思い知らされた。

北斗は、ももとの才能も飛び抜けているが、それ以上に、努力をして、磨き抜かれた才能を持っていた。加えて、強固な自分というものも所持している。彼はただひたすら、スーパーロボットパイロットになる為に、才能を磨き続けていた。

その白坂北斗が、一ヶ月の間、何をもたついているのか。サヤナミカの人型インターフェイスは、外見だけは可愛い少女の姿をしているというが、それに絆されたわけではあるまい。

だとしたら、何故？

それを知るために、霧夜は、朝の登校時間を狙い、直接自分の目で見て、確かめることにした。

鮮やかなピンク、金、ライトブルーの髪色をした少女達と歩く北斗は、最初こそ、何一つ変わっていないように思われたが、霧夜がカマを掛けて、

「さて、どうだか！ 蛙の子は蛙とも言っからね。結局、第一次、第二次東京決戦の英雄は死んでしまった。たまたまスーパーロボット

トに乗って、たまたま敵の宇宙怪獣と相打ちになったパイロットが英雄と呼ばれてるだけじゃないか。違うかい？ というか今現在、君は一体何をしてるんだ。そんな……ろくに合体も出来やしないう出損ないの不良品共と、何を悠長に遊んでいるんだ？」

と罵ると、北斗はそれまで見せたことのない目で、霧夜の制服のネクタイを引つ掴み、思いつき引き寄せて来た。

「っ……何を怒っているんだ、君は。親のことを馬鹿にされて腹が立ったのかい？ それとも……」

霧夜は内心、腸が煮えくり返っていた。

嘘だと思いたかった。だが、北斗は、本当にサヤナミカに絆されつつあったのだ。

スーパーロボットパイロット試験の時、自分のプライドをズタズタにした男がこうも変わり果てるのか。

白坂北斗は、もっと冷静で、強固な自分というものを持っている男だった。

それがこんなにもあっさりと、脆く、崩れ去るといつのか。

失望した。許せなかった。腹が立った。だから

死んでも負けない、こんな奴に。

霧夜は、そう思った。

『白坂あああ ツ！』

それは、京極の執念の叫びだった。

ミストリアの豪華絢爛が、向くはずのないの必殺技が、俺の乗る機体 ミカの方を向く。

まるで、京極の意思が、そのままミストリアの腕を動かしたかのようだ。

『きゃあッ!?!』

サヤが、ラブファイヤーパンチを弾かれた勢いで、十メートル程

後ずさる。

ミストリアはあろうことか、拳をぶつけ合っていた体勢から、ぶつけ合っていた拳を、裏拳としてこちらに放って来たのだ。

無理矢理で、強引だった。ミストリアの肘関節が悲鳴を上げ、亀裂が走るのが見えた。

それでも、裏拳の矛先は、確実にミカを捉えていた。

「くッ!？」

操縦桿を操作して、離脱しようとするが、間に合わない。

裏拳は、エネルギーが集中したままで、巨大に膨れ上がったままだ。

喰らったら、一溜まりもない。防御しようとも一撃で、ミカは損傷率五十パーセントを超過してしまうだろう。

どうする、どうする、どうする。くそっ……間に合わない……! 迫り来る裏拳がスローになって見える。

防御するしかない。そう思い、操縦桿を動かす。

その時だった。目の前を、ライトブルーの機影が横切った。

「ナミ!？」

見慣れたポニーテールブラスター。ボロボロのボディーで、彼女は左手を伸ばさず。

その先には、ミカが装甲を砕いて露出させた、ミストリアの肩間接がある。

ナミはそこへ左手を突っ込んだ。

途端、バキバキと音を立てて、ミストリアの右肩が丸ごと凍りつく。

裏拳の攻撃が、俺とミカの眼前で、ぴたりと静止した。右肩の可動域に氷が引っ掛かったのだ。

京極が怒鳴る。

「貴様ッ……!」

ライトブルーのスーパーロボットはそれで全力を使い果たしたらしく、外部スピーカーで呟きながら、ミストリアの肩からずり落ち

る。

『北斗……ちゃんと演技は……してみせたぞ……』

俺は、ミカのブースターを点火し、ナミを受け止めてから、ありつたけの大声で叫んだ。

「サヤアアア ツ！」

ミストリアが裏拳にエネルギーを残していたということは、すなわち、拳をぶつけ合っていた。ピンクのスーパーロボットも同じはず。果たして、サヤは既にミストリアに肉薄し、燃え盛る右拳を振り被っていた。

「この恨みいい」

黄色いアイカメラを一際強く輝かせ、彼女は必殺の一撃を、思いっきりミストリアのどてっ腹に叩き込んだ。

「はらさでおくべきかああ ツ！」

サヤの拳がミストリアに突き刺さると同時に、爆炎が噴き上がり、演習場を覆い尽くした。

俺は、ミカを着地させ、ナミを地面に下ろすと、眩く真っ赤に染まるモニターに目を細める。

爆炎が収まって行く。

演習場の中央には、二体のスーパーロボットが、対峙するようにして、立っていた。

『はあ……はあ……』

サヤは右拳から蒸気の帯をなびかせながら、肩を上下させている。おそらく、本当に全エネルギーを右手に集中させていたのだろう。相当に疲労しているようである。

一方、必殺技の直撃を受けたミストリアもまた、立っていた。全身の装甲に亀裂を走らせながらも、倒れることなく、二本の足でちやんと立っていた。

漆黒のマフラーは燃え尽きて既に無く、頭部の黒いゴーグル右片

方が砕け、黄色いアイカメラが露出している。

しかし、あれだけの亀裂が入ったボディでは、もはやまともに動くことすらも出来ないだろう。……出来ないはずなのだが。

ミストリアは動いた。足を動かし、俺の乗るミカの方へ、身体を向ける。

嫌な予感がした。ミストリアの半壊した外部スピーカーから、掠れ気味の京極の声がした。

『白坂……やってくれたな……！』

まるでゾンビみたいだった。およそ二百メートルくらい離れていて、届くはずもない手を、こちらに伸ばして来る。

その巨腕に更なる亀裂が走って、装甲が砕けて落ちる。

俺は驚きを隠せなかった。砕けて落ちた装甲の下に、やや赤みがあったパープルカラーの装甲が見える。要するに、赤紫色の装甲。

外部スピーカーから、今度はメイドさんの声がした。

『……外部装甲の規定ダメージ量、超過。パージします』

直後、ミストリアが白い煙を上げて、爆発した。比喻でも何でもなく、爆発だった。

鋼鉄の破片が散らばり、転がる。

白煙が晴れるとそこには、シャープで、女性的なフォルムをした、赤紫色のスーパーロボットが立っていた。

その機体は、表現するならば、『くのいち』のような姿をしている。全長はミストリアに比べ大分小さく、サヤナミカ三機と同じ、約二十五メートル程。全体的にスマートで、各部が細い。高速戦闘型の機体のようなだった。太腿に装着されているのはおそらく、ビームの忍者刀か何かだろう。

『まさか、これを使うことになるとは、思わなかったよ……』

黄色いアイカメラが光り、機体の外部スピーカーで、京極が言った。

額から嫌な汗が出る。

「嘘……だろ……？」

『残念だが、目の前の出来事は現実だ、白坂。ミストリア四式の隠し機能、パージシステム。過剰なダメージを受けた外部装甲を破棄し、ミドルサイズのスーパーロボットへと変身を遂げる。基本的に緊急脱出用の保険だが、決して戦闘能力が低いわけじゃない。このヴァルキリーミストリアは、通常のミストリア四式と異なり、重量を極限まで削った、軽量高速戦闘型の機体だ。つまり、スピード一点特化型の機体。……おあつらえ向きじゃないか、白坂。君の乗っているレモンイエローの機体も、スピード重視なんだろう？』

ヴァルキリーミストリアは、右腕を垂らしたまま、左腕を太腿にやると、忍者刀を抜き、逆手で構える。展開するビームの刀身。

『右腕は先程、無理矢理関節を動かしたせいか操作不能だが、それでもヴァルキリーミストリアの損傷率は、十三パーセント。まだ十分に戦える！』

『マスター、豪華絢爛の使用により、ハートドライブ出力も四十七パーセントまで低下しています。幻影の同時展開は四体が限界です』  
『構わん！ 疲弊しているのは向こうも同じだ！』

次の瞬間、ミストリアがブースターでミカに肉薄して来て、加えて幻影を四体作り出す。

「マズい！ ミカ、何とか回避を」

ミストリアが忍者刀を構えると同時に叫び、操縦桿を動かすが、  
『ぐっ……！』

ミカの膝がかくんと折れる。モニターに『ハートドライブ出力低下』の文字。

抱えていたナミを支えられず、取り落としてしまう。地面に倒れるライトブルーポニーテールの機体。

「ミカ！？」

『あかん、こつちも概念効力の加速と、スターライトフォールで、エネルギーを使い過ぎ……うぐあッ！？』

バキィッ！ と金属が貫かれる音が響き、ミストリア二体の刃が、ミカの両膝の間接を貫く。

「しまった……！ 両足を！」

京極の『はーっはっはっはっはー！』という笑い声が、演習場に響き渡る。

『まだ攻撃は終わってないぞ！』

残り三体のミストリアが迫り来る。俺はとっさにミカの腕を前に構えさせ、防御姿勢を取った。けれど。

『がっ！ ぐっ！ きゃああああ！？』

多勢に無勢、ミカのボディは連続攻撃でどんどんと装甲を斬り裂かれて行く。

ついにはまともに立つこともままならず、その場で両膝を着いてしまう。

「ミカ！ 大丈夫か、ミカ！？」

『大丈夫……や……この……くらい……』

AIにノイズが走り、途切れ途切れに言う彼女。モニターに示された損傷率は、四十四パーセント。

あと一撃まともに喰らったら、試合が決まってしまう。

「くそっ……ここまでなのか！？」

操縦桿を握り締める。

一ヶ月の間、三人娘と共に、模擬戦に勝つために出来る限りの努力をして来た。

途中、透明になる宇宙怪獣に負け、三人娘は挫けそうになって、それでも再び立ち上がった。

俺の考えた作戦が見透かされて、代わりとなる新しい作戦を考えて、彼女達はちゃんとそれに付いて来てくれた。

そして、京極の裏をかき、必殺技をクリーンヒットさせることが出来た。

だというのに。

「最後の最後、読み切れなかった……！ 奴の切り札を……！」

ミストリアの二重装甲。京極が用心深い男であることは、分かっていたはずなのに！



「すまん……三機共……！」

『手こずらせてくれたな、白坂』

ミストリア一体が、ミカと俺の前に立つ。逆手に構えた忍者刀上方に構え、切っ先をこちらに向ける。

『やはり腐っても、最年少でパイロットになった男だけはある。』

……まさか、その不良品共を使つて、ミストリアをここまで追い詰めるとは思わなかったぞ。しかし、これでチェックメイトだ』

「くっ……！」

絶望感が押し寄せる。もはや抵抗することは無意味だ。これ以上の策は用意していない。足掻いたところで、ミカを無駄に傷付けるだけだ。

「……京極」

『何だ？ まさか命乞いか？』

「そうだ。俺はお前に降伏」

俺は操縦桿から手を離し

『そんなの、絶対に駄目だッ！』

コクピットに、一人の少女の声が響き渡った。

顔を上げると、

『北斗くんとミカちゃんから、離れるおおッ！』

ブースター全開で突っ込んで来て、長くしたファイヤーブレードで幻影を一気に薙ぎ払う、ピンクツインテールの機体が、そこにいた。

残った実体のヴァルキリーミストリアは、忍者刀で炎の剣を受け止める。

『くっ、ピンクツインテール！ この期に及んで、邪魔を……！！』

京極は、バックステップで百メートル程後退。一旦、距離を取る。俺はミカを守るように立つ、ピンクのスーパーロボットを見上げた。

「サヤ……！」

『北斗くん！ 今、あのオールバックに降伏しようとしてたでしょ』

！？ そんなの駄目だよ、絶対！」

彼女は疲労を隠せず、肩で息をしながらも言う。

「けど……もう何も策がない。このまま続けたって、お前達に無駄な損傷を負わせるだけだ！」

「だとしても！ ボクも、ミカちゃんも、ナミちゃんも、降伏なんて望んでない！」

「その……通りや……！」

モニター上のウィンドウは消滅してしまっているが、金髪癖っ毛の少女は、途切れ途切れながらも、言う。

「ほーやん、ウチ……まだ……負けてへん……！ だから、最後まで、諦めちゃ駄目や……！」

「ミカ……」

「勝ちたいんや……！ ウチ……勝ちたい……！」

泣きそうな声。俺は、胸が締め付けられるように痛む。

「だけど……！」

どうしたらいいのか、分からない。この状況を打開する方法が思い付かない。ナミは既に倒れ、ミカは大きなダメージを受けて満身創痍、加えて膝間接を破壊されて、もうまともに動けない。唯一ダメージを受けていないサヤでさえ、全身全霊で必殺技を放ち、目に見えてハートドライブ出力が低下している。

対するヴァルキリーミストリアは、片腕一つが動かず、ハートドライブ出力が低下していても、まだ四体の幻影を作り出せる。装甲を捨てたことで運動性能も大幅に上がり、おそらくサヤー機では、実体に攻撃を当てることは不可能だ。

「俺はもう……何もしてやれない……！」

『信じて』

「え？」

モニターの中央にウィンドウが開いて、ピンクツインテールの少女が映し出される。

彼女は真っ直ぐな瞳で俺を見て、言った。

『ボク達を信じて。ただ、それだけでいい』

そこには戦いによる恐怖など無く。穏やかで、柔らかな微笑み。彼女は小首を傾げながら、

『あのね、北斗くん。ボク達はもう、十分に助けて貰ったよ。博士に無理矢理押し付けられたのに、見捨てないで、とつても優しくしてくれて、一生懸命、鍛えてくれて。ボク、この二ヶ月間、とつても楽しかった。北斗くんからは、沢山、沢山、色んなものを貰ったよ。だから、もういいんだ。何もしてくれなくていい。ただ、信じて。ボク達を信じて。それだけで、ボクは……ボク達は戦えるから』

「サヤ……！」

『うおおおお ツ！』

彼女は吼えた。両手から通常の何倍の長さもあるファイヤーブレードを展開し、ヴァルキリーミストリアに突撃して行く。

『そこを退け、ピンクツインテール！』

京極は四体の幻影を展開。サヤと交戦を開始する。

炎の双剣が幻影を斬り裂き、幻影がピンク色の装甲を斬り裂く。サヤの攻撃は、ミストリアに当たらない。それでも、一歩も退くと無く、片っ端から幻影を打ち消して行く。

『しつこい！ そんな力任せの攻撃で！』

『北斗くんの所へは、行かせない！』

『馬鹿が！ 言ったはずだ、ミストリアのハートドライブ属性である「幻」は』

はっとなつて、俺は背後を振り返る。そこには、忍者刀を振り下ろさんと構える幻影の姿が。

『実体から半径一キロ以内ならば、どこにでも幻影を出現させられるんだよッ！ 今度こそ貰った！』

『ミカちゃん！』

サヤが叫ぶ。その声に応えるようにミカの片手に稲妻が走り、

『……にゃああああ ツ！』

背後のミストリアに向かって振り抜き、幻影を両断する。

「ミカ、お前……！」

全身、ボロボロなのに。AIにだって、ノイズが走っているのに。  
「なっ……！ たかだか一体の攻撃を防いだくらいで！」

京極も負けじと叫ぶ。ミカの四方を取り囲むように、四体の幻影  
が出現。間髪入れず、忍者刀を振り下ろす。

「くっ!?」

俺は操縦桿を握り直し、反射的にガードしようと構えるが、

「ナミちゃんッ！ お願ひ、北斗ちゃんとミカちゃんを守って！」

「……言われずとも……アイス、ウオオオ ルッ！」

真横から凜とした声上がる。

ミカの周囲に幾つもの分厚い氷の壁が出来、忍者刀の斬撃を防御  
した。

見れば、うつ伏せに倒れているライトブルーポニーテールの機体  
が、片手で起き上がろうとしている。

「ナミ……！」

「ミカへの攻撃は、我が全て防ぎ切ってみせる……！ だから、サ  
ヤ……お前は、目の前のミストリアに集中しろ！」

彼女は顔を上げ、サヤに向かって言う。

サヤは頷き、

「任せて！ だああああ ツ！」

再び、ヴァルキリーミストリアに突っ込む。

「おのれ……不良品共があッ！」

怒鳴り声を上げ、京極は応戦。幻影四体を呼び戻し、サヤと激突  
する。幻影と実体交換を駆使し、サヤを翻弄しながら、

「いいだろう！ そこまで僕の邪魔をするなら、ピンクツインテー  
ル……先に貴様を倒す！ 貴様が居なくなれば、残るのはまともに  
動けない二機だけ！ 決着したも同然だ！」

「そつだよ……ボクが相手だ、ミストリアッ！」

サヤが二本のファイヤーブレードを振るう。

ヴァルキリーミストリアが五方向から迫り来る。サヤはファイヤーブレードにエネルギーを注ぎ続け、ひたすらに刀身を伸ばす。リーチを長くする為だ。

そして、近付かれる前にミストリアの幻影を斬る。両断する。薙ぎ払う。

特別剣技の心得があるでは無いサヤの立ち回りは無茶苦茶で、がむしゃらだ。しかし、それ故に、ヴァルキリーミストリアとの戦う姿は、壮絶な光景となって、氷の壁の隙間から、俺の瞳に映し出される。

京極の方が技量で上回り、サヤは度々隙を突かれ、ボディーに斬撃を喰らって行く。コクピットのモニターに表示される彼女の損傷率は少しずつ上昇し、三十二パーセントに到達する。

京極が言う。

『もついい加減、諦めたらどうだピンクツインテールッ!』

その頃には、サヤのファイヤーブレードは大分短くなっていった。足下もふらつき、肩が大きく上下している。ハートドライブを無理に稼働させ過ぎたのだ。

『諦めない……!』

『そうか。ならば、仕方がない……沈め!』

五体のヴァルキリーミストリアが一斉に飛び掛かる。

俺は思わず、「サヤ!」と叫んでしまうが、

『絶対に……諦めなあああ　いッ!』

次の瞬間、サヤの全身から炎が巻き上がり、ファイヤーブレードが一気に肥大化。とっさにブースターで飛び退いた実体を除く四体の幻影が、斬り裂かれ消滅する。

『何だと!?　何が起こっている!?!』

驚愕の声を上げる京極。

驚いたのは、サヤ本人も同じようで、自身のボディーを見やりな

がら、

『何だこれ……全身から力が湧き上がって来る……!』

コクピット内に、ミカの声が響く。

『まさか……あれ……さーやんの概念効力やるか……?』

「概念効力だつて……!?!」

俺が言つと、横でナミが身体を起き上がらせて、口を開く。

『さながら……「火事場の馬鹿力」と言つたところか』

京極もサヤの力が何なのか、思い至つたらしく、

『概念効力を発言させたというのか……この土壇場で……!?! しかもハートドライブ出力を上昇させる能力だと……!?! ふざけるなよッ!』

忍者刀を振り、ファイティングポーズを取るミストリア。

サヤはファイヤーブレードを消し、代わりに片手を大きく引く。

握り拳を作り、足下から炎が逆巻く。

『これなら……行ける!』

炎はピンクのボディを伝い、拳の一点へと集中して行く。

それは、彼女の必殺技『ラブファイヤーパンチ』の構えだった。

ただし、見て分かる程に今までとエネルギー量が違う。概念効力を発動させた彼女の拳は、押さえ切れないエネルギーが荒ぶり、その表面で太陽のプロミネンスにも似た現象を発生させている。

『くっ……だが、幾らハートドライブ出力が上昇したところで、攻撃が当たらなければ、意味は無い!』

ヴァルキリーミストリアが五体に分身、サヤを包囲する。

『その必殺技を使う以上、カウンターを決めるつもりだろうが、ミストリアの必殺技「百花繚乱」は、それを防ぐ為の奥義! 貴様の攻撃は、絶対に当たらない! ミスト!』

『はい、マスター。参ります』

五体のミストリアが全く同じタイミングで加速、一瞬で距離を詰める。

『必殺奥義! 百花繚乱ッ!』

一斉に迫り来る刃。しかしサヤは、回避行動を取らず、それを真っ正面から迎え撃つ。

『攻撃が当たらないなら、ボクは  
彼女は思いきり拳を振るった。』

『別のところに当てるだけだッ！』  
真下のコンクリートの地面に向けて。

大爆発が起こった。炎が柱となって天に伸び、サヤとミストリア五体を飲み込んだ。伸び過ぎた炎柱が、演習場の防護フィールドに突き刺さり、耐え切れずスパークを起こし、ついにはフィールドが砕け散る。凄まじい爆風が、その熱気で、ナミの作り出した氷の壁を溶かす。

やがて、炎柱が消失し、爆風も収まる。爆心地には半径百メートル程のクレーターが出来上がっていた。

果たして、サヤとミストリアは  
両機とも立っていた。サヤもミストリアもボロボロになって、それでもまだ、立っていた。

『ぐっ……！』  
各部の破損個所からスパークを起こし、呻くサヤ。ツインテールバインダーの片方は破壊され、複数の装甲が剥がれ落ち、モニター上のデータが示すその損傷率は、なんと六十四パーセントにまで達している。

一方のミストリアは、サヤよりは軽傷だが、やはりふらついている。

『ミ、ミスト……損傷率は……？』  
『はい……とっさにバリアーを展開しましたが……くっ……四十二パーセントです……！』

そんな馬鹿な、と俺は叫びたくなかった。傍目に見ればもう、互いの損傷度合いは模擬戦の範疇を超えている。しかし、ルール上はまだ、決着になっていない。

サヤはまた動き出す。概念効力は持続していないらしく、構える

拳には輝きが灯っていない。だが、一步一步、おぼつかない足取りでミストリアに向かって行く。

そんな彼女の姿に、俺は居ても立ってもいられなかった。

あいつに、勝たせてやりたい。

素直にそう思った。

このまま見ているだけなんて出来ない。

「考える……！」

考える、俺。何か……何か無いか？ 今の俺にも出来ること。

その時、隣のライトブルーポニーテールの機体を見て、はっとなる。

「ナミッ！」

俺は彼女に呼び掛けた。

『な、何だ！？ どうした、北斗？』

『お前、まだ動けるか？』

『……！ ああ、我を誰だと思っっている！』

何かを感じ取ったのか、力強く頷くナミ。

俺は自らの願いを口にした。

「頼む！ 俺を……サヤのもとへ連れて行ってくれ！」

意識が……朦朧とする。視界が、霞む。

それでもボクは、歩く。走れば転んでしまいそうだったけれど、

少しずつ足を早めて行く。

まだ決着はついていなかった。だから、ここで倒れるわけには行かない。

概念効力は、先程の一撃による反動が発動せず、もはや何か技を放てるだけのエネルギーは残っていない。

ボクは拳を握り締める。残っている武器は、これだけだ。

あとは、一人の少年がくれた、たった一つの言葉。



一緒に、頑張ろう。

それさえ胸にあれば、ボクはまだ戦える。

たとえ、彼が乗っていないなくとも、すぐ近くにいないなくとも。君が頑張ろうって言うてくれたから、ボクは……。

『まさか自身を巻き込んでまで、こちらにダメージを与えてくるとは……！ ピンクツインテールッ！』

オールバックが叫び、ヴァルキリーミストリアが三体に分身する。先程の一撃でダメージを受けたのは向こうも同じらしく、分身の数は減り、動きはいささか鈍い。

「ミスト……リアアアアッ！」

ボクは今出来る全力の走りで、ミストリアに突撃する。拳を引き、真ん中の一体に狙いを定める。

AIに度々ノイズが入って、拳に残存エネルギーが上手く集まらない。

『どうやらもう、限界らしいな！ だったら大人しく、沈んでるおぉッ！』

ミストリア三体が、ボクを引き付けてから、同時に反撃に出る。

襲い来る方向は、左斜め前、真正面、右斜め前。

ボクは迷わず、真正面の一体に狙いを定める。今はもう、勢いのまま攻撃する以外に選択肢が無かった。

当たれ。頼むから、当たって。

後はもう、願うことだけ。

けれど、その時。

『サヤ！』

彼の声がした。

すぐ近く。思わず、そちらを向く。

ライトブルーの機体 ナミちゃんが、ポニーテールブースターを使い、高速で突っ込んで来た。

構えるのは左の掌。青白く発光したそれで、ミストリアの一体に触れる。

『アクトフレイイイ　ズツ！』

変化が起こった。ミストリアの分身二体が消滅したのだ。残った真正面のミストリアから、驚愕の声が上がる。

『何ッ！？』

そして、彼　北斗くんが大声で叫ぶ。

『サヤ、行つけえええ　ッ！』

その瞬間、全身から力が湧き上がるのを感じた。

概念効力とか、そんなのじゃない。理屈は関係ない。

ただ、彼が応援してくれるから。

ボクは右足を踏み込む。ミストリアは目の前。

右拳を固く握り締める。残存エネルギーの全てをそこに込める。

ミストリアの顔面に向けて、

「うおおああああああああああああああ　ッ！」

全力で拳を振り抜いた。

模擬戦が終わった後。

俺はナミとミカを整備班に任せて、一人の少女の元へと急いだ。

演習場の中央、地面に叩き込んだ必殺技で出来た、半径百メートル程のクレーターの中で、ピンク髪ツインテールの少女が瞳を閉じ、横たわっている。ナノマシン欠損が激しい為に、AI停止と共にセーフティモードが起動して、人間の姿に戻ったのだ。

俺は彼女に駆け寄ると、その華奢な身体を、そっと抱き起こす。すると、俺が声を掛ける前に、彼女が薄っすらと瞳を開ける。

「んっ……」

「沙耶！　大丈夫か！？」

彼女はゆっくりと俺を見て、

「北斗……くん……？」

「あんま喋るな！ ちよつと待つてる。すぐに整備班が来るから」

「ねえ……模擬戦は……勝負は……どうなったの？ ボク達……勝ったの……？ それとも……負けたの……？」

「勝ったよ……！ 勝ったんだよ。凄えよ。お前ら、勝ったんだ……！」

果たして、サヤ渾身のパンチは、反応の遅れたミストリアの顔面に炸裂。アイカメラを破損させ、二十メートル程吹っ飛ばして、そして。

俺は離れた所にいる、オールバックの男を見やる。目が合って、

「くっ……！」と悔しそうな顔をする彼の腕の中には、AIを停止させて眠る、メイドの少女の姿があった。

「そっか……よかったあ……」

と微笑む沙耶。

「これで……やっと一つ……北斗くんの役に……立てたね……」

「え？」

「この二ヶ月……ボク達のせいで……北斗くんは凄いパイロットなのに……皆から馬鹿にされて……。ボクは……それが苦しくて……申し訳なくて……。でも……これで……スコア一位を破ったんだもん……北斗くんはまた……自称じゃなくて……天才パイロットに……返り咲けるよね……？」

「まさかお前……そんなことの為に……？」

「こんな……宇宙怪獣に負けた時より、ボロボロになって。」

必殺技を足元に撃って、自分ごと敵を敵を吹っ飛ばすなんて無茶をやって。

たかだか模擬戦なのに。

俺は彼女を抱き寄せた。

背中を手を回して、ぎゅっと力を込める。

「馬鹿じゃないのか……お前……！」

「北斗……くん……？ どうしたの……？ もしかして……泣いて

……るの……？」

「泣いてねえよ！ 泣くわけないだろ！ この俺が、こんなことくらいで！」

「ごめん……ごめんね……北斗くん……泣かないで……ボク……大丈夫だから……」

「うるさい！ 喋るなって言っただろ！ お前が思ってるよりずっと、損傷酷いんだからな！」

「うん……ごめん……ね……」

「何で謝る！ ワケ分からん！」

「ごめんね、ごめんねと繰り返すもんだから、俺は沙耶を抱き締めて、彼女の顎を肩に乗せて、「いいから休め」とピンクの髪を撫で続けるしかない。

やがて、疲れたのか、耳元にスースーと彼女の寝息が聞こえて来る。

俺はもう一度、ちゃんと彼女を抱き締めて、言った。

「……ありがとう、沙耶」

エピソード 沙耶の決意（前書き）

## エピローグ 沙耶の決意

あれから、三日が経った。

水曜日で、世間一般には平日であり、俺はちゃんと学校に行った。高校のクラスにおいては、サヤナミカ三人娘は一応、人気者であるので、皆が心配そうに「白坂くん、サヤナミカの三人は大丈夫なの？」「沙耶ちゃん達、いつ頃学校に出て来れそうなんだ？」と尋ねて来る。

なので俺は「心配してくれて、ありがとな。三人共、元気だよ。ただ、検査とか色々あって、まだちょっと時間が掛かりそうなんだ」と言っておいた。それから少し迷ったが、ついでに「よければ今週末とか、見舞いに行つてやつてくれないか？ あいつらも喜ぶと思っただけど……」と頼んでみると、クラスメイト達は皆、喜んで頷いてくれた。

三人娘が来る前は、俺はクラスメイトとは一定の距離を置いていて、全くと言って良い程に喋らなかつたのだが、この二ヶ月、三人娘が間に居たせいか、今では普通に会話を交わすようになっていた。そうして放課後を迎え、俺は制服のまま、地球防衛局関東第一支部の病室に向かう。

ノックして開けると、昨日精密検査が終わり、一緒に部屋にまとめられることとなったスーパーロボット三人娘の姿があつた。

「あーうー」「にやああー」「一級品のスーパーロボットである我が、何故こんなことを……！」

白いベッドの上にオーバーテーブルを出し、あるいは画板を使い、それぞれが呻き、顔をしかめ、シャープペンシル片手に原稿用紙の束と格闘していた。

「おーい、お前ら。ちゃんとやってるか？」

「あつ、北斗くん！ 痛っ!?!」

こちらに気付いた沙耶が、ぱつと立ち上がるうとして、オーバー

テーブルに膝を打ち、悶絶する。

「沙耶。はしゃいでないで、ちゃんと反省文を書け」

そう、彼女達は、関東第一部の司令 羽柱鈴音から反省文を書くように命じられていた。最低でも四百字詰め原稿用紙百枚以上「無理だよ！ こんなに一杯書くのは無理！ 頑張つて昨日からで二十枚くらい書いたけど！ これ以上は何も思い浮かばないよ！」膝を打った痛さもあつてか、半泣きになりながら、ぶんぶんと首を横に振って、ピンクツインテールを荒ぶらせる沙耶。

ばんっ！ とライトブルーポニーテールの少女がオーバーテーブルを叩き、沙耶にシャーペンを向けて、言った。

「ええい、うるさい！ 集中出来んだろうが！」

「だって、奈美ちゃん！ 百枚だよ、百枚！？ 単純計算で四万字！ 不可能だよ、こんなの！」

「元はと言えば、お前が後先考えずに、演習場のバリアー破つて、発生装置を使い物にならなくなったのがいけないんだろうが！ おかげで我までこんな目に……！」

「わざとじゃないよう！ というか、あの状況でミストちゃんに勝つには仕方が無かつたんだよ！」

「それに、お前はまだ楽な方だ！ 見る、我なんか右腕を修理しているせいで、慣れない左手で文字を書いているんだぞ！？」

奈美は、肩から包帯で吊したギプス付きの右腕をアピールして見せる。

言われてみれば、奈美の利き手は右であつた。昨日俺から原稿用紙を渡した際には、不機嫌そうに眉間に皺を寄せていたが、特に文句を言つて来なかつたので、すっかり失念してしまつていた。

「奈美」

「何だ、北斗！？」

俺が声を掛けると、イライラしている様子で振り向く。

「よければ俺が、代筆してやるうか？」

「なっ……はあ！？」

切れ長な瞳を丸くして、瞬きをする彼女。

「利き手が使えなくて、文字が書きにくいんだろ？ だったら思い付いた文章を口にすれば、俺が代わりに原稿用紙に書いてやるよ」俺は適当な所にスクールバッグを置くと、奈美の隣に椅子を持って行って、腰掛ける。オーバーテーブルに身を乗り出すと、

「ちよっ……近い！ い、いらん！ 代筆なんて、いらん！」

恥ずかしそうに顔を赤くして、首を横に振った。

「遠慮するな。その怪我をさせたことや、お前らが反省文を書くことになったのは、俺にも原因があるわけだし」

何故彼女達が反省文を書かされているのかと言えば、奈美の言った通り、沙耶が必殺技で演習場のバリアーシステムを破壊してしまったことも原因の一つなのだが、正確には、総じて、模擬戦で色々やり過ぎたことが問題になり、こうなっているのだった。

何せ最終的に、サヤナミカ三人娘もミストリアも、消える宇宙怪獣と戦った時より損傷が酷くなってしまった。サヤに至っては、大破寸前だった。本当はバリアーシステムが破壊された時点で、模擬戦を中止するよう、スピーカーから指示が出ていたそうなのだが、全員が全員勝負に熱くなって、完全に聴き逃していた。

模擬戦の後、三人娘とミストさんは整備室に運ばれ、俺と京極は司令室に呼ばれて、鈴音さんに滅茶苦茶怒られた。

あそこまで怒られたのは、スーパーロボットパイロットになって以来初めてだった。

俺と京極には、一週間の謹慎処分と三ヶ月の減俸が下された。あれだけやらかしたにも関わらず、あり得ないくらい寛大な処置だった。

姉さんから聞いたところによると、サヤナミカの開発グループと、京極工業の開発グループの面々が、模擬戦に感動して、最後には互いに握手を交わしたりして、俺達の処分を軽くするよう、鈴音さんに頼んでくれたらしい。

「に、人間と一緒にするでない！ 我はスーパーロボットなのだか



ら、利き手じゃなくても文字くらい書ける！　ただ少し慣れないだけだ！　……というか、貴様だって、反省文百枚とその他報告書とか諸々、課されていたであろう！？　代筆なんかしてる暇があったら、そつちをやれ！」

奈美が原稿用紙とシャーペンを守りながら言う。

俺は諦めて身を引きながら、ため息をつく。

「見えないところで真面目にやっつてんだよ。昨日の夜だって、反省文二十五枚書いて、報告書の山と格闘してたんだ」

朝方までやっていた為、若干寝不足である。

「にゃー、ほーやーん」

と、金髪癖っ毛の少女が俺を呼ぶ。

「どうした、未佳？」

「代筆するならむしろ、ウチの方を手伝ってやー」

「あー、確かに辛そうだな」

未佳は他の二人と違い、ベッドに固定された器具で包帯ぐるぐる巻きを両足を吊しているの、上半身を起こすのが辛い体勢であり、オーバーテーブルを使えず、代わりに画板を腹部に立てて、原稿用紙を書いていた。

彼女は言った。

「この体勢だと、胸が邪魔で、原稿用紙が見づらいんや」

「自慢かっ！」

奈美がキレた。

「ちやうつて、本当なんやつて。ほら、こつ仰向けやと、ウチ胸が大きいから、どうしても視界を遮るようになって」

「我慢しろ、それくらい！　おい、北斗！　そんな奴の代筆をする必要は無い！　やるくらいなら、私の代筆をしろ！」

「えっ、今さつき、代筆はいらないって……」

「気が変わったのだ。ほら、横に座れ！」

そう言っつて、オーバーテーブルを叩くライトブルーポニーテールの少女。

未佳が、にやふつと笑って、

「何怒つとるんや。なーんは、自分のスレンダーな体型に自信を持つとるんやろ？」

「その通りだ！ そんな脂肪の塊など、あるだけ邪魔だ！」

「だったら、別に怒る必要なんかあらへんやないか。何言われたって、平気なはずやろ？」

「ああ、平気だとも！」

「貧乳」

「ふん、そんな安い挑発……」

「絶壁」

「……」

「妖怪ぬりかべ」

「ふっ……ふふっ……どうやら私の概念効力で、貴様の口を動かなくする必要があるようだな……！」

恐ろしく怒りの沸点が低いスレンダー少女であった。

奈美は左手にエネルギーを集中させ、青白く輝かせる。

しかし、未佳は全く恐れる様子がなく、枕元に置いてあるフルーツバスケツトの中からリンゴを取り、俺に視線を向ける。

「ほーやんほーやん、代筆はともかく、昨日みたいにリンゴ剥いてくれへん？」

「ちよっ！？ 我を無視するな、未佳！」

「うにやー、だって、なーんは概念効力って、触れた者の行動を一つ、凍結するだけやろ？ しかも現状、数秒しか保たへんし。ほ

ーやん、リンゴ〜」

「はいはい、分かったよ」

「おのれ、覚えているよ未佳！ 我はいつかこの概念効力を進化させ、行動だけで無く、周囲の時間をも凍結出来るようにして」

「なるほど、それで胸の成長も凍結されてるってわけやな？」

「貴様ああー！」

「にやははは！ 冗談や！ 冗談やってー！」

ついにはベッドから起き上がる奈美。未佳は楽しそうに笑いながら、それを相手している。

俺は病室に設置されてる食器棚から、折り畳み式の果物ナイフと皿、楊枝を取り出し、リンゴを手早く剥き始める。

と、一番窓際のベッドで反省文を書いている沙耶に呼ばれた。

「北斗くん」

手招きされているので、椅子ごと彼女の隣に持って行く。リンゴを剥きつつ、

「どうした？ 代筆ならお断りだぞ」

「酷くない！？ 一応ボク、一番損傷が酷かったんだけど！」

「お前はもう、ピンピンしてるじゃないか。別に腕と足とか使えないうってわけじゃないし」

「いや、よく見てよ！ ボク、五体満足に見えて、割と全身包帯ぐるぐる巻きだからね！？ ほら！」

パジャマの裾をめくって、腹部を見せてくるピンクツインテール娘。

俺は容赦なく額にチョップをくらわす。

「あ痛っ！？ 何するのさ、北斗くん！」

「男に平然と腹とか見せるんじゃない。はしたないだろ」

「でも、北斗くんは平然と、ボク達のパンツとかブラジャーとか干したり畳んだりしてるじゃん！」

「言っとくけどソレ、別に好きでやってるわけじゃないからね！？ お前らが誰一人家事やろうとしないからだからね！？」

一度、本気で家事をボイコットしてやるうかと思う今日この頃である。

「というか、ボクは代筆で北斗くんを呼んだわけじゃないよ。ちょっと話があるから呼んだの」

「話？」

「うん。今後のことで、決意表明をしておこうと思って」

俺が何事かと首を傾げていると、沙耶は張り切って言う。

「あのね、今回の模擬戦を通して、ボク、改めて思ったんだよ。ボク達のパイロットには、やっぱり、北斗くんが良いなって！」

「それはつまり……俺に、サヤナミカの正式なパイロットになって欲しいってことか？」

剥き続けて皮の長くなりつつあるリンゴに視線を落とす。

「うん！ ただ、北斗くんは今のところ、ボク達をサヤナミカに合体させたら離れて行こうって考えてるんだよね？」

「……まあ、そうだな」

今まで明言はして来なかったが、間違いなく事実なので頷く。

奈美と未佳には聞こえていないようで、胸のあるないで言い合いを続けている。

「だからね、ボク、決めたんだよ」

「何をだ？」

「ボク、北斗くんを惚れさせる！」

果物ナイフの強弱をミスって、全体の三分の二くらいまで繋げていた皮を切り、落としてしまう。

俺は思わず、沙耶の顔を見た。

彼女は笑っていた。

「サヤナミカに合体出来るようになるまでに、北斗くんが乗りたいて思うような、強くて格好良いスーパーロボットになってみせる！」

「……ふうん」

俺はリンゴの皮剥きを再開する。

「北斗くんは天才パイロットなんだから、当然、優れたスーパーロボットに乗りたがるよね？ だから、ボク達ももっと強くなって、他のスーパーロボットよりも優秀だって示せばいいんだって、気付いたんだよ！ あと、ついでに女の子としても魅力的になって、惚れさせちゃうと完璧だよな！ 公私共にパートナー、みたいな！

えへへー」

自分で言ってる照れ臭くなったのか、赤くなった頬を押さえる沙

耶。

リンゴの残り三分の一が剥き終わる。六等分に切り、皿の上に乘せて、楊枝を一本刺す。

「……じゃあ、俺からも一つ言っとくがな」

彼女に皿を差し出して、告げた。

「俺の理想は、滅茶苦茶高いぞ？」

楊枝の刺さったリンゴを手に取ると、力強く頷き、

「望むところだよ！」

彼女は、シャクシャクとリンゴを咀嚼する。美味しそうに顔を綻ばせて、

「んふっ、あま〜い」

「はっ……」

「あつ、北斗くん、笑った!? 今、笑ったよね!？」

「お前が悪い。そんな緩んだ顔をするから」

「だって、リンゴが美味しいんだもん! 北斗くんだって、食べてみれば分かるよ、ほら!」

楊枝に新しいリンゴを刺して、俺に勧めて来る沙耶。

なので俺は、そのリンゴを指で取り、口に放り込む。

「ちよっ!? せつかくボクが、あーんってしてあげてるのに!」

「そんな小っ恥ずかしいこと、男はしないんだよ」

噛み締めたリンゴは、確かに、甘くて、美味しくて。

そして、とても爽やかな味がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8705j/>

---

少女合体サヤナミカ

2011年11月29日03時10分発行